

---

# 元主人公、今は脇役願望。

花澤 文化

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

元主人公、今は脇役願望。

### 【Nコード】

N2828L

### 【作者名】

花澤 文化

### 【あらすじ】

空から美少女が降ってきたとき、あなたならどうしますか？

「非日常」が大嫌いな少年、井野宮天十。

そいつと仲間が織り成す、異能バトルファンタジー。

「今の俺は脇役なんだよ」

<http://ncode.syosetu.com/n5817>

1 /

過去編はじめました。

## プロローグ〈脇役願望〉

空から少女が落ちてきたとき、あなたならどうしますか？

少女じゃだめかもしれない。「美」をつけよう。美少女ならどうするだろうか？

助けるか。

それとも

見て見ぬふりをするか。

助けるを選んだやつ。お前が求めているのは「美少女」なのかもしれないが、それは同時に「非日常」を求めているということになる。空から落ちてくる奴なんて、大抵はめんどろ事をかかえているもんだらう。

見て見ぬふりを選んだやつ。尊敬するよ。そいつは今の日常に満足しているということだ。物語的には脇役という存在だが、それは決して悪いことじゃないと思うんだ。

主人公の親友、通行人A、その他もろもろ。確かに目立たないし、いつも通りの日常を過ごし、明日になる。変わり映えのしない毎日。それを死ぬまで繰り返す。

俺はそういうやつらになりたいよ。

主人公？そんなのには決してなりたくない。ヒロインに振り回され

て、疲れて、バトルものだと痛い思いをする。そんなのは嫌だ。絶対に嫌なんだ。

なのに、どうして。どうしてなのだろうか。

求めもしてないのにそいつはやってきた。

「な、何見てんのよ……いいから私の前から去りなさい!!」

背は中学生ぐらいだろうか、髪は長い……少し長すぎる。茶髪なのだが、日本人形見たいで、いや、それよりも長い。さらにかなり可愛い。そして……

大けが。

この少女は大けがをしていた。まわりには血が飛び散っている。幸いにもここは建物と建物の間。それでいて裏通りだ。やじ馬は一人もない。だからこそ俺が何かしてやらなければいけないのだろうか。でもこいつは……

「お前、空から降ってきたよな」

この少女は空から降ってきたのだ。そう「非日常」を求めるやつにあこがれ、「落下少女」である。なのになぜ……なぜ俺のもとに来たのだろう。他に「非日常」を求めてるやつがいるだろう。

やめてくれ。

うんざりだよ。こづいづのは……。



「さあ、早くきてください」

「嫌だ!! やめて!!」

男は少女を引っ張り出そうとしている。無理やり。少女はそれに抵抗。俺の大嫌いな「非日常」のにおいがする。もう二度とかぎたくなかったにおいだ。

「では、少し荒っぽいですが。携帯する炎。」

その瞬間、男の大剣が炎に包まれた。やめる・・・俺は平凡でいたいんだ。だから中学のとき金髪だった髪の色を頑張って落とし、高校生1年生の今ではあまり目立たなくなっているし、髪の長さも短くもなく長くもない普通。服装も今のようにジーパンにパーカーと普通の格好をしている。

「私は属性を操る、色縦師しよくじゆうし。なめてもらっては困る」

男は剣をふった。

ドオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!

剣は少女を斬り・・・裂かなかった。なぜかって？

「大人の男が少女に暴力。いけないんじゃないか」

「私の剣が・・・」

「ああ、お前の剣が邪魔だったんだ。悪いな。曲げさせてもらったぜ」

「な!?!」



俺はもうすでに一度この世界を救った、いや大袈裟か……。だが一度主人公を体験してるのだ。もうやりたくないがな。俺の能力は「言霊」。俺は「言霊使い」だ。言った言葉は全て現実になる。それがなんだというのだろう。俺は日常を大切にしてるんだ。もうすでに違う物語を経験してるんだ。

俺は井野宮天十いのみやてんとそして元主人公、今は脇役だ。

## プロローグ〈脇役願望〉（後書き）

えーと、2作目です。

初めましての方は初めまして。一応推測屋を書いている花澤文化です。

王道を目指してがんばりたいと思います！

## 第1章 第1話BADEND

俺が2回目の「非日常」に出会うほんの少し前。

普通に高校に行き、普通に帰宅した俺は午後8時ぐらいに晩飯がないことに気付いた。ちなみに一人暮らしというか、寮っぽいところで過ごしている。学校の管理下ではないがもの好きなお姉さんが経営してるところだ。住んでる人はみんな学生で、朝ごはん、晩御飯付き。な、寮っぽいだろ。

「今日は晩御飯用意できないってお姉さん言ってたの忘れてたな。」  
それに気づいた俺はコンビニに行こうと部屋を出たのである。

コンビニの距離は寮から5分と近い。そこで焼き肉弁当と麦茶を買って外にでた。季節はもう少しで夏。夜でも寒くはなかった。

「でも、もう8時か。宿題も終わってないし、1分も無駄にできないな」

俺は建物の裏を通ることにしたのだ。裏路地。その道を通れば2分で家につく。今思えばなんてバカなことをしたのだろうと思う。3分なんかどうでもよかったじゃないか。

3分多くかかって家に着く方が「非日常」に会う方がかなり嫌だ。

でも俺は見つけてしまったのだ。いや、俺は見つけたわけじゃないか。見つけざるをえなかったんだ。



「俺は弁当が冷めるのが何よりも嫌いなんだ。ほら、はやくしないと発作が……」

「すごく普通じゃないじゃない！そんなやつのことを不思議人間というのよ！」

あれ？自然に仕上げたつもりなんだけど。失敗したかな？

「俺な、廃人なんだ。だから早くゲームしないと発作が……」  
「それはそれで異常じゃない！」

どうしてだろう……俺は何を間違えた……これじゃ逆に自分から「非日常」にむかっているだけじゃないか！！だめなんだ……絶対に……。

「ねえ、私をあんたの家に泊めなさいよ」

「はあ！？だめに決まってるだろ！！お前自分が言ってることわかって……」

このセリフ……使ったのは2回目だ。思い出しまった……くそっ！

「いいから。私はあんたを信用できる」

「意味がわからんな。お前はそこらへんを歩いている男を信用できるというのか？」

「違う。あなたは「異常」。そこらへんを歩いている男とは違う。

それに……私を助けてくれた」

「それはただの気まぐれだ。俺は異常じゃない。「通常」だ。」

そう。俺はこの物語に主人公としては出席しない。漫画でもある漫

画に違う物語の主人公が主人公としてでてきたらどんな感じだと思  
う。それはいけないことなんだ。

「通常でもなんでもいい。私にあんたについていく」

「だめだっ！！！！」

「駄目じゃない！！あんまり言いたくなかったけど・・・私またあ  
いつらに襲われるよ。そして今度こそ殺される。それでもいいの！  
？」

「くっ・・・」

俺といたってお前は殺されるさ。ならこの物語の主人公を早く探す  
べきだと思っぞ。

「お前は俺といたって殺される」

「だってあんたさつきかなり強かったじゃない」

俺は言いたくなかった一言を言うことにした。いや、思い出したく  
なかったことか・・・。

「だから私にあんたのそばにいるの！私一人じゃあいつらに勝てな  
・・・」

「俺は昔ヒロインを死なせちまったんだよ」

「!?!?」

そう俺は世界を救うぐらい大きなことを成功させた。しかしヒロイ  
ンを死なせちまったんだ。俺が主人公の物語はBADENDをむか  
えたんだよ。  
バッドエンド



## 第1章 第1話BADEND（後書き）

なかなか続きが書けなかった中ようやく書き終えることができました。

推測屋のほうもよろしくお願いします！

王道目指すつもりがなかなかやりづらいですね。  
難しいです。

## 第2話 LIFE

「天十、私と一緒にこの世界を救いましょう」

「ああ、俺にできることならなんだってするさ」

「………ああ、これは夢だな。俺があることを思い出すと必ず見る夢。」

「天十！私はいいから、あなたの言霊で人を守って！」

「そんなわけにいくかよ！お前も他の奴らと同じように大切なんだ！」

「その言葉を聞いただけでもよかったわ。ありがとう……さよなら……」

○

「はあ………はあ………はあ………」

寝起き最悪。俺、井野宮天十は起きるとかなりの量の汗をかいていた。昨日嫌なこと思い出しちまったからな。

「さて、学校に行かないと………」

俺はとりあえずシャワーを浴び、朝食を食べ、洗顔、歯磨きと朝やるべきことをやって鞆を持った。

「あいつなら今頃元気でやってるよな」

これは夢にでてきたあいつにむけた言葉じゃない。昨日たまたま会った、あの小さな少女に対しての言葉だ。結局、俺は自分の失敗。ヒロインを死なせたことを打ち明けた。なんとも格好が悪いが、しようがなかった。そのおかげかその少女はついてこなかったしな。

「これでいい。俺は後悔なんてしない。もう一生分の後悔をしたからな」

俺は自分に言い聞かせるように言って、ドアノブをひねり、外の世界へと歩を進めた。

○

放課後。俺はいつものように帰り支度をしていると横から声がかかった。

「よお、井野宮。今日遊ぼうぜー」

黒髪のツンツン頭。それに頭の悪そうな顔。だらしない学ランの着方。こいつは俺のクラスメイトの志野野辺雄大<sup>しののへゆうだい</sup>。1年生でバスケットだ。

「お前、今日は部活ないのか？」

「今日はない。だからお前を誘いにきたんだよ」

「悪い。俺、今日はどうしても遊べない」

「そっか。じゃあ、また誘うな！」

「ああ、ほんとうにすまない」

あいつはたまに俺がこういう感じになる時、そっとしておいてくれるんだ。何も聞かずに。暑苦しいぐらい男らしいやつなんだ。

「うおお！俺、今日部活あったんだっ！」

とてつもないバカなところ以外はいいやつだと思う。部活は忘れるなよ。俺は席を立ち、玄関まで行った。ちなみに俺は帰宅部なので部活はない。

「夕飯まで時間あるし・・・勉強っていう気にもならないよな・・・」

そう言いつつ、歩き出した。そしてそれと同時に昨日の色縦師いろたてしについて考えていた。俺は色縦師を一度も見たことがなかった。それはつまり、あきらか俺が出ていた物語とは別のもの。すなわち、俺が干渉してはいけない物語のはずだ。

わかりやすいようにまた例をだそう。  
ゲームでレベルが100になった主人公が違うゲームでそのまんまの装備、レベルで主人公としてでていたら驚くこと間違いないだろう。そんな感じなんだ。俺を主人公とした物語はもう全クリした。その主人公が他の物語に出るわけにはいかない。そして俺についても安全は完全じゃない。

昔、ヒロインを死なせちゃった・・・その過去が俺に重くのしかかる。

「色縦師・・・ねえ・・・」

見たところ、属性すなわち色を操るやつだった。俺と戦った時は炎しか出してなかったが、他にも雷、水などといういろい出せたはずだ。ってことはあれが全力じゃないというわけか……。

「あれー？井野宮君だー」

「真苗？どうした？」

この茶色い髪にポニーテール。優しそうな顔で可愛い感じのおっとり系の女の子が真苗<sup>まなえみお</sup>未央。まあ、クラスメイトだ。

「さつきねー、志野野辺君が探してたよー」

「ああ、大丈夫。ちゃんと会ったから」

「よかったー」

「ちなみに真苗。お前探してっていつ言われたんだ？」

「1時間前ぐらいかな？」

こういうやつなんだ。どこか抜けてるといっつか天然といっつか。ちなみに俺とこいつは中学のころからの付き合いなのでこういっ会話ができる。ま、特別な関係ではないがね。

「とりあえずさんきゅ」

「いえいえ、どういたしましてー、じゃあね」

「真苗！またうちにでも遊びにこいよ」

「ふええ！？……それはつまり……恋人として……」

「クラスメイトとしてだよ。その冗談もうそろそろ慣れてきたぞ」

「冗談じゃないのに……」

「ん？」

「なんでもないっ、うん、また行くねー」

そうやって真苗と別れた。まったく癒されるな、あいつは。おっとりとした感じは実にいい！うん、ストレスがたまらないからな。そうやって考えながら俺は帰宅した。

○

「なっ！なんでお前がいんだよ！」

俺は帰宅そうそう声を荒げていた。なんでかって……昨日の「非日常」が……

「なんか文句ある？私はあるたについていくことにしたの」

「非日常」が俺の部屋に……………！！！！

「でてけっ！はやくでていけ！」

「嫌よ！あんたが私を認めるまで！」

「最初から認める認めないの話じゃねえんだよ……！」  
「うるさい！私はここにいる……！」

なんて頑固な女だ……。こういうのをシンデレレというのだろうか。いや、デレないからシンぱっかりのめんどくさい女ということになるか。

「俺はコンビニに行く。それまでに部屋を出て、どこかに行けよ」  
「さーて、どうかしらね」

俺は部屋を出てコンビニへと急いだ。歩いて5分のところにあるの

で、今回は近道もせず、逆にゆっくり歩いていった。

「はぁ・・・あいつはなんなんだ」

俺の話を書いてなかったのだろうか・・・俺は・・・

「生成『剣』ソードリアル」

その瞬間俺の真上から剣がかなりの量降ってきた。どうなってやがる!?いきなりなんだっていうんだ!!

「『守』しゅ!」

俺は言霊の見えない壁で防御した。次々と剣が弾かれていく。まだ続く、まだまだ落ちてくる。なんだ・・・この量は「異常」だろ!俺は知っている・・・こんな「異常」を作り出せるのは・・・

「『非日常』側の人間・・・!」

昨日に続いて今日もかよ・・・今回は裏路地なんかじゃない。普通に表にある通りで時間はまだ5時。暗くもなっていない。このままじゃまずいな。通行人もすごい量だ・・・

「ちっ・・・」

なぜ、俺がこんなにも焦っているのか。それは俺のこの「異常」な能力を見られるからとかそんなんじゃない。下手すれば・・・  
・ひどい惨状になる・・・

そう、俺の言葉にも弱点があるのだ……。

## 第2話LIFE（後書き）

というわけで最新話です。

いろいろと最初なので説明くさくなりますが、もう少ししたら、スムーズに進むと思います。

推測屋のほうもどうぞよろしく願います。

### 第3話 ALONE

完璧にまズったな……。このままじゃ、防御はできても攻撃ができない。それは俺の弱点にも関係してることなんだ。

「こんにちわ、あなたが昨日ここで少女を助けた……」

「ああ、そうだ。井野宮天十」

「天十……。いい名前ですね。私はムトー・ライゼン、錬金術師のムトーと申します」

「はっ、いい名前じゃねえか」

「それはありがとうございます」

錬金術師だと……。そんなものは知らない。やはり俺とは関係のない物語のようだ。

「生成『剣』ソートリアル」

するとやつの手には普通の剣が握られていた。これが錬金術師……生成の力が……。

「そうやって無限になんでも生成できるのか？」

「さあ？どうでしょう。それはあなたには教えられません」

「敵だからか……」

「その通り」

やつの服装は白いスーツに黒いネクタイ。髪は短く、騎士という言葉が似合う男だった。

「では行きますよー!」

「くっ！」

すごいスピードで距離を詰められた。やつの剣がくると思った俺は転がるようにしてよけた？いいや、そんなことはしねえよ。やつの剣をぎりぎりでかわし、かわしたスピードで俺も一気に距離を詰める！

「『打』」

俺はやつの耳元でつぶやいた。その瞬間やつはでかいハンマーかなにかで殴られたように吹き飛んで行った。あぶねえ・・・少し剣がかすったよ・・・。

「ふう・・・なかなかやりますね。しかし手を抜くのはいけないと思いますよ」

「見破るとは・・・この前の色縦師（しやくじゆうし）とかいうやつとは違うな」

「あんなやつと同じにしないでください。あいつは色縦師の中でも最下級のやつです」

なるほど。階級なんてもんもあんのか。いい情報を得た。

「次は手を抜かないでくださいね。今度こそ死にますよ。生成『銃』（ガンリアル）」

「げっ！銃かよ！」

やべえ・・・遠距離攻撃だと距離が詰めづらい。それにまわりの視線も気になる・・・。まわりにはたくさんじゃじゃ馬たちがいた。

「まわりをきにしてるのですか？ご安心を。記憶は消えるようにしときましたんで」

「じゃあ、人を巻き込んだ場合、そいつは生き返るのか？」  
「それはいなかったことになりました」

「！！こいつ今なんていいやがった・・・？いなかったことにする  
だど・・・そんなのそいつの今までの人生を全否定してるのと同  
じじゃないか！まわりを巻き込むわけにはいかねえ。」

「いきますよ！」

ダダダダダダダダダダ！！！！

「しかもその銃マシンガンかよ！」「守しゅ」！」「

俺の言霊ことばたまが銃弾を止める。バチン、バチン！と音がする。何をして  
も無駄だ。そのときピシッ！と嫌な音がした。

「なっ！？」

俺の言霊にヒビが・・・！普通の銃のはずだろ！なのになんで！

「ですから本気できなさいと言ったのです。これは普通のマシンガ  
ンじゃないです・・・」

1 拍おいて・・・

「魔真眼マシンガン。これは相手の一番弱い部分を見抜き、そこを連続的に攻  
撃する銃」

「なに！？」

ただの当て字のように思えたが、違う・・・。漢字の通りやつはあ

の眼で俺の言霊の一番弱いところを攻撃したんだ！

「これが私の錬金術です！さあ！本気を出しなさい！」

「くそ……」

見かけが普通の銃なのになんて武器だ……。間合いさえ詰められれば……。なぜ、俺がさつきから間合いにこだわるのか……。それは、

俺の言霊は聞いたもの全てに作用する。

例えばさつきの『打』。あれは俺の打という声を聞いたもの全員に作用する。なので一般人が多い中、使うと関係のない人までやられかねないのだ。いや、聞こえたならば確実にやられる。だから間合いを詰めてやつの耳元で囁くしかないのだが……

「あの銃じゃあな……」

とてもじゃないが間合いを詰められない。とそこで俺の言霊の限界がきたようだ。もう割れる。

「終わりですよ、言霊使い、井野宮天十！」

パン！

「がっ……」

俺は撃たれた……。ひどい激痛が体を襲う……。

「最後まで本気を出さないと残念です、井野宮天十」

くるりとムトーが後ろを向き歩き始める。その瞬間……

ダッ！

「！！！」

「残念だったな！ムトー・ライゼン！俺は死んでねえ！」

そう、俺はごく小さな声で『守』といていたのだ。作用するのは自分。自分にさえ聞こえていれば相手に聞こえていなくとも、防御はできる！

「残念なのはあなたです。生成『砲』ガンリアル！」

なんとやつの中から砲台が生成された。まさか、体からも生成できるとは……

「これは本来はやつちゃいけないのですよ。激痛、吐き気、頭痛などを伴いますからね」

「じゃあ、なんで……」

「じゃあ、なんでそんなことしたのか……あなたを殺すためです！」

ドガンッ！

砲台の弾をモロにくらった俺は、派手に吹き飛ばす。腹に大きい一撃をもらってせいで、吐血とせきが激しくでる。

「がはっ……ごぼっ……があ……くっ……」

俺の吐いた血は地面に落ちる前に止まった。

「生成『剣』」ソードリアル

「なっ……あぶねっ！」

俺の血が剣になった。そして俺を襲う。事態が飲み込めない。どう  
いうことだ……。

「私は血の錬金術師。血から力をもらい物質を生成させるのです」

「なん……だと……」

俺が攻撃すればするほど、攻撃されればされるほど不利になるって  
ことかよ……。それじゃあ、俺は何もできないのか……。

「それであんたは諦めるの？」

「!?!」

どこかで聞き覚えのある声が聞こえた。この声は……。

「非日常」の少女の声。

「バカ野郎！お前何できてんだよ！」

「悪い？」

「悪いとかの問題じゃねえだろうが！」

「おやおや、仲間割れですか？」

「仲間じゃねえ！俺はこいつを知らない！」

「よくそんなこと言えたわね！あんた昨日も会ってんでしょー！」

「仲間割れは結構ですが。モーラ・ルーレト、あなた自身が出てき  
ていいのですか？」

モーラ・ルーレット？それがこいつの名前なのか？いや、今はそんなことどうでもいいか。

「私は別にこいつに守ってもらってるわけじゃないの。だからいいのよ」

「ではおとなしく捕まってくれますか？」

「そういう風に見える？」

「……………ふふ。おもしろい。ならば私とお手合わせ願いたいです」

錬金術師は剣を構えた。これからどんな戦いが行われるんだ？あの言い方だと少女の方もとてつもなく強いはずだ。これはもしかしたら……………いけるっ！やつに勝てる！

「ざーんねん。私じゃなくて相手するのはこいつよ」

「俺の勝利確信を返せ！なんでお前が戦わないんだよ！」

「私なんか勝てると思う？」

「自分で言うな！」

はあ……………結局、俺が戦わないといけないのか……………。この通行人たちがいなければな……………。

「なに？あんだ。昨日みたいにさっさとぶっ飛ばしなさいよ」

「お前、簡単に言うが、このまわりの通行人を巻き込まないようにして戦うのは難しいんだぞ」

まわりのやつらは通行人というかもう、じゃじゃ馬といったほうがいいと思うが。警察がきたりとかしないのは俺らの奇怪な技のせいであまり説明できないからか。

「なに？あんだ、まわりなんて気にしてたの？」

「そりゃあ、気にするだろ。殺すわけにはいかない」

「なんだ。じゃあそう言っつてよ」

「は？」

なんだ？言っつたら何か起こるのか？と思った瞬間、周りが光に包まれ……

光が消えたときにはまわりには誰もいなく、木や草が生い茂っていた。

「ここは？」

「無人島よ。ここなら誰もいないわ」

「無人島だと……どうやってきたんだよ……」

「私の次元移動テレポルトを使えば」

こいつそんなものを使えるのか……。ほんとにこいつすごいやつなんじゃなからうか。

「さすが、天を使うものです。ですが移動したところで何になるのです？」

「ここから俺の出番ということか……」

「そうよ、ケチヨンケチヨンにしてやりなさい！」

今の俺には何も制限がない。

「おい、そこのお前、耳ふさいでろ」

「私？わかつたわよ」

「準備はいいですか？ことだまつかい言霊使い」

「いいぜ！来な！今度は手加減しねえ！」

### 第3話ALONE（後書き）

なんか思ったよりバトルが長引きますね。

ちなみにタイトルのALONEとは孤独、一人という意味です。

何が孤独なのか？

それは少女がレポートした先が……だからです！

まだ読んでない人のためにネタバレはしません。

でわ読んでくれてありがとうございます！

まだまだ続きますよ！

## 第4話MEAN

「反撃といこうか」

「楽しみですよ……あなたの全力が見れるんですから……」

俺は相手から目を離さない。いや、離れたらやられるとわかっていた。それほどまでに強者なのだ、この男は。俺はゆっくりと口を開いた……。

「『打』」

その声が耳に届いたのだろう。やつは簡単に吹き飛んで行った。もちろん何かに殴られたように。

やつの体が地面に着く前に俺は口をまた開いた。

「『斬』」

「ぐっ……がはぁ……!!」

斬とは斬るという意味。それが聞こえたものは斬られるのだ。錬金術師のムトーは斬り傷をつけ、血を噴き出した。

「あなた……急に強くなりましたね……」

「そりゃあ、そうさ。俺は手を抜いていたんだ」

「でもあなたは私に血を流させた……その意味を理解してますか？」

「……」

やつは血の錬金術師。血がある今の状況はやつにかなり有利である。

しかし、俺はそれを許さない。絶対に反撃の隙を与えない。

「『打』」

「ぐはぁー!!」

派手に吹き飛ぶムトー。木にぶつかってようやく止まった。

「く……ソードリ……」

「『打』」

ドゴッ!!

鈍い音が響く。

「やはり……違いすぎる……さっき手を抜きすぎていませんか？」

と苦笑するムトー。別に俺が強くなったわけでもないし、技の威力も上がったわけじゃない。ただただ「理不尽」なのだ。反撃を与えない理不尽な攻撃。それが俺の強み。

「もう、ここで諦めてくれないか？」

「なぜ、そのようなことを聞くのです？」

「これ以上傷つけないんだ。俺の力は人を守るためにあるものなんだよ」

「では、残念でしたね。私は諦めませんよ……」

「ホムリアル爆弾!!」

「!!」



「!!--」

「モーラ!」

「はははははははっ!!--!!--誰が死ぬと言いましたか!私は悔いはないと言っただけです!」

そこには錬金術師ムトーの姿があった。

「な・・・んだと・・・でもあれだけの爆発なら・・・」  
「あの程度の爆発、ガードリアル『盾』で防げます」

そんな・・・バカな・・・まだ生きていたのか。捕まった少女は必死になってあがいている。

「仲間を助けなくていいんですか?」

「そいつは仲間じゃない。どうなるうが知らん」

「では『ソードリアル剣』」

するとやつは生成した剣をモーラのど元に突きつける。

「死にたくなければ私の言うことを聞きなさい」

「いやよっ!私はある地獄になんか戻らない!」

俺はもう限界だ。ここでモーラを見捨てたら、罪悪感で死ぬだろうか。いや、俺は死なないだろうな。そういうやつなんだ。罪悪感なんて感じない。

「ならばこないこの男を殺します」

「!!--」

俺は死ぬつもりはない。だからモーラを見捨てようが、俺は生きるつもりだった。俺だってモーラを見捨てようとしたんだ。こいつも俺と同じ考えに違いない。

「……………わかったわよ……………ついていくわ  
「!」」

どういうことだ。俺なんて他人だろう。そんなやつをなぜ守る……俺を見捨ててどこかへ行け！やめてくれ……………俺を助けるな……………。

「聞きわけのいい子です」  
「待てよ……………」

俺は低くつぶやく。

「ふざけんな……………なぜ、俺を見捨てない？」  
「さあね。罪悪感なんか感じたくないからじゃないかしら」

理解はできない。だが錬金術師が人通りの多いところで戦闘を始めた。それが俺の戦う理由でいい。そう、心のどこかで言い訳して、立ち上がる。

「『ソード  
』  
剣」

これを言ったのは俺だ。すると血から剣が生成された。

「貴様……………どういうことだ……………」  
「俺は言霊使いだぜ。俺の言葉をなめるなよ」

やつがいちいち呪文のようにソードリアルやガンリアルと言っていた理由。言わない方が相手に手の内がバレなくていいのと言った理由。それは言葉に何か特別な意味があるからじゃないかと思った。

正解だったな。

言葉に特別な意味があるのなら、簡単だ。言葉に意味があるなら、俺だって使える！

錬金術師のムトーは完璧に油断、いや、俺が同じ技を使うことが信じられなかったのかその場から動かなかった。

「ムトー・ライゼン、お前は生きる、そして償え」

俺はやつの急所にならないぎりぎりを狙い斬った。血をまき散らしムトーが倒れていく。俺はその場に倒れこんだ……。久々の勝利の感じを胸に抱いて。

#### 第4話MEAN(後書き)

とりあえず、タイトルは意味という意味です。  
意味するということでもあります。

さて今回で戦闘が終わりました。

これからの展開も考えてあるのでよろしくお願いします！

感想、指摘、レビューまっています！





俺、志野野辺……………

まなえみお  
真苗未央だ。

「やあやあ、おはよう。二人とも」

「よお」

「おっ」

「男の友情に水差しちゃったかな」

「いや、いいって。男の友情ほど暑苦しいものはないからな。あ、志野野辺はそれよりあついな」

「そうだぞ、俺はバスケット部でも炎の志野野辺と呼ばれるほどの……」

「あ、やべえ。もう時間じゃねえか」

「あーほんとだー。急がないと」

「ボケ殺し！！このクソ野郎！！！！」

少々騒がしいが俺はこの日常が大好きだ。俺はここで普通に生きている。「非日常」なんて2度とごめんだな。なんとも脇役らしい日常じゃないか。

○

放課後。俺は掃除の当番だったので班員と教室の掃除をしていた。マジでかつたるいな。学生諸君なら分かってくれるだろうか？いや、きっと学生じゃなくても分かってくれるだろうと信じよう。

「あー、まず、ほうきが小さいんだよな。教室ぐらいあれば一回でごみを集められるんだが」

「その前にまず、机を出すということをしなくてはいけないぞ」  
「あれ？委員長」

今、俺に話しかけてきたのは、この学級の委員長の木野白泉。きのしろいずみなん  
か男っぽい口調だが、性別は女。黒髪ロングヘアで、メガネはか  
けてないぞ。可愛いというより美しい、凛々しいが似合うやつだ。  
背が160後半あり、ナイスバディ。

「どうした？私がここにいることが不思議か？」

「いや、同じ班員だったねっていう簡単な思い出し行為です」

「そうか、しかし掃除はかつたるいな」

「あんたもかよ！ってというか委員長がそれでいいの!？」

「私だつて人間だ。掃除がかつたるいのは人類共通だろ？」

「いや、中には掃除が好きな人もいると思うぞ」

こいつと話していると、落ち着くな。なんていうか近寄りがたい雰  
囲気が中学のころにはあったんだよな。こいつ。まあ、まさか同じ  
高校になるとは思ってもいなかったけれど。さらに同じ学級。

「なあ、木野白」

「なんだ？」

「お前は『非日常』って信じるか？例えば、異能バトルとかそんな  
ん」

「『非日常』か……。信じるぞ」

「は!?!マジで!?!」

「自分で聞いたといてなんて失礼な反応だ」

「いや、悪い。驚きすぎた。でも委員長でも信じるのか」

「言つたら、私も人間なんだ」

「まあ、そつだな」

この後俺たちはたわいもないことを話した。話しすぎた。掃除をほったらかしにしてたせいでこのあと先生怒られたことはなんとなく想像つくだろう。

○

帰宅しようとして玄関に行くとそこには真苗がいた。俺は靴をとりだそうとしていた手を止め、あいさつをする。それにしても……あいつとはよく玄関で会うな。

「やーやー井野宮君。偶然だね」

「偶然にしちゃ、毎回ここで会ってるような気がするがな」

「え！いや、そんな、えと、気のせいだって！」

慌てすぎだろ。そこまでして何を隠そうとしているのやら。しかし、その慌てた姿はあいつにそっくりだった。そう、『忌々しい過去』に。

「今日は一緒に帰ろう」

「別にいいが」

「やったー」

何をそこまで喜ぶことがあったのだろうか。なんか賭けでもしてるのかな？私が井野宮君を誘ってOKされたら私の勝ちね！とかなんとか。まあ、そんな考え方はさすがに失礼なため、純粋に楽しませてもらおう。

「いつぶりだろうね、こうやって一緒に帰るの」

「えーと、中2の後半にはもうバラバラだったな」

「うんー、ちょっとさみしかったんだよー」

「悪い。あのときはいろいろとあって」

「ううん、謝らないで」

などと昔話をしながら帰宅するために歩き出す。それにしてもこいつは昔から変わらないな。それがいいことなのか悪いことなのかは分からないが、こいつは今のままが一番だと思った。

「えへへ」

俺はこいつの笑顔で癒されるようなもんだな。まったく……俺は友達離れということが永遠にできそうにない人種らしかった。

「あ、猫さんだー。にゃー」

「猫に話しかけるのはやめてもらいませんかねえ！？俺が恥ずかしいんで！」

まあ、こついうところも含めてこいつのいいところなんだよ。きつと。たぶん。まあ、なんとなく。ちょっと自信がなくなってくる。

「じゃあ、私はこつちだから」

「ああ、じゃあな」

「うん、バイバイー」

俺は一人で帰宅する。このさっきまで騒がしかったのに急に静かになるとさみしくなるこの感じはどうにかできないものだろうか？無理ですいません。

「さあて、部屋に帰って、宿題でもすつかないかな？」

俺はこの日常が大好きだ。最初に言った通り、これを曲げる気はない。騒がしく、そして楽しい。笑顔であふれているこの感じ。ちょっと疲れるけれど、これはこれでいい。

ピリリリピリリリ

俺の携帯にメールがきた。

「あ？委員長からか。なにになに・・・引っ越しを手伝ってほしい。日時は明日午前10時って・・・」

「俺の土曜日があああああああああああああああああああああああああああああああ！！！！」

まあ、いいんだよ。別に。うん。日常大好きだし。でもせつかく今週の土曜日は授業がないしさ、休みたい気持ちはあるじゃん。でもまさか引っ越しの手伝いとはねえ・・・いや、日常大好きだけどなっ！

第5話 DAILY LIFE (後書き)

今回はバトルがない日常回でした。

次の話はどうなるんでしょうかね・・・自分でもわからない。

タイトルは日常という意味です。

でわ。

## 第6話 MOVE

土曜日、土曜日いやっほー！ーい！ー！ー！今日は休みで授業がない。俺の休日を満喫してやんぜ！ー！  
つていう日なんだけどな。

「ほら、井野宮君、働け」

「へーい」

俺は委員長の引っ越しの手伝いをしていた。正確には俺だけじゃない。

「あー、もう疲れたよー」

「俺の鋼の肉体の前には敵はない！ー！」

真苗に志野野辺も一緒だった。ていうか2人とも無理やりだ。もうあれは脅迫に近かったな。

時は朝にさかのぼる。俺はめずらしく8時に起床した。委員長の引っ越しの手伝いなんてするつもりはこれっぽっちもなかったさ、もちろんな。

ピリリリ

「ああ？電話か。．．．げっ！委員長からだよ．．．．．」

出るしかないので俺はしぶしぶ電話にでた。

「あー、もしもし」

「井野宮君か。もうそろそろサボろうとしてる頃かと思い、電話した」

「どんだけ！？超能力者かよ！！俺の心境はどんだけ察知しやすいんだ……。それほど単純だということですね。」

「ちなみに今日来なかったら、真苗君に君の工口本の隠し場所を話す」

「なんでお前が知ってる！？どうせ冗談だろ」

「ベットの下の右から3番目の段ボール。その一番下に入っている」  
「今日は引越日和讯すねえ！」

「泣きそうだ。お前、俺の部屋に入った事あったっけ？だとしてもなんで知ってたんだよ。探したの？」

「というわけで今に至る。その他の真苗や志野野辺も同じように脅迫されたらしい。どういう内容かはしらんが。」

「それにしても悪いな、諸君。手伝わせてしまって」

「……いえ、手伝いたいんすー」「……」

「よくいうぜ、こいつ！ちくしょう！俺の休日が……. . . . .  
。と思いつつベットをよけるためにベッドの下に何かないか確認している……. . . . .」

「ははは、井野宮君。私はエロ本など隠してないぞ」  
「は!?!」

「えー、井野宮君そんなことしてたの!?!」

「男……いや、漢だな」

「探してねえし、そんな評価もいらねえ!?!」

なんで女子の部屋きて、エロ本探してんだよ! 新手的変態みたいじゃねえか!

「ベッドをよけようとして、下に何かあるか確認したんだ」

「なんだ、割と普通でつまらん」

「井野宮君……がっかりだよ!」

「男じゃないな」

「なんで俺の評価は普通にしていると下がるんだよ!」

もういや! 帰りたい! なんで精神的にも疲れさせようとしてくるんだよ! 肉体的にももう大分限界だが。それにしても委員長の部屋はきれいだな。ホコリもないし、そして何よりピンク色とか使っている部屋なのでかわいらしい。ぬいぐるみもあるぐらいだ。

「へー、意外と可愛い趣味してんだな」

「それは誰に向かって言っているんだ?」

すみません。本当にすみません。すごく殺気みたいなのを感じたので謝っておこうと思う。顔は決してみない。トラウマになりそうだから。

「さて、そろそろ休憩にしよう」

「ふー、もう疲れたー」

「さーて、昼飯、昼飯」

「ねみー……」

俺ら4人は昼食をとることにした。昼食はカレーだった。

「これは木野白きのしろが作ったのか？」

「井野宮君、誰に聞いているのかな？私もそれぐらいなら作るぞ」

俺は純粋な驚きがあったため、失礼なことを聞いていた。だって見るからに不器用そうなんだもん。

「うまい……普通にうまいぞ！」

「志野野辺君、それは普通に失礼だぞ」

確かに普通にうまいぞ！つてみるからにマズい味を予想していたものが発する言葉だ。俺も人のこと言えないがな。

「そっぴゃあ、木野白の親は？」

「私はこのアパートに一人暮らしだぞ」

「ふーん、つてことは引つ越し先もアパートなのか？」

「それは後でのお楽しみだな」

なぜ内緒にするのか全然わからない。そして昼食を食い終えた俺らはまた引つ越しの手伝いをするべく腰を浮かせた。正直いつてかったりいっす。たまに友達とかから頼まれる「もしよかったらでいいんだけど」という前置きぐらいかったるい。何言っつてんのかわかんないね。

「さ、もう少しだ。頑張ろうではないか！」

委員長の元気さは3人の中で群を抜いていた。当たり前だな。俺ら

3人は脅迫に近い形でやらされてるしな。こればかりはモチベーションが下がる。

「じゃあ、次は何を運べばいいんだ？」

「ふむ、これだ」

それは犬小屋だった。ただし中にまだ犬が在住してるわけなんだけどね。

「これで最後か？」

「ああ、これさえ運べばな」

「犬小屋を運ぶのであって、犬は運ばないんだろ？」

「そうにきまつているだろ。犬は手放せない！」

どんだけ犬好きなんだよ。まあ、これが最後なら楽なほうか。と思  
い俺は犬小屋へ手を伸ばした。

「ガチンッ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

危うくマジ噛みされそうになった。なんだこの危険生物。

「なあ、これ・・・・・・・・」

「ああ、こいつ犬小屋から離れたがらなくてな。私も苦労してたんだ」

「こいつ、噛もうとしてたんすけど」

「可愛いじゃないか」

可愛いじゃすまされねえ。下手したら俺の指がもってかれるんだけど。このままじゃ、「あなたのお父さん指とお母さん指は？」「犬

にもってかれましたー」なんて会話が幼稚園で成立するかもしれない。

「これは無理そうだな。諦めようぜ」

「なっ………！ベッドの下の段ボール」

「ちくしょう！死ねってことか！」

この野郎！愛する犬のためなら友人の指などいらなといった感じだな。でもこの犬ガチンツってやったんだぜ。噛み切る気満々な音出しゃがったんだよ！

「くっ………」

俺は恐る恐る手を前に出していく。これは黒ひげ危機一髪の最後の方の盛り上がりってきた感じの緊張感に似ている。ただし飛び出すのは愛嬌ある黒ひげのおっさんではなく、犬歯むき出しの殺人犬だが。

「よし！犬小屋に触れた！このまま持ち上げれば………」

持ち上がらなかった。ていうかこれ固定されてるやん。じゃあ、こいつの相手しながら固定しているものはずし、さらに持ち上げると。そういうわけですな。これは無理だわ。おじさんこれはできない。と親戚のおじさんが小さい子供に言い訳するように心の中で言った時、

「ガウッ！」

「危ねえ！！！！！」

犬がものすごい勢いで噛もうとしてきやがった。ざけんな！こいつワンじゃなくてガウってなきやがる。こいつマジでだめだよ。情け

ないか思ってる諸君。目の前にライオンがいるとを考えてくれ。これは決して過言ではない。

「やはり、君でも無理か……」  
「君でも？」

「実は志野野辺君に頼んでみたのだが、それでも無理でなあ」

「志野野辺でも無理だったのかよ」

「え？ああ、無理無理。俺なんかそういうアレルギーだし」

こいつ何かそういうアレルギーだったのか。

「悪いな。木野白。俺も何かそういうアレルギーなんだ」

「ふむ、そうか。なら業者に頼んでみるかな？」

なんとかごまかせたな。真顔で言ってみるもんだ。業者さんも驚きの犬だったとき。ていうか最初から業者に頼めよ。

○

「無事終わることができた。皆今日はありがとう」

ということ引越し無事終了。今日木野白は近くの親戚の家に泊まるそうだ。明日から新しい家に移動というわけ。

「じゃあな、木野白」

「ばいばい、木野白さん」

「また明日」

俺らはそれぞれ帰路についた。やはりこつこつ日常はいいな。安定してる。すごく面白いものは無いけれど毎日、安定した面白さをくれる。しかし俺は見出してしまった。「非日常」を。

「あんだ、ちよつといい？」

「あんだよ？」

帰り道。普通の民家の壁によりそって立っていた「非日常」。

「別に今、あんたを頼ろうとしてるわけじゃない、あんたの話聞いてどうしても言いたいことがあるだけだから、安心して。すぐ済ますから」

「ああ………わかったよ」

こいつが何を言おうとしてるのかはわからない。けれどこつこつでもつとはつきり言ってやろうと思った。俺に関わるなってな。俺は無言で少女モーラの後に着いていった。

## 第6話MOVE（後書き）

今回のタイトルは引っ越しという意味です。

今回も日常的なもので終わらせました。

読んでくれた皆さんありがとうございます！

お気に入り登録もしていただいで嬉しい限りです！

でわ、これからもよろしくお願いします。

第1章 終 第7話 AWAKING

「んで、何の用だ？」

俺は今俺の部屋にいる。何か知らないがあいつがここの方が都合が  
いいって言ってんだもん。

「……………」

「何も言わないつもりならこちらから言わせてもらおう」

俺は一区切りして……………」

「もう今後一切俺の前に出てくるな」

「分かっているわ。私はこれ以上あんたの前には姿を現さない」

なんだ、分かっているのか。ならそれでいい。

「悪いな。別にお前自身が嫌いなわけじゃないんだ。ただ俺いても  
意味はないし、俺は昔人を……………」

「それよ……………」

「は？」

「それが気に食わないって言うてんの！」

急に声を荒げるから驚いた。こいつこんな顔して怒るんだなと意味  
のわからない感想を抱きながら、俺は彼女の言った意味を理解でき  
ていなかった。

「……………」  
「……………」  
「……………」

「あんたのその自分で全て背負おうとする態度よ!!」

「全て背負うも何も俺が悪いんだ……あれは俺のせいだ……」

「そうやって責任を背負って、どうするの？ああ、分かったわ。誰かに励ましてもらいたいのね。自分がすべて悪いと決め込んで、まるで被害者のように!」

こいつのセリフに俺は思わずカッとなった。

「ふざけんな!さつきから知ってるような口ききやがって!何も知らないお前に言われたくねえんだよ!」

「確かにそうね。でも腹立たしいのよ。被害者面してるあんたが!

「!」

「くっ!この野郎!」

「その少女は別れ際あんたになんて言ったの!?!」

「!?!」

ルナが……俺の一番目のヒロインが俺になんて言ったか……。そんなの忘れるわけがない。夢でもなんでもほぼ毎日のように出てくるからな。

「あなたを憎い、恨む。責任を全て背負えといったの?」

あいつはそんなことしなかった。そう最後まであいつは……。……。

『ありがとう……さよなら……』

俺にお礼を言っていたんだ。何もしてやれなかった俺に、お礼を。

自分の状態より俺への感謝の方を優先しやがったんだ……。

。もう涙が止まらなかった。ただたんにあいつのことを思い出したからじゃない。それにさらに何かプラスされてる。

「でも、だからこそ俺は彼女を忘れるわけにはいかない」

「責任を全て負うことが忘れないということなの？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「あなたはただ彼女の死を自分のせいにして、逆に彼女のことを忘れようとしてるのよ」

「そんなことはない！」

「でも思い出したい思い出ではないんでしょう？」

「！」

確かに俺の行動はおかしかった。彼女を忘れたくないはずなのに、俺は彼女を拒んでいたんだ。この俺の前に立つモーラと同じように・・・・・・・・。夢に出てもいい思いをしない。それはすなわち彼女のことを・・・・・・・・彼女の死が辛いから目を背けようとしてるだけのこと。

「俺は・・・・・・・・何をやっていたんだろうな・・・・・・・・」

「いえ、おかしいことではないわ。辛い思い出からは目を背けたくなるものよ」

俺はもう少しで彼女の存在すら否定していたかもしれないな。

「はぁ・・・・・・・・ほんとにバカだよ・・・・・・・・俺」

流し始めた涙は止まらなかった。もういい、我慢なんて必要ないんだと心から訴えかけられてるかのようにな・・・・・・・・。

「彼女はあなたに責任を負わずために死んだんじゃないのよ」

「ああ……分かってるさ。俺は彼女の死を受け入れなければいけないんだな」

そう、きつと夢に出てきてるということは彼女の死を受け入れてなかったのだろう。真苗の仕草が彼女に似ていたと思っただのも全部そのせいだ。真苗は真苗なのにな。

「ありがとう。モーラ・ルーレト。あんたのおかげだ」

「私は何もしていないわ。あんたが勝手に自分で納得したのよ」

ツンと顔をそむけるモーラ。その仕草はとても可愛らしく、俺をなだめたものとは思えない、年相応の反応だった。

「じゃあ、私はこれで……じゃあね」

そういつてモーラは光の中に消えていった。おそらく次元移動をしたんだろうな。

「ひどいぐらい大きな借りができちゃったな……」

俺は一人呟く。あいつは今も狙われ続けてるんだろうか。あんな野蛮な連中に……。

「俺が考えても仕方ないな」

俺はベッドにもぐりこんだ。そのまま眠ってしまったらしい。その夜俺はあの夢を見ることはなかった。そのかわり俺が見たのは……。

○

「まったくしつこいやつらね……」

私、モーラ・ルーレトは狙われていた。もちろん、「異能」の使い手に。

「大人しくこっちに来い！」

「はっ！だれがあんな豚小屋に戻るもんですか！」

ほんとにしつこい。今は私は能力を使えない。特殊な制限をかけられていると言っておきましょう。こいつらの近くでは変な電磁波のせいで能力が上手く使えないのだ。

「まったく、能力使えなくしてもあいつ足はえーじゃねえか！」

「私はあんたらと違って有能なのよ！」

とか言いつつも足がふらついてきた。ちよつとこのままじゃ……  
・ヤバッ！私は転倒しそうになった。いや、転倒した。その隙を狙ってやつらが攻撃を……

「『打』」

仕掛けてこなかった。かわりに目の前の敵が飛ばされているのが見える。

「まったくお前は何をやっているんだ。てれぽーとかいうやつを使えばいいだろう。マヌケめ」

その姿は私には主人公に見えた。いや、彼は今でも脇役願望なのだと  
思うのだけどね。

第1章〜終〜 第7話 AWAKING（後書き）

この話で第1章が完結しました！

次からは2章ってことです！もしかしたらその前に……。

今回のタイトルは目覚めです。

次は2章かどうかわかりませんがこれからもよろしくお願いします！

でわ

## プロローグ2〜CLASS〜

色縦師、錬金術師等をまとめて職業と呼ぶ。

それぞれの職業には階級が3段階ある。簡単に「初級」、「中級」、「上級」といった感じだ。階級により、使える技の数も増えていく。階級が高いにこしたことはないのだ。

「はあーあ、あいつにも味方がついちゃったか……やりづれえなあ……」

ある男がつぶやいた。この男は中学生ぐらいの背丈（160前半ぐらい）。そして髪の毛は金髪、肩にかかるぐらいの長さである。黒いマントをはおっている。

「まあ、人が一人増えたところで何も変わらない。変わるのは葬式の数だな。もつとも葬式が行われるかは分からないが」

男はしゃべるのが好きらしい。しかしそれは不快に思わせるものではなく、逆に子供らしさを感じる。

「さあ、もう行くかな。日本に」

男は立ち上がり、マントをひるがえして、その場を去った。

○

お前が主人公だと言われた。それは忘れてはいけないことなのか、悪い夢だと思つて忘れるのか、選択肢はたくさんある。

忘れてはいけないという者はきつと主人公になれると思う。そいつはきつとこれからやつかいごとに巻き込まれるんだ。

忘れてしまおうと思う者は脇役がちょうどいい。失礼な言い方もしれないがびつたりだと思う。

しかし世の中はおかしい。主人公の素質のあるものは忘れてたくても忘れられず、どっちにしる厄介事に巻き込まれるもんだよ。

俺か？・・・・・・・・俺はな。

断然、脇役だな。

俺は主人公になつちやいけないんだ。それになりたくもないし。脇役が俺にびつたりだと思うね。劇をやるときの「木」、「村人B」そこらへんが好きなんだ。俺の考えは変わらない。

今でもな。

でも・・・・・・・・少しだけ価値観が変わつたよ。本当に少しだけ。

例をだすと台風がきた。告白される。宝くじがあたる。それぐらいの「非日常」なら少しだけ受け入れることができるようになったんだ。ああ・・・・・・・・あとそうそう、まだ例があつたよ。

空から少女が降ってきたりな。

## プログラグ2〜CLASS〜(後書き)

2章の始めなので短めです。

今回のタイトルは階級という意味です。

これからもよろしく願います！

## 第2章 第8話 TESTING COURAGE

ご存じのとおり常に脇役願望を持ち合わせている、井野宮天十いのみやてんとつす。それにしても夏が近くなってきたるな！。もうそろそろ夏服でもいいんじゃないかと思うぐらいの気温。いや、教室だから室温かな？

「やっちまったよなー……マジで」

自己嫌悪とまではいかないが、やっちまっていた。俺はあの少女モーラに手を貸すことになってしまった。なんで狙われてるのかも教えてくんねえし。正直分かんないことだらけだ。

「それにしても暑いな。学校がすごく憂鬱に感じる」

「えー？それっていつもじゃない？」

俺に対して失礼な言葉を投げかけてきたのが真苗未央まなえみお。中学のころからの知り合いで友達と呼べると思う。

「ああ、いつもだな」

「お前に言われたくないな」

俺に失礼な言葉を投げかけてきたのが志野野辺雄大しののへゆうだい。なんか昔っからよくつるんでいる。

「君は常にそういう顔をしているからな」

「なんだそれは！俺の顔が憂鬱だとも言いたいのか！」

俺に失礼な言葉を投げかけてって投げかけるやつ多すぎだろ！どんだけ俺のしんじずみのまわりには失礼なやつがいるんだよ！ともかくこいつは木

野白泉。このクラスの委員長だ。

「気温がな。少しばかり不快なんだ」

「まあ、確かにこの暑さは殺人級だな」

「なにもそこまで言ってるねえよ」

まあ、確かに学校が憂鬱なのはいつも通りなんだけどね。まったくみんなも一度は考えたことがあるだろう。学校がなくならないかな？とか、中止にならないかな？とかね。俺はそれが毎日だ。

「マジで学校潰れないかなー」

「物騒なこと言わないでよー」

まあ、確かに。日常が一番だもんな。

○

「ところで一つ聞きたい」

「なによ?」

「なんで俺の部屋なんだよ!?!?!?!?!」

俺が帰宅すると俺の部屋にモーラがいた。朝はいなかったのに・・・。

「なんでっっているいろと楽だからに決まってるでしょ」

「男女同じ部屋というのを楽という理由で片づけなくてももらいたい

」!

とは言ったものの、こいつ何歳か分からないけどどうみても幼児体型だから何とも思わないんだよな。ていうか何か思った瞬間に俺に新たな称号がついてしまう。

「べ、別に私は気にしないわよ」

うそつけ。めっちゃ顔赤くなってんぞ。

「お前いままでどうやって過ごしてたんだ？」

「野宿」

「野宿！？お前それいろいろと危険じゃね？」

どうしよう一気に帰らせにくくなった。確かに追い出せば俺のせいでおかおこるかもしれない。でもだからといってここにはな……

「しょうがねえ。お前が住む場所見つけるまでなら許してやる」

「え？何言ってるの？」

「何って、ここに住んでいって言ってただけど」

「誰がそう言ったの？私はただここにいたただけど」

「は？」

「もしかして私をここに泊めるつもりだったのー？」

こいつ……まさか……

「ハメやがったな」

「別に。住む場所はあなたの隣の部屋よ。じゃあ、私はもう帰るわね」

そういつてモーラは出て行った。モーラの肩は震えていた……  
そうか……あいつ……  
笑ってやがったな!!!!!!!!!!!!!!

「あー、くそつ。宿題やる気なくなっちまったよ」

といいわけのようにつぶやいて、ソファに倒れこんだ。このまま寝ちまってもいいかなとか思ってたな。

○

ピリリリリ

「ん………なんだ？」

とある音のせいで俺は目が覚めた。なんだ寝ちまってたのか。時刻は9時。これは寮長のご飯間に合わねえな。やっぱり今日もコンビ二かよ。そして俺の眠りを妨げたのは電話、着信音だった。相手はもちろん………

ピ

「どうした？志野野辺？一人じゃ寝れないか？」

『そんな理由で俺が電話するかよ。違う。今から学校に来ないか？』

意味がわからない。今、夜の9時なんだけど。

「お前12時間ぐらい時間間違ってたぞ」

『話聞けよ。学校で肝試しやるんだ』

「バカには付き合ってられない」

俺は即効で電話を切ろうとした。しかし志野野辺が大きな声で・・・

『真苗と委員長もいるぜ！』

「なんでやねん」

テレビの雑段芸人みたいにこけそうになった。あいつら何やってんの・・・。志野野辺のバカに付き合う気なの？真苗はまだしも委員長はそんなことするとは思えない。

「しゃーねー。俺も行く」

数少ない友達だしな。断ってばかりもいけないだろ。っていうかぶつちやけキヤーとか言ってる女の子に抱きつかれるかもとかそういう邪な思いも少々。俺はとりあえず制服である黒い学ランを着てまだ少し眠っている頭を無理やり水で起こし、外にかけていった。

○

「はい！とゆーわけでー！チキチキ第一回肝試し大会！！！！」

「わー、やー！」

「ふむふむ、ワクワクするな」

「いいから早くやつちまおうぜ」

なにこの温度差。どんだけ好きなんだよ。肝試し。だが夜の学校は

結構雰囲気が出ていた。

「最近な、学校内に気味の悪い青い炎が夜に見かけられるという近所からの報告があつてな」

「それで先生に許可を得て学校に入れるのか」

委員長が説明してくれた。俺も聞いたことがある。夜になると学校内に青い火の玉が見られるという噂。付添いの先生がいないということはやはり信じてないということか。だから適当に俺たちに学校内を見てもらつて、いないということを証明するわけか。確かに学校の評判が悪くなるもんな。

「じゃあ、いつちよやつたりますか!」

「わー、楽しみー」

「委員長としてここは真面目にだな……」

誰一人として学校に入ろうとしない。なぜだろう。ていうかお前から誘つたんだからお前らが先に行かないと進まないだろ。もしかして……いや、ほんと確率は少ないけどね。大穴狙いぐらい確率低いよ。

「もしかして、お前ら、全員怖いのか?」

「……なっ、なわけあるか……!」

助けてほしい。全員興味はあつただけけれど、全員怖がりだと。そこで俺を呼んだんだな。まったく呆れさせるぜ。ま、別にいいけど、ひとつ言いたいことがある。

「俺も怖いんだけど……」

臆病な奴らでパーティー結成。こりゃ、スラムにも勝てねえな。

第2章 第8話 TESTING COURAGE (後書き)

第2章始まりました。

今回のタイトルは肝試しです。ていつかそのまんま英語にただけですが……。

僕は怖いのが普通に無理ですね。

暗いところが普通にね。怖くてね。

でわ

## 第9話 GHOST

「ジャンケン……」

「……ポンッ!」「」

「ぎゃー!つてやつは俺かよ!?!?!」

はい、これで肝試しの先頭は井野宮いのみやてんと天十。俺に決まりました!……  
……  
やべえ……マジで帰りたい。ていつか泣きそう。

「じゃ、じゃあ行くぞ」

俺はおそろおそろの玄関に入る。うっわー、先が全然見えねえ……  
。真っ暗だよ、真っ暗!本当にさー勘弁してもらえませんか……  
。。

「こんなこともあろうかと懐中電灯がここにある」

「志野野辺、お前がそれを持つてるならお前が先に行けばいいだろ  
っ」

「いや……俺は……ちよつと熱があつてね」

「じゃあ、帰れ」

くっそー、やつぱり俺が行かなきゃいけないのか……。足がす  
くんでしょうがない。我ながらかなり情けないな。俺は一步、また  
一步と進んでいった。

○

「ここにも出てこねえな」

俺らは一階にある図書室から出てきたところだった。これで一階は全て調べおわった。次は2階かよ。

俺らの校舎は4階まであるので、ちよつとめんどろつだ。

「じゃあ、2階に上がるか？」

「あ……ああ……そうしてくれ」

「怖いよ……怖いよー」

「私もこれはちよつとな……」

なんでお前らきたんだよ。俺もだけど俺はしょうがないだろ。うん、たぶん……。だつてまさか全員そついう系がだめだとは……。俺もだけど。

「ん？みんなあつち側で何か光つたよー？」

真苗のセリフを聞いた瞬間まるで本能だといわんばかりのはやさで全員が振り向いた。しかしそこには何も無い。

「ま、真苗……冗談はやめてくれ」

「冗談じゃないもん。じゃあ、あつち行こう？」

くつ、俺が先頭だからって簡単に言いやがって……。と、思いつつも興味があるので進んでいく。だが本当に何もなかった。志野野辺が近くにあった階段を指さして……

「ここ上がって行つたんじゃない？」

「へいへい、行けつていうことだろ」

俺らは階段をのぼっていった。もうやめないかい？分かってるさ、こいつらが納得するまで返してくれないことぐらいな。

○

「2階にもいねーじゃねえか!」

「あれ？おかしいな？」

「じゃあ、3階じゃないかなー？」

「よし、井野宮君。3階に……」

「先頭の気持ちがお前らに分かるかつ!」

先頭を甘くみないでほしい。かなりの怖さだ。真ん中におさまっている真苗なんかきつと幽霊って何？おいしいの？と思ってるに違いない。

「あー、またあつちで光つたー!」

「マジで!??っていないじゃねえか」

「じゃあ、こんどはあつちだな」

「じゃあ、井野宮君。よろしく」

「話聞いてた!？」

ちつくしょう!もう嫌!!

○

「3階にもいねえだろうが!」

「悪い。4階行こうぜ」

「そつだよー急がないと」

「私もはやく寝たい」

「お前ら自由すぎだろー!!」

やっぱり来なきやよかつたな……。

「あー!!またあつちで光つた」

真苗のそのセリフを聞いた瞬間、俺は体が先に動いていた。走る、走る。目で見える前にまずはその場所へ行く!そして俺は見た、見てしまった。

「ひ、ひ、火の玉だ……ひとだまだ――――」

「――!!」

「「ぎゃ――――!!」

「」

俺らは全力疾走で走り出した。

○

「はあ……はあ……はあ……」

「ようやく……逃げれた……」

「私もこれは……キツイ……」

ここは学校の校門前。するといつも聞こえてくる間延びしたような、穏やかな声が聞こえないことに気付いた。あれ?これってもしかして……。

「真苗は？」

「わ、わからん」

「私もだ」

はっはーん。分かったぜ。あいつトロいからな逃げ遅れたんだろうな。ハッハッハッ。

「今すぐ助けに行くぞ！」

「「おう！」」

俺らは弱い。臆病だ。だが仲間を見捨てられるほどまでに弱くはない。しかしその時・・・

ピリリリリリリ

「あ？誰からだ？」

俺の携帯の着信音がなった。今の時刻は午後9時30分。誰だろうか？

「あ、真苗からだ。メールかよ」

そこにはこう書かれていた。

『わたしは大丈夫だから。先に帰って。っていうかわたしが先に帰っちゃった（\*^^）v』

ふざけんな あの野郎どんだけ足はえーんだよ。ってことはもう家に帰ってるのか。

「真苗は先に帰ったってよ」

「なんだ、じゃあ俺らも帰ろうぜ」

「私ももう眠い」

俺らは帰宅した。もちろんその日の夢は決まっていた。いい夢ではなかった。ていうかこれどうやって先生に報告するんだよ。「ひとだまが出ました！」なんて言ったら殴られるな。

○

「あれ？真苗は？」

朝学校にきてみると真苗がいなかった。なんだあいつ。風邪でもこじらせたか？

「なあ？志野野辺。真苗は今日休みか？」

「真苗？……誰だそれ？」

こいつはとうとうあれらしい。残念だ。病院に行くことをおすすめしよう。ということまで委員長に聞いて見る。

「真苗？はて……誰だったか」

あれ？これもしかして俺をからかっている？てことは志野野辺はグルだったのか！くそ！だが俺には先生という手が残っている。先生が来た瞬間に俺が真実を聞いてこの勝負は俺の勝ちってそもそもなんの勝負だよ。ていうかこの2人しか聞ける人がいないってというのが

悲しい。友達が多いとめんどろだろ？っていう言い訳。

「さーで、先生はやくこないかなー」

俺は席を立ち、教壇の前に立つ。するとふと座席表が見えた。

「!!!!!!!!!!」

驚愕したさ。一瞬いじめかと思ったが。違うその部分がるまるな  
くなってるんだ。そう・・・・・・・・

真苗の席が。

## 第9話 GHOST (後書き)

はやばやと次の話の更新です。

すごく疲れました。幽霊とかほんとに苦手です。  
怖いですもん。

というわけでタイトルは幽霊っていう意味のゴーストです。  
でわ

## 第10話ANGEL

おかしい……世の中がおかしくなったのは今に始まったことじゃないが、真苗が消えた。消えたんだ存在ごと。なぜか俺以外のみんなが真苗の存在を忘れてる。

「意味がわからない」

とは言うものの俺は誰に聞けばいいかは分かっていた。俺は授業が終わり、帰り支度を終わると急いで家へ走り出した。あいつに聞けばわかるに違いない！

○

「女の子の部屋か……。自ら行くのは初めてだな」

そう俺は今、俺の隣の部屋。モーラの部屋に訪れていた。チャイムを鳴らす。

ピンポン

「はい、ってあなたかよ」

「その反応はひどいとは思わないか」

「昨日のあんたの方がひどいわよ！！」

そう、モーラは昨日肝試しに誘ってもらえなかったことについて怒っているのだ。別に誘わなくていいかなと思っただけれどやはり興味

があるらしい。

「悪かった！次はちゃんと連れて行く！だから相談にのってくれ！」  
「相談？まあ、中入れば？」

俺は部屋に入れさせてもらう。一応、寮なので広いということはないのだが、なぜか俺の部屋より広く見えた。そして甘いにおいがする。

「で、相談って何？」

俺が座布団に座ったのを見計らってモーラが聞いてくる。

「真苗って知ってるか？あれ？モーラはまだ知らなかったっけ？」  
「モラルでいいわよ。モーラ・ルーレットだからモラル。真苗……あのトロそうな女ね」  
「正解。あいつがいなくなっちゃったんだよ。いや、存在ごと消えたんだ」

俺は昨日あった経緯を全て話し、今日のことも話した。

「ひとだま……ねえ……」  
「なあ、どついうことなんだ」  
「2つ可能性があるわ」  
「お、ほんとか！」

やはりこいつに聞いて正解だった。

「一つ目は職業ジョブの戦いに巻き込まれたか」  
「ジョブ？」

「あの、色縦師とか錬金術師とかをまとめてそういうの」

そういえばあの錬金術師、戦いに巻き込まれた人間はいなかったことになるとして……。まさか！

「待ちなさい」

「でも！」

「まだ、可能性があるわ。まず、それは結界を張っていた場合のみ適応されるのよ」

「じゃあ、あの学校には結界がなかったのか？」

「あたしにはわからない。結界は死人を増やさないためのまわりに張るバリアみたいなものだからその必要がある場所にしか使われないと思うの」

「……じゃあ、もう一つの可能性は？」

「ネクロマンサー死霊使いの可能性ね」

「ネクロマンサー……？」

「死霊使いよ。ひとだまということからもう一つはこの可能性ね」

「じゃあ、さつさとそいつを探さないと！」

「いや、厄介だわ……。ひとだま。すなわち人の魂の抽象化が行えるのは上位ランクの死霊使いネクロマンサーだけ」

「ってことはもしネクロマンサーが相手だったら……」

「こつちが死ぬかもしれないわね」

上位ランク……。上級か……。色縦師が確か一番弱い初級だったはず……。だとしたらあの何倍強いやつがでてくるんだ？

「でもネクロマンサーはなんで人の存在を消せるんだ？」

「人を死界に連れて行くからよ。強制的に死界に連れて行かれたも

のは存在も消えるわ」

「死界から連れ戻すことはできるんだよな？」

「手遅れだったら・・・死んだのと同じ扱いをされるわ」

「！？だって存在ごと消えてるのに・・・」

「死界に連れていかれて1週間がたつと存在が戻る。でも事故で死んだことになるの」

「じゃあ、急がないと！」

「待ちなさい。死霊使いはたぶん夜にでてくるわ。その前にあなたに聞きたいことがあったの」

聞きたいこと？そっぴや、俺もモラルに聞きたいことがあったな。ついでに聞いておくか。

「俺もお前に質問がある」

「あんたからでいいわよ」

「お前はなぜ狙われている」

そう、これは何回聞いても無駄だった話。しかし俺の友達に被害がでたんだ。これは俺にも知る権利があるだろう。

「やはりもうそろそろ話さないといけないか・・・」

何かを決心したようにモラルは話しだす。

「私は『天使』。っていったらあんたは信じる？」

「天使・・・」

最近アニメや漫画でよく見る天使か？俺が経験した世界ではそんなものいなかっただけだな。

「あなたが想像してる天使とは違うわよ。『天を使う』という意味なの」

「天を使う？どういうことだ？」

「次元移動。あんたも見たでしょ？あれは天を使うものにしか使えない」

「つまり、その職業ジョブのやつらも使えない力を天使は使えるということか」

だんだんわかってきた。自分たちでは手に入れられない大きな力が欲しかったのか。だからこいつは狙われている。でも……次元移動なんて何に使うんだ？そんな重要とは思えない。

「次元移動はその名の通り次元をも超越するテレポートなの。だからこの世界。この世以外の場所にもいけるのよ」

「例えば妖精の国とか？」

俺はふざけてみた。しかしモラルは深刻にうなずき……

「いけるわよ。妖精の国」

「!!!!!!」

「その変わり天使にはそれぞれ一つしか力が与えられないの」「じゃあ、お前は移動の能力をさずかっただってということか」

でも正直まだうさんくさいと思っていた。最近あちこちで天使とかが出てくる物語があるので、親近感というか、なんかいまいち緊張はしなかった。

「なんかしつくりこねえな。うわ！マジで！？っていう新鮮さがな  
いというか……」

「それはあんたが見てる漫画とかにいったいばいでてくるからでしょ！

あたしは本物！！」

「いや、本物なのはわかってるよ。次元移動も一度見たしな」

そこでモラルも俺に質問があったような……ということを出した。

「そういえばお前も何か質問があるんじゃないのか？」

「ああ！忘れてたわ！」

やっぱりな。

「じゃあ、質問するよ。あんたの言霊って何？」

絶対くると思った。俺が経験した世界とは違うなとは思っていたからそんなに驚かなかったよ。まあ、せつかくだし話しておくか。

「俺の言霊っていうのは、言葉に意味をのせたものなんだ」

「意味？」

「そう。言霊という技があるんじゃないかって、言葉に意味をのせたものを言霊と呼ぶんだ」

「で、それを実体化させるのがあんた、ことだまつかい言霊使いの能力」

「その通り。だから意味の力が大きければ大きいほど言霊の力も大きくなる。例えば相手をすごく殴りたいと思つて意味をのせると通常より強い言霊がでるんだ」

「物騒な話ね……。確か言葉を聞いた人は誰であろうと言霊の力がでちゃうんでしょ？危険すぎね、あんたの能力。でも、ま、わかったわ」

そこで話は終わった。俺はモラルにお礼を言つて、自分の部屋に戻つて行つた。そこで今日の準備をしようと思つたのだ。モラルが狙

われているなら今日学校に連れていくわけにはいかない。今度は連れて行くと言ったけど守れそうにないな……。

「さーて、今日もコンビニで弁当だな」

もうそろそろ寮長の料理が恋しくなってきた。でも晩飯の時間には部屋をでないと間に合わない。

「寮長自体にあんま最近会えてないからな。晩飯、なんの弁当にしよう……」

俺の思考はコンビニの弁当でいっぱいだった。頼れるものはだれ一人いない。自分だけだ。あまり目立たないように今回は終えるさ。だって俺は脇役だからな。

## 第10話ANGEL（後書き）

今回のタイトルは天使という意味です。

天使は最近あちこちで出てきます。

でも決してありきたりにならないように書いていきたいです。

こう・・・あっ！と驚くようなね・・・・・・・・・・できなかつたらすみません・・・・・・・・。

でわ

## 第11話 HACKING

はい、さてこんにちわ。井野宮<sup>いのみやてんと</sup>天十です。まあ、真苗を助けに行きましたよ。ほんとだって！マジマジ！でも……校門でかえされた……。めっちゃ必死に説明したのに通してもらえなかった……。

『今、この学校で友達が取り残されてるんです！今日は訪問者がいなかった？昨日の話ですって！嘘じゃないです！！え！ちよつとあれ？行かないでー！ー！』

めっちゃ必死だろう。でもこれでもだめだったんだぜ。というわけではなくして校門を開けたいんだけど……。

「何かいい案ないかなー？」

「何がだ？」

「うおう！ー！」

目の前には委員長顔があった。やめてくれ……心臓に悪い……。というわけで今は学校。放課後である。

「いや、夜に学校に入りたくてな。でも先生が入れてくれないんだ」「じゃあ、校門に細工したらどうだ？例えば、ハッキング的なもので」

「例えばでそんなすごい例出さないでもらえます！？」

やはり俺の周りにはそういう手のうまいやつはいないのか。

「いや、不可能じゃないぞ」

「ハッキングの話か？俺にはそんな能力はない」

「違う。パソコン部の部長、友永君ならできるかもしれない」

「パソコン部部长？」

「1年生。だから私たちと同じ学年で部長を務めているやつさ。噂によればそういうこともできるとか・・・」

「そんなことできるわけないだろ。そんなやつがいるとは思えない」

「一応、見に行くだけ見に行けばいいじゃないか」

「・・・まあ、そうだな。行ってみるか」

俺は教室を出て3階に行く。確かコンピューターがたくさんある場所にいるはずだよな。

「ここか・・・」

扉にパソコン部と書いてあった。ここの教室授業でも使うよね・・・  
。。まあ、いいか。

「すみません、友永君いますか？」

「私が友永だが」

すごく真面目そうな・・・  
・・・女の子だった。髪は長く少し青みがかった色。背は高くバストもそれなり。メガネをかけてる。あ！あのクソ委員長、女子のことも君付けで呼ぶんだった！！！！なんとかしてごまかさないと・・・

「ああ、あなたが友永さんでしたか。噂によると性転換したとかいう話だったので間違えて君付けで呼んじやいましたよ。はははははは」  
「その情報源を殺さなくてはな。どこのできそこない不良の仕業だろうか」

思ったより毒舌だった！というかこのままでは僕のせいで多くの不良に被害がでそうなので、話をそらすことにした。それじゃあ、解決になってないって？まあ、いいじゃん。こいつ怖いし。

「えーと、単刀直入に言う。夜の学校に忍び込みたいから校門を開けてほしい」

「いやらしいことを学校でするのか？」

「なんでそうなるんだよっ！ちげえよ！友達を探すんだよ！」

「学校かなかないシチュエーションじゃないか。私も手伝わせてもらう」

「なんの手伝い！？校門開けてくれることだよね！？そのことを手伝ってくれるんだよね！？」

最悪工口野郎だった。なんだこの妄想全開。こんな真面目そうなのに、エロい…………。

「では何時に集合だ？」

「ん？ていうかお前本当に開けれるのか！？」

「何を言う。私にとつたらそんなこと簡単だぞ」

「この学校は変人だらけか！！」

そんなこんなで夜9時集合ってことに。心配すぎる…………。

○

「あんだ、また昨日私にだまって学校に言ったわね！」

「いや……………すんません……………」

帰ったらこれだよ。予想はついてたが怒りようが予想以上だ。

「今日は連れて行ってもらうわよ！」

「でも、お前が行ったら危ないんじゃない………」

「私は天使よ！天使！！平気よ、そんなの！」

説得力がなさすぎる。お前色縦師のザコにもやられてたじゃん。今回の敵はそれより強いんだろうが。

「分かった。連れていくけど、危険になったら逃げるよ」

「私に指図しないで！」

結局こうなるのか……やれやれ。

○

学校の校門前。今の時刻は午後8時58分。俺とモラルは友永さんを待っていた。

「友永なんて女待たなくてもこの門を壊せばいいじゃない」

「無理だろ。俺の能力は言葉が聞こえないと作用しない。物には無理だ」

「私ができるのは次元移動だけど……そうほいほい使えないし………」

「よお、まったか？」

そのとき友永さんが到着。

「井野宮君に……………えっとそちらのお嬢さんは？」

「こいつはモラル。俺の……………友達だ」

「そうか。よろしくモラルさん」

「よろしく。さっさと開けてよね」

「分かっている。任せてくれ。ところで……………」

「今日の夜の相手はこのモラルさんか？」

こいつはとんでもねえこと口走りやがった。モラルは首をかしげているが、俺にはわかる。そういやあ、こいつまだ俺がここでいやらしいことをするって思ってるんだよな。

「勘弁……………」

俺の気力はもうすでに無気力へと変わろうとしていた。

## 第11話 HACKING (後書き)

もう気づけば11話です。

結局先に始めた推測屋の方を抜きました。

タイトルはハッキング。そのまんまです。

でわ

## 第12話 FAIR HAIR

「ねえ？天十。この女何言ってるの？」

「やめる。俺に聞くな。あいつはきつと日本語を聞きとるのが苦手なんだ」

「何を言っている。私は日本人だぞ。バカにするな、豚が」

「そこで毒舌！？じゃあ、俺の話ちゃんときけよ！！」

誤解解くのはあとでいいや。とりあえず、校門を開けてもらわないと。

「この門、開きそうか？」

「だれに聞いている。こんなの簡単だ」

すると友永さんはパソコンを取り出し、インターホンにつなげた。

「インターホンに繋げるのか？」

「ああ、そうだ。ここから先生の声を流す。だからハッキングなどではないな」

「どういうことだ？先生の声を流してなにになる？」

「誤認させる。この時間帯に残っている先生はざっと15人。有田先生に明智先生、柏木先生、古都先生、本田先生などなど」

「そんなことが分かるんだ・・・」

「そこでこの時間帯にいない先生の声を流すことにより先生だと誤認させることができる」

「でもインターホンだから映像も映るぞ」

「私をなめているのか？映像ぐらい1時間あれば作れる」

「ってことはもう作ってきたのか！？」

「ああ、あとはインターホンを押すだけだ」







「死霊使いのトーテム!!」  
ネクロマンサー

「よろしく。君を連れ戻しにきたよ」

「あれが死霊使い……」

「こっちは初めましてだね。言霊使い君」

「井野宮天十だ……」

「井野宮君ね。君には悪いんだけど、その子返してくれないかな？」

「なぜだ！こいつで何をしようとしている！」

「簡単に言えば全ての次元の支配。どの世界もわがものとしてしようとしてるんだよね。神様は」

「神……様……？」

トーテムは口に薄笑いをうかべ……

「僕らのボスとでも言っておこうか。次元移動はそいつしか持ってなくてね。だから必要なんだ」

「次元の支配とは……俺らのこの世界もか？」

「もちろんだよ！僕ら以外の人間は全て除外する!!! ははははっ  
！」

「こいつっ！」

この世界には志野野辺が、委員長が、真苗がそしてルナとの思い出  
まであるんだ……。支配させるわけにはいかねえ!!

「君が僕らの仲間になるというのなら、君は除外しないよ」

「なるわけえだろ！」

「残念だなー。じゃあ、まずは君を殺そうか」

「できるもんならな！その前に真苗はどこだ？」

「死界にいるよ。僕に勝つたら返してあげる」

「なるほど。いい条件だな」

俺は脚に力をこめる。いつでもやつの攻撃に反応できるように。

「天十！やつは死霊使いネクロマンサーの上級であり、全死霊使いをまとめる『マスター』でもあるの！！！」

「マスター！？死霊使いのボスってことか！？」

「そう！だから気をつけて……」

「分かってんぜ。勝負は迅速に。あまり目立たないようにしないと  
な」

俺はやつを見る。今やつのいる場所は空。やつは浮いている。でもそんなのは関係がない。俺の攻撃に射程距離なんてない！！！

「行くぜ！死霊使い！」

「いいよ、楽しみだ。亡霊たちも騒いでいるよ！」

第12話FAIR HAIR（後書き）

ようやくバトルパート。

いやあ、僕なら夜の学校なんて絶対行きませんね。

タイトルは金髪。

別にネタ切れじゃないですよ！

でわ

## 第13話 DEATH FIELD

「『打』」

死霊使いのトーテムは何かに殴られたように吹っ飛んでいく。そう、俺の言霊だ。

「かはっ……………はあ、はあ、やるじやないか」

「そりゃどうも」

「でも少し甘いな。僕を殺そうとする感じが全くない。どういっつとっ？」

「俺はお前を倒すだけだ。殺しはしない」

「それは僕をなめてるの？」

「違う。殺したくないだけだ」

トーテムはまた空高く浮かぶとマントの中から手をだした。

「従え、我が僕たちよ!」

「なっ!」

その手に集まってくるのは間違いなく霊。俺の目にもみえる……………。

「目標はあの小僧だ。ねらえ、殺せ」

「うあああああああああ!」

めっちゃこっちに霊がくる! 怖い怖い! ……!

「くっ……『守』！」

俺は言霊でバリアをつくる。しかし霊はバリアにぶつかる寸前で消えた。その瞬間霊に思いつきり腹を殴られた。

「がはっ！」

俺は派手に転がっていく。ていうかなんで言霊が通用しないんだよ！

「はははは！おもしろいなあ、君は。霊は攻撃するときしか姿を現さない。姿が消えた状態だとなんの能力もつけけない！」

「ごほっ……くっ……じゃあ、守ることができないのか……」

霊のやつらはバリアの寸前で消えて、バリアの中に入った瞬間に姿を現したということ。霊には言霊が通用しない……。

「くっ！ならトーテム自身を狙って！」

「無駄さ。死界への扉」

するとやつ目の前に扉が現れた。

「僕は死界でまってるよ。その霊を倒したら会おう。まあ、この扉に入ることができたらね」

確かに扉は空高くにある。人間じゃ行くのは不可能な高さだ。その前に霊が立ちふさがってるわけだが。

「ちっ！待ちやがれ！！」

「残念。僕は待つのが嫌いなんだ。待たせるのは好きなんだけどね。」

じゃあね」

トーテムは死界の扉へとはいつて行った。

「くそっ！待て！」

「バカ！あんた前見なさい！」

「前……？おおぶっ！！！！！！！」

俺は吹き飛んだ。霊の存在忘れてたよ。我ながらほんとにバカだと思っ。

「あー！くっそー！こいつらめんどくせえよ！モラル、何かこいつら倒す方法ないのか？」

「次元移動はさっき使っちゃったし、あとは気合？」

「適当すぎだろおおおおっ！！！！！！！」

また殴られた。もうこれイジメだよ。ダメ。ゼツタイ。やっちゃけないんだよ。

「あぶねっ！！！！こいつら腕力が異常だな」

霊の数は5体。姿を現した瞬間に叩かないと意味がない。

「ソーン  
剣アール」

俺は自分の血から剣を生み出した。これで霊斬れるかな？無理そうだな……。

「でやあああああああああああ！！！！！！！」

俺は剣を振る。しかしまったく霊には当たらない。

「何やってんのよ!」

「いい案がないんだよ!お前も何か考えろ!!!」

「あんたが言霊で消えるって言ったらどう?」

「そんなことしたら俺が言霊に耐えられなくなるわ!一応容量みたいなのが決まってるんだよ!」

「へえー、メモリーカードみたいなの?」

「そうだよ!消えるなんて言ったら俺が先に容量オーバーで死ぬわ!」

急がないと俺の体力のほうもたなくなる……。

「あー。どうすれば……そうだ……!」

俺は自分の腹に剣を軽く刺した。

「あつ!あんた!何やけになってるのよ!」

「いいからみてな」

その瞬間霊が消えた。くる……攻撃がくる!!!その時俺の腹に鈍い衝撃が走った。

「今だ!『ソーンエリアル剣』!!!」

俺の腹から剣が生み出された。そしてその切っ先は霊にぶちあたっていた。

「ぶおおおおおおおおお!!!!!」

「はははは……あははははははは!!!!!苦しめ!苦しめ!」

「それ悪役のセリフよ!？」

これで1体排除!残り4体!!!!

「無駄だあ!!!!!!」

「ぐおおおおおおおおおおおおお!!!!!!」

そう霊はただ俺を狙って殺すように言われていた。こいつらは命令以外のことはしないのだ。だから例え仲間がやられようが自分もしなくてはいけない。これは自殺行為みたいなもの。まあ、みんな死んでるんだけど。

「出てこい!トータム!お前の霊は一掃したぞ!」

「待つて。あいつ死界で待つとか言ってたなかつた?」

「そうか、ならあの中に入れば……」

○

「ヒュー、よくたどり着けたね」

死界に入るとそこにはトータムと……

「真苗!!!!!!」

真苗がいた。眠らされているようだ。

「安心しろ。僕は人質なんて使わない。そんなことしなくても勝てるよ」

「人質なんて使ってたら俺が真つ先にお前を殺してたよ」

距離はけっこう遠い場所に相手はいるが霊がないのなら簡単だ。

「モラル。下がっている。俺の声が聞こえないところまでな」  
「分かった」

死界はなんか気持ち悪い構造をしていた。ところどころ人の顔に見えるような模様まである。なんか地獄のイメージだ。黒く、赤い。最悪だよ。気分悪い……。

「君は僕の領域に踏み込んだんだ。ここがどこだかわかるかい？死界だよ？」

「それがどうした」  
「ここは霊でできてる世界なんだよ！！従え！！あの小僧をねえ！殺せ！！！！！！」

するとその言葉を待っていたように霊がもうあちこちからでてきた。

「ギャー——————！！！！」

「僕にも操れる限界があるからね。これが限界だけど君には越えられない」

霊は苦手なんだって。でもそんなことも言ってもらえないよな。目の前には真苗がいるんだ。モラルも。絶対に倒す。……………  
・ところで学校どうやってなおそうか……………

第13話 DEATH FIELD (後書き)

死界になんて絶対に行きたくないです。

自分で書いてて、気持ち悪くなるっていうね……。

タイトルの意味は死界。デスフィールド……そのまんまですね。

でわ

第2章〈終〉 第14話 FLIGHT

「さあ、踊れ。盛り上がれ。たのしめ」

くっそ。見る限り霊、霊、霊。怖すぎて逃げようかと思っただぜ。数百、いや数千もの霊があちこちに漂っている。どの霊も目はうつろ。それが怖さを倍増させてるんだが、気になる感じだった。

「あれ？」

そういえば、この死界ってやつ霊できて世界とか言ってたよな……。それって……

「なあ、この死界を作ったのってだれだ？」

「何を聞くかと思えば……。僕にきまっているだろう」

だろうな。でも問題はそこじゃない。こいつらはまだ成仏をしていないってことだろう。もちろん、この世界に使われた霊たちも。

「この死界で使われた霊は成仏できるのか？」

「永遠にできない。僕がそうしたからね」

「な!？」

「この場所は僕を圧倒的有利な状態にしてくれる!!ここならだれにも負けない。そんな素敵な場所を手放すわけないだろう」

「じゃあ、お前は霊を利用したのか……。?」

「その通り。こいつらが苦しもうが僕は知らない」

ふぎけん……。なんでだよ……。もう少しで成仏できたやつもいるかもしれない。もしかしたらもう成仏してるやつもいたか

もしれない。それを無理やり縛って、死界に使われて利用されて。

『苦しい……助けて……』

「!?!」

これはなんだ……。誰の声だ？

『成仏したい……』

『楽になりたい……』

『苦しい……辛い……』

これは霊の声か？なぜこんな声が急に聞こえるように……。？しかもトーテムには聞こえてないみたいだ。まさかこれは俺に向けての言葉なのか？

『助けて……』

『誰か……助けて!?!?!』

ギリッ

思いつきり歯を食いしばった。悔しかった。こんなに助けを求めていたなんて。利用される辛さ、成仏できない辛さなんて俺には分からない。でも……

「なあ、トーテム」

「なに？、ようやく本気だしてくれるの？」

「ああ、ここからだ」

こいつは絶対に許せないことは分かった。

「ははっ！纏う空気が変わったね！楽しめそうだ！！！！！！！！」

「お前。何かおかしいと思わないか？」

「？」

そう俺はもう出し惜しみなんてしない。俺の得意分野を見せる時だ。

「ここ、死界に入るための扉、どこにあったか覚えてるか？」

「それを言ったら何になるの？まあ、いいや。確か学校よりも高くはるか上空に……………！？」

「気づいたか。なぜ俺がそんな空高くある扉にたどり着けたと思う？」

「お前……………まだ隠してるものがあるのか…………？」

俺は構える。すると俺の足のまわりに空気が渦巻きだす。

「言霊ってというのはな、思う力が強ければ強いほど言霊自身も強くなる」

「だからなんだっていうんだ！」

「『飛』」

すると俺のまわりを渦巻いていた空気がはじけ、俺は一瞬にしてやつ目の前に移動する。

「な!?!」

「さすがにこれだけ速く距離を詰めればお前の霊も何もできないだろ」

「そ、そんなバカな・・・!?!」

「うおおおおおおおおおおおおおおおおお!?!?!?!?!」

俺はやつの顔面に拳を叩きつけた。何の変哲もない拳。言霊がのっけていないただの。でもそれは俺の思いそのものだ。それをやつにぶつけた。

ドゴオッ!

「がはっ!?!?!?!?!」

トーテムは音をたてて倒れる。

「二度とこんなことすんなよ」

○

「でも意外だったわ」  
「何が？」

今は学校のグラウンド。真苗を救出し、安心して帰宅しようというところだ。

「あなたにもテレポートが使えたのね。扉に入る時なんて真上に飛んでたし」

「ああ、あれはテレポートでも飛んでるわけでもない」

「え？でも一瞬で敵の前まで移動したじゃない」

「あれは俺の一番得意な技でな。空気が一気に爆発してその衝撃で体が動いてるだけ」

「ていうことは超高速移動っていうこと？」

「そんな感じだな。俺は昔から空を飛んでみたいという思いが強かったらしく、この言霊だけ異様な強さを誇っているんだ。でもさすがに羽は生えなかつたけどな」

「超高速移動のくせに真上にも移動できるなんて飛んでるのと同じよ」

「いやいや、そのあと落ちていくだろ。それじゃあ飛んでるとはいえない」

とまあ、こいつに説明をしてやってるうちに真苗のうちについた。こいつも一人暮らしだからな。親とかがいなくて助かった。

「モラル。こいつをベッドの上におけないか？」

「やってみる……。次元移動！」  
テレポート

すると真苗を光が包み……消えた。

「成功したわ。まったく1日に2回も使わされるとは」  
「悪い悪い。でも、ま、全員が無事でよかったな」  
「私は今回すごく空気が違ったような気がする……」  
「……」  
「気のせいだ」

○

「おはよー、井野宮君ー」  
「真苗！真苗だよ！」  
「なにそのテンションー！？どうしたの？」  
「いや、なんでもない。会つのが久々だなあと」  
「毎日会ってるじゃない」  
「あ、そうだったな……ははは」

どういえばこいつ、あの間の記憶がないんだもんな。

「おはよう、井野宮、真苗」  
「おはよう、井野宮君、真苗君」  
「おはよー、木野白さんに志野野辺君」

そうか、まわりのやつも真苗のことは思いだしたんだな。なんかよ  
うやく俺の日常って感じた。そして気になるのが、俺らは学校にい  
る。だけど学校って壊されたはずじゃなかったっけ？

「それはたぶん結界のおかげじゃない？」  
「ああ、結界が張られてたのか。だから学校が壊されたことはなか  
ったことになったと」

.....あれ？俺今だれ  
としゃべってるんだ？

「何？その驚いたような顔は？」

「モラルー！？なんでお前がここに！？ていうか制服もうちの高校  
のやつだし！」

「あれー？井野宮君知らないの？昨日から留学生としてきたじゃな  
い」

「そうだったっけかー！すっかり忘れちゃってたよー！」

俺はモラルを強引に引っ張り、真苗たちに聞こえないように

「どういうことだ」

「すこし記憶を改ざんしたの」

「なんのために！」

「私も学校に行きたかったのよねー。それだけ」

「それだけで俺の日常が壊されてたまるかー！」

「井野宮君ー、モラルちゃんー。学校遅れるよー」

「はーい、行きましょう。井野宮君」

何この笑顔。なにこの性格。キャラ作ってんじゃねえか。まあ、で  
もたいして驚きはしなかった。俺にしてみたらこの経験も2回目だ。  
だからといって日常が荒らされるのは慣れないけどな。

第2章〈終〉 第14話 FLIGHT（後書き）

第2章終了です。

次は第3章なわけですが・・・ここまでこれたのも皆さんのおかげです！

ありがとうございます！

タイトルは飛翔。

でわ

## ブローグ〜GENERATION〜

「ネクロの少年もやられちゃったのか？」

男は言った。ネクロマンサーのことを少年と呼ぶだけあって20代後半っぽい。ぶしよう髭をはやしている。綺麗な黒髪をしているが、短く切られ、しかもボサボサ。なんか疲れた刑事みたいな男だった。着ているのもブラウンのコートにスーツ。

「めんどくせえなあ」

心底めんどくさそうだった。やる気が感じられない。しかし纏うものは他のものと違った。

「俺の部下もやられたことだし、いっちょいきますかね」

雑に頭をかき、立ちあがる。その男は、たばこを出した。いや生成した。

「天使になんて興味ねえ。でも仲間がやられたなら俺が出なきゃな」

男はたばこに火をつけると、口に近付けた。そして手が止まった。

「そついや、禁煙中だったな」

男はたばこの火ではなくたばこ自体を消し、歩き出した。

○

ネクロマンサー。確かに倒せたが、俺が最後まであれを隠していなければ勝てなかっただろう。それぐらい強い相手だった。しかし今はそれよりも……

モラルが学校に来た方が問題だ。

日常を壊される確率100パーだな。皆さんは勘違いしているのかもしれないが、俺は今でも「非日常」が嫌いだし、主人公なんてなりたくない。

今までの行いは脇役がなんかやっただけ程度に捉えてほしい。

脇役にだってネクロマンサーぐらい倒せるだろ。きっと主人公と仲がいい女好きの男友達あたりでも倒せるさ。そんなもんなんだと思ってくれ。

まあ、でも今のところは日常に影響がないからいい。だからモラルを手伝ってやってる。

ほんとそれだけだよ。

## ブログ3〜GENERATION〜(後書き)

今日2回目の更新です。  
ブログなので短めですね。

タイトルの意味は生成。

過去編はじめました！

<http://ncode.syosetu.com/n5817>

1 /

たぶんここかな？

ちがったら現主人公で出るとおもいます。

でわ

### 第3章 第15話SEA

「いえいえ、そんなことありませんよ」

「謙遜なんてしないでよ！モラルさんすごいね！」

「頭すごくいいじゃない」

はいこんにちわ。井野宮いのみやてんと天十です。いやあー、暑い。まだ6月でし

よう？なのにここまで暑いと7月、8月がどんなことになるか心配だね。ほんとこのジメジメ感好きになれない。

そしてもう一つの心配事、モラルのことだが・・・なぜかすつごくクラスに馴染んでいた。たぶん俺より友達多いな。

「まったく・・・・・・・・・」

するとモラルは友達との話を終えて、俺のところに戻ってきた。あ、何の用だよ。

「どう？すつごく馴染んでるでしょ」

「ああ、そうだな。ほんと、驚いた」

「ふふん、でしょでしょ」

何が言いたいのだろう、こいつは。なんだ、このお前より馴染んでるぜみたいなの勝ち誇った顔は。でもそれもしようがないだろう。成績優秀、スポーツ万能、優しくて明るい。そんなやつだった。しかし俺は運動神経は悪いし、頭もよくはない。この違いが圧倒的な差になっているんだ。

「じゃあ、あたしはご飯食べてくるね」

「おう、行ってこい、行ってこい」

俺は立ち去ったモラルを見送ると、自分の席に弁当を広げた。

「モラルちゃん大人気だねー」

「ああ、そうだな」

真苗未央まなえみおが間延びした声で話しかけてきた。ていうかお前もう弁当食ったのか？はやすぎるだろ。そういえばこいつ昔からそんな感じだったよな。

「俺は弁当食うけどお前は？」

「私はお弁当食べちゃったから井野宮君が食べるのを見てる」

「……あのなあ。食べるところを見られるのは落ち着かないんだけど」

こいつはわかってて言ってるのか？いや、違うな。こいつならきつと弁当食べるところ見られても動じないだろう。

「そうなの？ごめんごめん」

「いや、謝らなくていいんだけどさ」

ま、こいつとの会話が一番和むんだよな。どこぞの熱血バスケット少年より、どこぞのおかしい委員長より、毒舌パソコン部部长より、モラル……より？いや、あいつはカウントしないでおう。

「それにしても暑いねー」

「ほんとにな。こんな気温で体育なんてやりたくねえよな」

「あれ？体育なんてあったっけ？」

「例えの話。今日は体育ないよ」

こんな普通の会話が一番だとは思わないかい？思わないと言わないでくれ。思うだろうさ。

「午後の授業もがんばろー！」

「俺はできることなら休みたい……」

人間は熱に強くないんだな。だからといって寒いのに強いわけでもない。どうにかしてくれ。

○

「じゃじゃーん！これなーんだ？」

「あん？」

志野野辺がすごいテンションで話しかけてきた。今は放課後。俺は完璧に帰ろうかと思って席を立ったときだった。

「正解は……」

タメるな。腹立つ。

「海へ行こう！海まで移動料金タダ券！……」

移動料金がタダになるだけかよ。

「お前それ有効期間が7月の14日から8月の23日までだぞ。まだかなり日数があるじゃないか」

今はまだ6月。なんでこいつこんなテンション高いんだよ。

「いや、真苗と委員長も誘おうかと思っただら、今からテンションあがっちゃってー!」

体、もたねえぞ。あと、どんだけ待てばいいんだよ。

「まあ、いいや。それ券何枚あんの?」

「6枚だけど」

「残り2人は俺に任せてくれないか」

「いいけど、最高に美人なのを頼むぜー」

「分かってるって」

もう誰を誘うのかは決まっていた。あとはOKしてくれるかどうかだ。

「今日は帰るか」

「お前帰るの?」

「ああ」

「じゃあ、俺も! って俺は部活だった」

「お前、それワザとか?」

何回そのオチを見たか! もううんざりだし、飽きたわ! ! ! ! !

「じゃあな」

まあ、こんな感じで一日が過ぎていく。いい毎日だ。決しておもしろいわげじゃないが、それぐらいがちょうどいいんだよ。

○

「こんにちわ・・・久しぶりです・・・寮長・・・」

「ああ、最近顔見せないから死んだのかと思ったぞ」

やべえ・・・寮長怒ってるよ。背が高く、長い緑がかった髪をポニーテールにしている。服はなぜか毎回エプロンを装備している。

「えーと、すみません。ちよつといろいろとあつて」

「そんなに私に会いたくなかったとはな。残念だ」

どうしたらこの拷問から解放されるんだろう。永遠に終わらないものってあるよね。こ○亀とかさ。まだ宿題も残ってるわけだし、時間を無駄にはできない！

「寮長！俺、さっきからお腹痛くて！」

「じゃあ、私の部屋に來い。看病してやる」

「実は昨日から寝てなくて、フラフラなんです！」

「じゃあ、私の部屋に來い」

「行ったらどうなんだよ！！！」

思わずツツコンでしまった。この拷問は1時間以上続いたとき。

「ああーだりー」

寮長の説教をおえた俺に体力など残されてはいなかった。

「あんだ、なんかやつれてない？」

「なんでお前がいる！！？」

「だってお隣さん同士仲良くしなきゃね」

そんな気、微塵もないだろうに。ここは俺の部屋。俺はソファの上で力尽きた。

「俺はたぶん今から寝るわ」

「そんなこと予知しなくていいわよ」

くっ！こいつなかなか帰ってくれない。いつもなら「ああ、そう、おやすみ」と言っていなくなるのに……。

「お前、俺に用があんだろ」

「よくわかったわね。用というほどじゃないんだけど……」

「海が見てみたい」

「は？」

そりゃ、あっけにとられるさ。驚いたね。

「一度でいいから海が見たかったの！きれいなんでしょ」

「ああ、まあ」

そっぴや、こいつ海見たことないのか。この世界に来てまだ間もないんだししょうがないよな。そしてちょうどよく志野野辺がくれた券もある。

「いいぜ。連れてってやるよ。夏にな」

「ほんとー！やったー」

こいつもこんな喜び方するんだな。見た目は中学生ぐらいだし、本当にそれぐらいの歳なのかもな。というかお前、よく高校生になれたな。俺が試験官なら「だれだ。ここに中学生を連れてきたやつは」って言うよ。

俺はこのときはまだあんなことになるだなんて思ってなかった。そう、まさか俺の思考がダダ漏れだったなんて……。

このあとモラルに目いっぱい蹴られました。

### 第3章 第15話SEA（後書き）

第3章開幕ということですが。

目指せ！100章！！大分無理ですね……。

タイトルは海という意味です。

でわ

## 第16話 DECISION

あー、マジでめんどくさいな。ときどき何をするのもめんどくさい時があるだろう。それだよ。なんか今日はやる気がおきない。何かやることあるわけじゃないけど学校が辛いものになる。

「ようやく1時間目が終わったところか……」

何度も何度も時計を見てしまう。あー、もう帰りてえな。

「どうした？井野宮。元気がないぞ」

「その半分はお前のせいな」

「俺!？」

退屈をまぎらわすために志野野辺をからかう。だめだ。つまんね。今日は何やつても駄目な日だな。某目ざまし付き時計テレビの占いでは12位に違いない。

「あれー？井野宮君。どうしたのー？」

「別に。なんでもないよ」

真苗は心配してくれた。その気遣いはすごく嬉しいんだけど、今はちょっとな。だれに何を言われようが今日はどうも気分がすぐれない。

「なんなんだろうな……この感じは」

「あれじゃないか、思春期特有の……」

「それは言わせんぞ。何かわからないが嫌な予感がする」

志野野辺の考えはなぜか読める。というかこいつが単純すぎるだけなんだが。

「ふむ、なら別荘にくるか？」

「なぜ、そこにいきつく。そしてお前別荘なんてあんのかよ！」

委員長が唐突に言ってきた言葉に動揺をかくせない。

「いや、どこか環境の違う場所に行けばいいのかと思ってな」

「誘ってくれるのは嬉しいが、今はまだ夏休みでもなんでもねえよ。普通に学校がある」

その学校が憂鬱の原因の一つなんだけどな。

「なんか面白いことがおきないかなあ……」

俺は自然とその言葉を言っていた。俺らしくない。面白いことなんておきなくてもいいって思ってきたのに、その考えがいとも簡単に砕けた。ちよつと暇なだけだ。

「バカいえ、俺はこの日常が一番好きなんだ」

誰に言うでもなく、ただ独り言のように俺は呟いた。

○

気温は低め。しかし空は快晴。この天気は一度見たことがある。いや、そりゃあ一生に何度かはあると思うが、もっと最近。しかも印

象深い。この場所もまた印象深いものだった。

「モラルと初めて出会ったところ……か」

俺は出会ってよかったのだろうか。俺は自分でもわかるぐらい変わった。モラルと出会ってな。真苗とかにも明るくなったと言われたほどだ。それは果たしていいことだったのだろうか。

「俺はあれで……助けるという選択肢でよかった……のか？」

もう分からない。死霊使いを倒し、モラルが学校に来たあたりからこの違和感を感じていた。

「よかったんじゃないかな？」  
「ん？」

急に俺に話しかけてきたのは黒髪でブラウンのコートをきた、疲れた刑事のような男。

「どんなことに悩んでたのかは知らないが、少年がいいと思ったことをやったんだろう」

「ああ……まあ」

俺は初対面なのに返事をしてしまった。俺って意外と人見知りなんだぜ。

「ならそれは正解とはいえないのかい？」

「いや、俺はそれが……自分の選んだことが正解かが分からなくなっただけです」

「ふむ。俺は正解だと思うね」

「なぜ？」

「なんとなくだ。俺はあんまり考えないようにしてるんだよ」

そんなバカな理由があるかと思ったが、このおっさんの言うことに  
なぜか反論しようとは思わなかった。不思議な感じがする。

「それと俺に敬語はやめてくれ。苦手なんだ」

「ああ、わかったよ。おっさん」

「おっさんというのはやめていいんだよ？」

顔がこええよ。そんな気にすることか？いや、おっさんにはおっさ  
んの考えることがあるんだろう。

「初対面なのになぜか親近感がわくというか、おっさんはすごいな」  
「そんなことはない。俺はなにもしていないぞ。少年が勝手に俺の  
言っていることを聞いたただけだ」

なぜかすごく親しみやすいおっさんだった。

「分かった。俺も何も考えないようにするよ」

「いや、それはいけない。少年はまだまだ考えないといけない歳だ」

「そういうと思ったぜ。俺はもう大丈夫。心は晴れた」

「そうか。それはよかった。じゃあ、俺はここで」

「待ってくれ！おっさんは何やってるんだ？まさかフリーター？」

「違うわ！うーん・・・物をつくる仕事かな？」

「今度職場教えてくれよ！会いに行くぜ」

「やめてくれ。気持ち悪い。男にきてもらっても嬉しくねえよ。じ  
やあな」

ほんとなんだっただらうな。でもおっさんとの出会いで分かった。俺はきつとモヤモヤしたかっただけなんだ。非日常にかかわる言い訳みたいなものだ。俺はモラルを守ろうと思ったんだ。

「俺は言い訳なんてしない。主人公にはならないが、非日常には関わってやる」

第16話DECISION(後書き)

いきなりですがタイトルの意味は決意です。

たまにありますよね、やる気がない日。

でわ

## 第17話 FEELINGS

「さあ、モラル、学校へ行こうか！」

「どうしたの！？いきなり！悪いものでも食べたのね」

「ははは、何を言ってるんだか」

今の俺のテンションは高かった。なんか清々しい。きっとこれもあのおっさんのおかげなんだろうな。

「気持ち悪い・・・今日の天十・・・」

なんかひどいこと言われた。でも自分でもそう思う。だからといって今からテンションを低くするわけではないがな。

○

「学校が終わったーーーーー！」

「ホントだねー。今日の井野宮君はテンション高いねー」

「まあな。ちょっといいことがあってな」

「ふーん。そういうテンションの井野宮君もかっこいいね」

「ぶふっ！ー！！」

何この不意打ち！こいつに深い意味はないんだろうけど、ドキッとすんだろつが！まさかどこの男子にもこいつこんなこと言ってるんじゃないやねえだろうな。まさかこいつモテるのか・・・？

「真苗。お前ってモテるの？」

「ぶふっ!!」

同じ反応すんなよ!これは肯定と受け取っていいだろうか?

「そんなわけないよ!何言ってるの!？」

「そうか……」

こんなムキにならなくていいんだけどな。まあ、こいつに悪い虫がついたら大変だ。俺の癒しがどこかに言ってしまう。からかう相手も志野野辺だけになっちまうし。

「お前は俺のものだから誰のものにもなるなよ」

「ええ!?それって……」

あれ?なんでこいつこんな顔赤くなってんだろ。暑いのかな?

「どうした?暑いならどこかで涼んでいくか？」

「え?……」  
お、バカッ

なんか罵倒された。そして走ってどこかに行く真苗。なんか怒らすようなこと言ったかな?女の子は分からない。あとでモラルにでも聞いてみよう。

「よお、少年」

「おお、あんときのおっさん」

あの時の疲れた刑事のおっさんがいた。刑事じゃなくて製造する仕事らしいが。

「少年が愛の告白中だったからつい出てきづらくてな」

「愛の告白？」

「いや、なんつつか・・・フラれてもいいことあんぜ。だから頑張ろうな」

「なんで俺慰められてんの!？」

意味がわからなかった。俺のまわりにはこんなやつばっかなので気にしないが。

「ここは学校の近くだぞ。こんなところに用があんのか？」

「まあな。仕事だ」

「ここらへんなのか？工場」

「いいや、違う。今日は違う仕事でな」

「ふうん。そういえばお礼を言っただけだったな」

「だから俺は何もしていないさ。お礼なんてやめてくれ」

「そうか。おっさんがいいならいいや」

「じゃあ、俺はここで」

「なんだ？もう帰るのか？」

「まあな、嫁がな」

「お前、そんなの絶対いないだろう」

「ひでえな。まあ、いないけどな」

そう言っておっさんは帰って行った。何しに来てるのか分からねえやつだな。俺も帰ることにした。

○

「なあ、モラル」

「何よ？」

今はモラルの部屋。俺は相談があつたのであげてもらつた。

「真苗が怒つて帰っちゃつたんだけど俺なんかしたか？」

「急すぎよ。何があつたのか説明しなさい」

俺は説明した。一言、一言全部話しきつた。

「あんたほんつとバカね！！」

「また罵倒！？」

「女の子のこと何も分かつてないんだから！」

「じゃあ、教えてくれよ！」

「いやよ。自分で分からないと意味ないもの」

「そういうものなのか・・・」

ほんとに複雑だな。ところでさっきから背中が痛いと思つたら俺の背中をモラルが蹴つてやがる。この3章で蹴られたのは2回目だよ。なんでもない。こつちの話。

「それにしても平和だな」

「少し平和すぎるぐらいね」

「平和なのはいいことだろう」

「少し静かすぎない。死霊使いからまだ何も音沙汰ないのよ」

「考えすぎだつて。少しはリラックスしろ」

「じゃあ、まずはあんたが部屋から出ていってくれないと。お風呂に入るわ」

「じゃあ、帰るか。じゃあ、明日な」

「うん」

○

「少年。俺は少年のことを気にいったよ。昔の俺そっくりだ」

男は独り言をつぶやく。ここは高いビルの屋上。

「だからこそ残念だな。俺はお前に牙を向けたくなかった」

男は溜息をつき……。

「ま、俺は何も考えない。ただただ少年を殺すだけだ」

## 第17話FEELINGS(後書き)

タイトルは気持ちという意味です。

今回は少し日常色を出してみました。

いつもより青春!って感じに。

今日2回目の更新なので16話も見てください。

でわ

## 第18話 GENERALIZATION

学校が終わって家に帰る途中、あの疲れた刑事みたいなおっさんと会った。

「おっさん、今日もここきてるのか？」

「まあな、こっちの仕事も忙しくて」

「ふうん、大変なんだな」

「そんなもんだよ、いつもな」

「それにしてもおっさんは親しみやすいおっさんランキングで2位だな」

「ほお、1位はだれだ？」

「俺の親戚。出会って5分でケンカしてた」

「それはすごいな。さすがに俺は少年とケンカするつもりはないよ」

「俺だつてしたかねえよ」

俺はそう言つて笑う。おっさんはまたすぐ帰ってしまった。俺も立ち話は好きじゃない。だからちようどよかったのだ。

「さあて、明日は午前中で学校が終わるし、何しようかな」

「そつ！それなら！」

「ん？」

急に声が聞こえたので振り向いてみたらそこには真苗がいた。それならなんだ？ああ、そういえば俺こいつに謝らないといけないんだっけ？怒らせちゃったみたいだし謝つとくか。

「真苗、この前はごめん」

「へ？なんのこと？」

こいつはもう忘れているようだった。どういっことやねん。俺はあれからずっと怒った理由を考えて、そしてどういっふうに謝ろうと迷っていたのに。当の本人は………。

「まあいいよ。で、何の用だ？」

「うん……とね。午後勉強しよう？」

「べんきよー？」

勉強？真苗が勉強なんて言うはずがない。何かの聞き間違いだろうか。聞き間違いだろうな。

「もう一度言ってもらえないだろうか？」

「え？だから勉強しようって」

勉強らしい。どうせ暇だし、ちょうどよかったかもしれねえな。

「いいよ。どこですか？」

「うーん、どこがいいかな？私の家は？」

「なんかそれっていろいろと危なくないか！？」

「え？どうして？」

こいつは思春期の少年のことを何も知らないな。女の子の家に行くなんて死ぬほど恥ずかしい。どうせだったら………

「俺の家は？つっても部屋だけだ」

「ええ！？井野宮君の家！？」

なんだその驚きは。まさか真苗も俺と同じで異性の家に行くのが恥ずかしいとかさういう………

「ベ・・・ベッドの下は見ていいの？」

そういう心配かー！クラスメイトの女の子にこんな心配される俺は死んだらいいのだろうか。というかこれは委員長の引越しの時に委員長が「エロ本」、「ベッドの下」という単語を何回も使ったせいだろう。このままじゃ俺は変態になってしまう！

「大丈夫だ！お前が見てもいい程度の本だけ残しておく・・・」

・・・

「あんたはバカなの！？」

モラルにとび蹴り。背中を蹴られ吹っ飛ばす俺。確かに本は全部隠すべきだと思っただよ。俺は新手の変態になるところだった。でもこうして吹っ飛んで地面からなかなか起き上がれない場合は他の奴から変態だと思われるからどっちにしる変態か。

「ママー、あのお兄ちゃん地面に転がって何やってるのー？」

「見ちゃいけません！」

めっちゃベタベタだった。俺が変態に至る経緯はベタだった。まさか子供連れでそんなことという親子がいたとは・・・。

「モラル。お前のせいで俺は変態扱いなんだが」

「あんたはもう変態でしょ？そして起き上がれないあんたが悪い」

「お前が思いつき蹴ったせいで背中がいてえんだよー！！」

マジで立ちあがれない。

「真苗さん。私の部屋に来ますか？」

「え？」

「私の部屋は井野宮君の隣ですし、井野宮君も呼びますから」

「だって井野宮君！どうする？」

「いいんじゃないね？本人がいいって言うてるし」

「じゃ、じゃあよろしくね、モラルちゃん」

「こちらこそ。では明日」

あいつのキャラ気持ち悪いんだけど……。なんで素じゃねえんだよ。しかもさらっと俺まで入れられてるし。暇だからいいんだけどね。

○

眠いなー。と思いつつコンビニへ。今は夜の9時。モラル、真苗と別れた後、俺は部屋に入るなり寝てしまった。そのせいで寮長の料理も食べれない。また怒られるかな……。

「コンビニの弁当も飽きたなー」

「そうか少年は一人暮らしなのか」

「うおおおう！」

俺に話しかけてきたのはあのおっさんだった。こんな時間にどこに用事があるのだろうか。っていつてもまだ9時だが。

「急に話しかけるなよ。驚いたわ……」

「すまん。でもコンビニ弁当の味が飽きるまで食ったら体に悪いぞ」

「でも俺料理あんまうまくないしな」

「少年の栄養バランスに興味があるわけじゃないし、別にいいが」  
「そうかよ。んでおっさんは何しにここにいるんだ？俺に会いにか？」

「男に言われても嬉しくねえだろ。別に会いに来たわけじゃない。散歩だよ」

「ふうん」

「じゃあ、俺は散歩に戻るぜ」

「ああ、なんか頑張れよー」

俺は適当に応援して去って行ったおっさんを見ていた。ほんと何がしたいんだかわからないやつではあるが、嫌いになれない。そんな感じのするやつだった。

「はあ……憂鬱だな」

意味もなく憂鬱と言ってみる。実際寮長の説教が待っていると見えれば憂鬱なのだが……。痛い時は痛いつて言った方が痛くなくなるんだよ。だから憂鬱と言ったら憂鬱じゃなくなるのかなと思つてな。ただそれだけなんだ。

○

「じゃあ、後でね。井野宮君」

「ああ、またあとで」

放課後。午前授業を終えて、午後は勉強会だ。モラルの部屋に行くのが初めての真苗のために説明しようと思つたら、「井野宮君の部屋の隣ってきいてるけど」という具合にモラルからすでに聞いてい

たらしい。モラルは部屋に早めに戻って、片づけをするらしい。十分綺麗なんだけどな。

「眠いけど、寝るわけにはいかないよな……」

「よお、少年」

「ああ、おっさんか」

俺が声のした方へむくとそこにはおっさんがいた。ここは学校と寮のちょうど真ん中ぐらいの距離にある場所。近くには廃校になった学校があるが、昼なため怖くはない。

「おいおい、なんだその反応は？」

「別に。でも俺これから用事あるからはやめに帰るな」

俺は走ろうとした。しかし………

「まあ、慌てるな。話したいことがあってな。ついて来てくれないか？」

そう言って廃校を指さすおっさん。え………まさか………

「おっさんってコレなのか？」

「違うわ！ちゃんと女が好きだよ！別にそういうわけじゃないから」

「分かったよ」

俺はおっさんについていき、廃校の中に入って行った。

○

「んで、何の用だよ」

俺は歩きながら言った。はやく帰らないとまたとび蹴りされるかもしれねえんだぞ。おっさんに身代わりになってもらうからな。

「いや、今にわかる」

「おっ……さん？」

ビュッ！

俺の顔数ミリ横を刀が飛んで行った。すごい速さだったのか、かすつてもいないのに俺の顔には傷がついていた。衝撃波を思い出させるような感じだ。

「なっ……なんだ今の！どこから飛んできたんだ？おっさんにも見えただろ、今の刀！」

「しくった。まさか手元が狂うとは……。予想外だよ」

「は……？」

「悪いな。俺は錬金術師統括、鈴山アークセルフ。だからおっさんじゃなくてアークと呼んでくれ。少年、錬金術師最強地位としてお前を殺す」

理解はできない。理解もできない。理解さえもできない。理解する  
ことができない。理解ができない。理解・・・・・・  
・・・したくない。

第18話 GENERALIZATION (後書き)

タイトルは統括とかそういう意味です。

今回は少し長くしました。

なんとなく続きを書きたかったんで。

でわ

## 第19話 ALL SIDES

「何言つてんだよ……」

「だから、お前を殺すつてんだ。錬金術師最高地位として」  
「れん……きん……じゅつ……し？」

このおっさんとうとう頭イカれたのか？それとも現実と創作の区別がつかなくなっただか？それぐらいしか考えられない。それしか考えちゃいけない……。そんな気がした。

「まあ、少年が理解できなくても、俺がやることは変わらない。」  
ソードリアル  
剣「」

「なんでお前がその技を使えるんだ？手品なのか？」

「いいかげん、認める。俺は錬金術師だ」

ビュッ！！

剣が振られる。俺は何をしているんだろう。おっさんは敵だったのか？そんなはずは……。

「『剣』」  
ソードリアル

ガキンッ！

俺はおっさんの剣を自分で生成した剣で防いだ。火花が散る。

「少年も錬金術が使えるのか？すごいじゃないか」

「これは何の冗談だ？」

「冗談じゃない」

「俺を騙したのか？」

「俺はお前の味方だと言った覚えはないが」

ガキンツ！ガキンツ！ガキンツ！

なんどもなんどもぶつかり合う。そのたびにでる火花がまぶしい。俺は戦っていいんだろうか？いいんだ！いいに決まってる！やつは敵だ！……でも体が動かない。

「どうした？少年！防戦一方だぞ！」

「ぐっ……！」

ガキンツ！ガキンツ！ガキンツ！

「つまらないな。そろっ！」

ガンツ！！

「な！？」

俺の剣はあっという間に弾かれた。剣が俺の手から離れる。こいつ剣を扱いなれてる……。いや、俺が慣れてないだけか……。

「もらった！」

おっさんが一気に距離を詰めてくる。まずい！このままじゃ刺される！

「『飛』ひ」

「！？」









おっさんの後ろを完璧にとった。銃を撃つことなんてできるわけがない！そうやつは……………

「腕を生成したのか……………」  
「そうだ」

おっさんの腕は4本になっていた。しかも成言飛ばしで、だ。

「さっき生成した『ダブルガンリアル2丁拳銃』はダミー。俺が生成したのは……………」

「『オールサイズガンリアル四方拳銃』だ」

「く……………こいつの素材も見破ってないのに……………」  
「ああ……………冥土の土産っていうのをやってみたかったんだ。俺の素材を教えてやるよ」

「二酸化炭素だ」

ズガンッ！

容赦のない弾丸が撃ち放たれた。

第19話 ALL SIDES (後書き)

タイトルは四方という意味です。

さて、ようやくあと1話で20話です！  
なんかキリがいいですね。

でわ



「バカー！！！！死ぬな——————————————————————」

「！！この……声は……モラル……？」

「あんたが死んでどうするの！？このあと勉強会でしょ！！！」

ふふっ……。そうだったな。真苗を待たせるのも悪いし。じゃあな、ルナ。

『ちゃんと守ってあげてくださいね』

○

「無理だよ。お嬢ちゃん。その胸に開いた穴。赤い血。そいつは死ん……」

「死んでない！こいつと約束したんだ！このあと勉強会やるって！」

「ははは、それはそれは。悪いな。約束破らせるようなことしちゃつてさ」

「絶対天十てんとはくるんだ！！！！」

「勉強会とやらにか？そいつは無理……」

「……じゃねえ……」



光に包まれる。俺は必死に考えた策で挑む。負けるわけにはいかない。

「何だここは!？」

「次元移動で移動したんだ。こいつの能力でな」

移動した場所はホントに植物だらけの島。見渡す限りの緑、緑、緑。太陽が照りつけちよつと暑い。

「ここに移動したとて俺の勝ちが変わらんぞ」

「変わるさ」

「『オルサインスガン 四方拳銃』」

「撃つてみるよ。その瞬間お前の負けだ」

「ふざけたこというな。少年。ここらで諦めてくれないか？」

「なぜ？」

「俺はお前を殺したくない。いや、人を殺したくない。お前が諦めるなら……いや、悪い。今のお前は戦士の顔をしている。そんなやつにこんなこというのは失礼だな」

俺は拳をつくる。強く握りしめる。やつを殴る準備だ。

「ではさいなら。少年」

ズガガガガガガガガガガガガガガガガッ!!!!!!

一斉に撃ちこまれる。これをかわすことは無理だ。ならかわさなければいい。

ヒュンッ!

「!?!」

弾丸は全て俺の体を貫通していった。ただ貫通したんじゃない。なぜなら俺は無傷だから。

「どういうことだ……!何をした!?!」

「ここは植物しかないような島。あんたの弾丸が全て二酸化炭素でできているなら……」

「植物の光合成か!?!」

光合成。植物が日光にあると葉緑体がおこす現象。二酸化炭素を吸い、酸素を吐く。やつの弾丸は俺を貫通する前に植物に吸われたんだ。だから薄くなった弾丸は俺の体をすり抜けていった。

「『飛』」

パン!

空気が爆発する。俺は間合いを一瞬で詰め……

「悪いな。おっさん。俺にもやらなきゃならないことがあるんだよ!?!?!」

バゴオ!

「グッ……はっ!」

おっさんを思いつきり殴りつけた。死にはしない。でもそれでいいのだろうか？いや、いいんだ。何も考える必要はない。殺す必要はない。ただそれだけ……。それだけのことなんだ。

○

「井野宮君遅いよー」

「いやー、悪い悪い」

「この人探しに行ったら地面にいるアリを観察してたんですよ！まったくこのバカ……。」

おいおい、猫かぶれてねえしその説明はどうなんだ。アリを観察つて。一応高校生なんだが。

「私もよくそついうことあるよー。かたつむりさんとかね」

こいつも一応高校生なんだが。

「ま、とりあえず勉強しようぜ」

「うん！さつそくなんだけどこの問題が……。」

「げっ！数学かよ」

「なにそんな問題も解けないんですか井野宮さんは。まったくクズですね」

「なんで俺がそんなに責められるの！？」

この時間はいい。安心できる。やはり日常が一番なんだな。

「俺は文系なんだよ！国語なら完璧だぞ！」

「現国やってみなさいよ」

「やってやるうじゃねえか！」

「あははー、二人とも仲いいね」

この日常はいつまで続くのだろうか。永遠がいい。永遠に退屈でいいんだ。そんな日常が俺は大好きなんだから。この日常が壊されるようなことがあれば……俺はどうするんだろうか？分からない。知りたくない。分からなくていいような気がした。

○

「やられちまったか、あの親父」

「しょうがないですよ。それと汚い言葉を使つてはいけません。女の子でしよう」

「ちっ！これで俺が行かなきゃいけねえじゃねえか！」

「文句をいってはいけません。まず俺というのはやめなさい」

2人の女の子がいた。どちらも綺麗な顔をしているが、乱暴な言葉使いの方はしかめっつらで鋭い眼光。丁寧な方は常に目をとじている。身長は150後半。ブラウン色の長い髪の毛。白いワンピース。

「まあいい。俺で確実に仕留めるぜ」

「アンジエ、大丈夫ですか？」

「心配すんな、モカ。俺は剛腕のアンジエちゃんだぜ！」

「そんな二つ名付けられてないでしょう」

もう時は夜。その夜の暗さが目立たなくなるぐらいの闇がそこには

あつた。

第3章〈終〉 第20話 SAVING (後書き)

今回のタイトルは救いです。

とうとう20話ですね！

そして更新が遅れてしまつてすみません！

次回からは4章なので頑張ろうと思います！

## プロローグ4〜DOUBT〜

天使。

それは何者なのか。

羽がついてるから天使なのか。

光の輪が頭にあるから天使なのか。

空を飛んでいるから天使なのか。

白くて美しいから天使なのか。

善人だから天使なのか。

悪人だから天使なのか。

適当にならべてみたこの疑問。どれも間違いであり、どれも正解だともいえる。

そしてもう一つ言えることは……

天使と悪魔は紙一重じゃない。天使は悪魔で、悪魔は天使なのだ。

○

俺、井野宮天十いのみやてんとはそろそろ疑問に思っていた。天使とは何者なのか。そもそも本当にそんな存在がいるのだろうか。

というよりまだに分らないでいた。なぜモラルが狙われているのか？いや、説明はしてもらった。しかし謎な部分が多すぎる。

なぜモラルはそいつらから逃げているのか。そもそもそこから分らない。次元移動という能力がそんなに必要なのだろうか？他にも天使がいるならそいつらで世界制服などを考えてもいいんじゃないか？

考えれば考えるほど分からない。

でもいずれあきらかになるだろう。

俺はそれまで、その時までなにもせずただ大人しくしているだけだ。

脇役のようにな。

## ブログ4〜DOUBT〜(後書き)

タイトルは疑問です。

最近更新が不定期ですみません。  
なるべくはやく更新したいと思います。

でわ

## 第4章 第21話 BEACH

唐突だが一つばかり言いたいことがある。確かに俺はモラルと関わることにより少しずつ変わってきているかもしれない。でもだからといって嫌いだった食べ物が好きになれるか？それと同じように俺は人がたくさんいるところなんて大っきらいだ。というわけで……

「海だ——————————！！！！！！！！」

「うるせえ、志野野辺。少し静かにしろ」

俺、井野宮天十は海にいた。男子チームはすでに水着に着替えている。俺は黒、志野野辺は赤だ。チームといっても俺ら2人しかいないわけだが。あとは女子チームを待つだけ。

「これが騒がずにいられるか！海だぞ！泳ぎ放題だ！」

女子の水着目当てじゃないんだな。俺は別に泳ぐのが好きなわけじゃないし、理由をつければ女子の水着姿かな？いや、今のは幻聴だと思っしてほしい。

「おまたせー」

真苗の声が聞こえた。いつものように間延びした声だが……

「うおっ！」

「はっ！」

やばかった。胸とかにしか目線がいかない。全員ビキニだった。全員というかメンバーを紹介しよう。

モラル。これはあれだな。幼児体型なくせして……なんか悔しい。ピンク色の水着。つづいては委員長の木野白泉。これはいい体型してるから余計に……目に毒だあ！こんなのみせちゃいけない！黒色。さらに真苗。あれ？こいつこんなに胸大きかったっけ？白に花とかがついてる水着だ。そしてあと一人……

「私はこういうのにむいてないんだが……」

パソコン部部长、友永さん！！いやーすごいなー。何がすごいって胸！緑の水着がまぶしい！……

とここまで水着について語ったが、これはどのような水着か伝えようとしたんだ。俺が変態なわけじゃないぞ。決してだ。

「じゃあ、最初は泳ぎましょー！！！！！！」

志野野辺のテンションがうざい。人は意外と多い。というかもう夏だ。いやーじりじりと照りつける太陽が……邪魔くさい。

「うっしー！いいぞ！勝つのは私だがな！」

「木野白さんー！まってよー」

「お、お前ら！私は泳げないんだ！パソコンしかやってこなかったしー！」

「ずるいー！私も泳ぎますわー！」

こうしてみると・・・なぜか涙が出てきそうになる。これが俺の求めてた日常なんだ！ちなみに最後のセリフはモラルな。あいつ猫かぶってるから。

「じゃ、俺も行くのかな」

俺はそう言いながら立ちあがる。さあて、あいつらはどこにいるのかな？と探していると・・・

「ハハハハハハハハハハ！委員長！まだまだだな！」

「ちっ！これからにきまつているだろう！この水泳勝負私の勝ちだ！」

水泳勝負する志野野辺と委員長。

「これがね、ヤドカリさんなんだよー」

「へ、へえー」

心底楽しそうな真苗に苦笑いのモラル。

「ふむここらでやるか」

といつつ、パソコンを開き、アニメを見ている友永さん。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「さあてと、何するかな」

俺は見なかったことにした。というか知り合いだと思われなくなかった。真苗に至ってはもう幼児だった。モラルよりも子供に見えるって。

「おーい！井野宮もこいよー！」

「そつだぞ、委員長命令だ！」

「一緒にあそぼうー」

「わ、私からもお願いしますわ……」

「井野宮君、アニメでも見ないか？」

ちいつ！全員俺に話しかけやがって！まわりの人からすごくジロジロ見られてるよ……。うわぁー、帰りてえー。他人のふりしよう、他人のふり。

「おーい、素直にベッドの下にエロほ……」

「わあつたよ！いくよ！だからそれだけは言わないでー！！！！！」

泣きながらみんなのもとに走っていったとき。うれし涙だからなっ！みんなが俺を必要としてくれることが嬉しかったんだからなっ！決してエロ本のことじゃないんだからっ！

○

「かなり疲れたな……」

「バスケより疲れた……」

「私も少しやりすぎた」

「どうした？なぜ疲れている？」

「友永さんは泳いでませんもんね」

「えー、終わりに？ビーチバレーしようよー」

真苗の体力には驚いた。友永さんは泳いでないからただで真苗は泳いだぞ。それにビーチバレーなんて誰がやるかよ。

「おっけー！やるやる！」

「志野野辺、決着の時だ」

「びーちばれー？何それ？やってみたい！」

「何泣いているのだ？井野宮君」

なんとなくこうなることわかってただけどねー。俺の体力はゼロだよ。今ス〇イムに会ったらたぶん負けるよ。MP残ってても勝てないよ。

「ていうか友永さんもビーチバレーやれよ！」

「ああ、やるぞ」

あれ？意外とあっさりしてるな。今まで泳いでこなかったのに。

そんなこんなで第一回ビーチバレー大会が開催された。

気分は最悪。そんなコンディションで挑むことになるとはな……  
はあ。

第4章 第21話 BEACH (後書き)

タイトルは浜辺。だと思えます・・・。

大分不定期になってきてますが頑張っっていこうと思えます！

でわ

## 第22話VOLLEYBALL

今は7月26日。夏休みに入ったばかりの一番テンションが上がる  
とき。それなのに俺のテンションはガタ落ちだ。なぜか？人間だれ  
しも負けることは嫌なことだろう？それだよ。それ。

「受けてみよ！燃えるスパイク！！！」

「ちょ！燃えたらシャレにならないて！！！」

ズバッシューーン！

「はいこれでまた女の子チームの勝利ー！」

というわけでボロ負け中でした。

志野野辺がはじめようと言ったビーチバレーボール大会。

「3人、3人で分けるー？」

という真苗の提案に乗っかればいいのに志野野辺が……

「いや、ここは男子チーム対女子チームの方がよくないか？もちろ  
んハンデとしてそっち4人、こっち2人で」

「おい、志野野辺そんなこと言っていないのか？」

「大丈夫。モラルちゃんは大リーグ知らないようだし、真苗は運動音  
痴。残った友永さんはたぶん運動できない。委員長だけだ。しかし  
俺らは男2人。勝てるだろ？」

どんだけ勝利にどん欲なんだよ。容赦というものを知らないらしい。





その指示に従い、委員長が3歩さがる。俺はその場所にスパイクしていた。

「そんなバカな！」

委員長が上げたのを友永さんがネット付近に寄せ（友永さん普通に運動神経よかった）、それを・・・

「いくよー」

「しめた！真苗だ！」

「いや、あなどるな、志野野辺！あいつは・・・・・・・・・・」

バシユツ！

真苗のスパイクが綺麗にきまる・・・・・・・・・・  
・・・・・・・・・・。そう、あいつ中学の時バレー部なんだよねー。

「井野宮、今からチーム編成を申し込んでも大丈夫だと思うか？」

「死ぬ覚悟があるならいいんじゃないか？」

その前にバレーで死ぬかもしれないけど。

そんなこんなで1ゲーム目は1対25。2ゲーム目は2対25。ボロ負け。

「どうするー？もう帰るー？」

帰るといつても2泊3日で近くのホテルに泊まることになっている。今は4時半。まだ少し早い時間なのでただ疲れて部屋に行きたいだけなのだろう。



ピリリリ

「ああ？電話か」

部屋の電話がなった。

「もしもし」

『ああ、井野宮くんか』

「ああ、木野白か、どうした？」

『そろそろ寝ることかと思って、嫌がらせしてみた』

「つまらないことで眠りを妨げるな！」

最悪だ。俺はいつになったら寝れるんだろう。

『うそだうそ。ほんとにはバレーの罰ゲームとして肩を揉んでほしい』

「俺は胸しか揉まん」

『さらっと言つとは・・・井野宮くんもなかなかやるな。だが今すぐこちらにこい』

ブツッ

「どうしたー？井野宮」

「今から女子部屋にいくぞ」

「な、なんだその緊迫したシリアスパートみたいな顔は？」

「肩を揉みにな」

これはある意味シリアスパートではないだろうか。そう思う俺の予感  
は外れてなかった。

○

「もつと強くだ」

「はい、すいません・・・」

俺は何をやっているのだろう。委員長の肩をもんでいた。志野野辺は今、友永さんの肩をもんでいる。

モラル、真苗はすごい勢いで遠慮した。2人とも顔が赤かったけどなんなんだろうか。

しかし・・・

その肩とはいえ、なんか緊張するな。女の子の体を触るだけでもやばい。まさか2人はこれを分かっていて拒否したのか!?俺がいやらしい目でみると、そういうことか!

くそっ・・・やられたよ……。モラルはともかく真苗は揉みたかった・・・。

「井野宮君変なこと考えてるでしょー」

「え!? いや、なんも」

「井野宮君がやりたいならやってもいいけど・・・」

「え? 何?」

「な、なんでもないもんっ!」

これ以上俺を困らせないでくれ。なんで怒るんだろう。俺、何か言っただか?

「これいつになったら終わるの？」

志野野辺の質問に……。

「私たちが寝るまで」

な、シリアスパートだろ。

**第22話VOLLEYBALL（後書き）**

タイトルはバレーボール。

最近更新できなくてすみません。

これからも頑張るので応援よろしくお願いします！

## 第23話SERIOUSNESS

海2日目。

「さすがに疲れがたまってきたな」

「俺は平気だ！井野宮は軟弱だな、はっはっは！」

「目が笑ってねえよ」

そりゃあそうだろう。昨日は結局かなり遅くまで肩をもんでいた。疲れるのも無理はない。

「女子陣は元気だな」

「やつほー」

「今日もあそぼー！」

くそ………どういつ体の構造なんだよ。

「井野宮、少し話があるんだがいいか？」

「ん？ああ、話す方が疲れないし、いいぜ」

俺らは少し歩いて、女子から離れた場所に来た。それにしても人が多い。どうにかしてくれないかな。

「『銀色の闇』について聞きたいんだ」

「『銀色の闇』？そんなことについて知りたいのか？」

『銀色の闇』。

昔、俺が中学3年の時。地元の不良軍団『シルバーウルフ』と『暗

『き蝙蝠』の戦い。結局ケンカなのだけれど地元ナンバー1を争うケンカはケンカの域ではとどまらなかった。それは一般人をも巻き込み、物を破壊し、命を奪う壮絶な戦いだった。そのケンカはケンカとは呼ばれず、皆は

『銀色の闇』

と呼んでいる。なぜ俺がこんなに詳しいかというとその戦いには俺も軽く関係あるんだよな。その戦いを止めるために少し動いたのだ。

「で、何について知りたいんだ？」

「その『シルバーウルフ』と『暗き蝙蝠』の人たちは今でも元気なのか？」

「ああ、すごい元気だと聞くけど」

「そうか……」

「それだけか？」

「それだけだ」

なんやねん。それだけかよ。まあ、こいつそういうの大好きだからな。不良の戦いとかがそういうの。そして『シルバーウルフ』と『暗き蝙蝠』のリーダー今行方不明らしい。志野野辺はそのリーダーを探してインタビューしようとした時もあったっけ。見つからなかったけどな。

「さあ、あそぼうぜ、井野宮！」

「さっきの話聞いてた!？」

「え?人々は無事だった……」

「そこじゃない!その前だよ!まあ、いいや」

俺らはさっきいたところに戻るため、歩き出した。

○

「井野宮君どこいったのー？」

「いや、トイレだ、トイレ」

「木野白泉！俺と水泳勝負だ！」

「ふふっ、いいだろう。ここで決着をつける！」

「昨日のアニメ」

「天十ー、じゃなかった井野宮君ちよっといいい？」

なんだこれ。みんな自由すぎだろ。真苗は友永さんとアニメ見てるし、俺はモラルのところへといった。

「どうした？」

「なんか嫌な予感がするのよね」

「嫌な予感？」

「あんたによくないことが起きるかも」

「どこの占い師だよ！」

「いや、ほんとにほんと。だから……その……ちよっと一緒に遊びましょう」

え？……ああ、なるほどまったく素直じゃないな。俺と遊びたいだけだったんだな。

「いいぜ。何して遊ぶ？」

「うんとね、大人のおそ……」

「やめなさい。それ以上言うてはいけません」

こいつ何を口走ろうとしてたんだよ。

「それは誰に聞いた？」

「いや、委員長さんがこれをすれば仲良くなれるって……」

あのやるー！何教えてんだよ！汚すんじゃない！

「まってる委員長。やってやる」

「やるって何！？」

俺は委員長打倒の決意を胸に立ちあがった。

○

「ヒヤハハハハッ！いいねえイネエ良いねえ云いねえ言いねえ  
井伊ねえ！！俺の大っきらいな日常、平凡！そんな香りがするぜ  
え！」

「そんな言葉使いはやめなさい、アンジエ。女の子でしょう」

「モカ、お前も人のこと言えないくらいおかしいぞ。目はちゃんと  
開けるよ。俺、モカが目を開けたところみたことないぜ」

「私に今、目は必要ないのでしょ」

白いワンピースにブラウン色のロングヘアの2人は少し離れたマ  
ンションの屋上から見ていた。

「ヒヤッハアアアアアアアアアアアアアアアア！これからが本当の

シリアスパートだっ！

第23話SERIOUSNESS(後書き)

タイトルはシリアス。

それにしても暑い！

でわ



「その……私のせいでこんなことに巻き込んだじゃ  
つて……」

なるほどね。

「気にしてないよ。まずお前を守ると決めたのは俺自身だしな。お  
前のせいなんかじゃない」

「でも、いろいろな人が巻き込まれちゃって……真苗も天十も  
……」

「だから気にすんなって。真苗が責めるようなやつに見えるのか？」

「見えないけど……でも……」

「何回も言わせるな。誰も気にしちゃいない。実際俺はまだお前の  
そばにいるんだしな」

「うん」

俺は正しいことをした……とは思わない。だからといって  
この少女をそのままにはできなかった。落ち込んでるモラルなんて  
見たくなかった。こいつは笑顔が一番だと思ったから。そう思った  
から俺は……

「天十……私と一緒に来てくれない？」

「?どこに?」

「天界に」

「!」

「私一人じゃ何もできない。自分勝手かもしれないけど私はまだ死  
にたくないの!」

「いや、十分だ。その死にたくないという言葉が言えればもう十分  
だ」

「え？じゃあ……」

「俺は行く。行ってやるよ。天界に」

「でももつと危険な目にあうかもしれない……。それでもいいの？」

「何回も言わせるな。俺はお前を守るためにそばにいる」

「うん……うん！」

俺は主人公なんかにはなれないし、なる資格もない。でもそんな自分の身勝手な考えで少女が……。泣いていいわけないんだよ。少女が泣かなくて済むなら俺は主人公にだって……

「結界……発動」

「！！！」

「なっ！」

俺のまわりが結界に包まれていく。周りにいた人が消えていく。どついうことだよ……。数秒後俺らのまわりには誰もいなかった。

「モラルこれは結界なのか？」

「私が出したんじゃないけど……。これは結界。しかも人間排除型の空間隔絶結界」

「空間隔絶結界？」

「人間排除は分かるわよね。特定の人間以外を巻き込まないため。空間隔絶っていうのはこの結界にかこまれた部分、その部分を違う空間に移動させることなの」

「すなわち、結界から一步でればもう俺らがいた世界とは別の世界なのか？」

「そうよ。見えてる風景はさっきの海だけでも、結界の外は違う。この空間を切り取ったわけじゃないから天十の世界は無事よ。でもそうじゃない……」

？モラルは何が言いたいんだ？

「着目すべきなのはそこじゃない。こんな高度な結界を出せるのは……」

その瞬間空がまばゆく光った。

「な……なんだ……?」

「ああー……あ！つまんねえ！こんな弱そうな奴にネク口も錬金術師も負けたんかよ」

「汚い言葉を使っちゃいけません」

「俺はどうせそういう女なんだよ」

なんだ……あれは？片方は目をつぶって冷静、片方は好戦的、性格がそれぞれ違うことぐらい分かる。背丈も顔も微妙に違う。でも似すぎていた。その2人が？確かに2人似ている。でも……

「あいつら……モラルに似てねえか……?」

そう。モラルに似ていた。茶色い髪に白いワンピース。今モラルは水着だけれど最初に会った時のモラルに似すぎていた。

「あ……あの人たちは……」

「？モラルやつらを知っているのか？」

すると好戦的そうな方が話しかけてきた。話しかけてきたといつてもやつらは浮かんでるけど。

「知ってるも何も俺らは姉妹みたいなもんだからなあ？モーラ・ルーレト？」

目を閉じてるから閉眼へいがんとでも言っておこうか。閉眼も話してきた。

「そうですね。今さら知らないとは言わせません。モーラ・ルーレト」

俺は気付いた。こいつらモラルのことをモーラ・ルーレトと呼んでいる。モラルはひどくおびえた顔をしているし俺にはそれで十分だった。

「あんたらもモラルを狙ってんだろ」

「まあ、そうだけど。でも目的は錬金術師たちと一緒にしにしてくれ。あんなかつこ悪い理由じゃない」

世界制服が目的じゃないのか……。あいつらの仲間じゃないのか。

「俺は井野宮天十。言霊使いだ」

「おお。もうやる気か」

「お前らは俺らの敵なんだろ？だったら理由になるはずだ。本気で戦う理由にな」

「そうかあ！いいぜえ！だいつ好きだぜえ、そういうの！では俺らも名乗らないとな」

「そうですね。礼儀ですし」

「俺はアンジェ・コーフォネス」

「私はモカ・ラングード」

「天使だ（です）」

「!!!」

天使・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・こいつらも  
・・・・・・・・？

「これから始まるのは虐殺というゲームだあ！」

第24話DESIRE（後書き）

タイトルは思いです。

天使登場！

これからどうなるやら。

でわ



能力には容量がある。たとえば俺の言霊を使って『死』といえれば相手は死ぬ。でもその前に容量オーバーで俺が死んでしまう。あんなでかい龍を出すためにはかなりの容量が必要だ。もちろん俺には龍なんて出すことができない。

「容量？ああ、確かにそんなのがあったな」

「！！お前！普段から意識してるんじゃないのか！？」

「俺たち、天使の容量を人間と一緒にしてもらっては困る」

やはり天使の容量は莫大なものなんだろうな。

「くそっ！『打』！！！！」

「残念、その技、俺にはきかねえぜ」

すると天使のやつは俺の『飛』よりも早い速度で一步横にずれた。ただそれだけのことで俺の技はかわされた。

「耳をふさぐ方が簡単なんだが、天使の能力は五感すべて使うもんでね。耳を使うしかない。でもその技、声が聞こえた所をピンポイントに狙う技だ。声が聞こえた場所にしか適応されない」

こいつ・・・・・・・・なんで俺の能力の弱点を・・・・・・・・・・・・・・・・

「声が聞こえた場所から能力の発動する0.023秒の間に移動すれば問題ないっていう話だよ」

「なんで俺の弱点をお前が知っている？」

「天使だからさ」

その瞬間アンジエは両腕を龍に変え、俺を攻撃してくる。ただの突

進攻撃のはずなのに龍の首が伸びるせいかなかなかうまくかわすことができない。

「攻撃が読みづらい……『飛』!!」

俺は大空にむかって飛んだ。まあ、実際は超高速移動なんだけど。空から龍をみればうまくかわせるかもしれない。ただし俺に羽はないので落ちる前に全てかわしきる!

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおお!!」

俺は『飛』を連発し龍の攻撃をかわす。そして隙についてアンジエにむかって『飛』を使う。アンジエは驚いているのかその場を動く様子がない。

「終わりだ!天使!!!!!!」

俺は拳をつくりやつを殴ろうとした……その時。

「あーあ、やっぱお前もつまんねえわ。アンジエさんがつくり。もうつまらないから……」

「殺してしまおう」

アンジェのまわりに空気が渦巻く。すると氷の杭がたくさん出現した。

「串刺しだ」

しまった！これじゃあやつを殴れない……。俺はいつたん引くことにした。しかし氷の杭は逆に俺に狙いを定めてくる。

「くっそおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！」

逃げ切れないと思った俺は『守』で防ぐことにした。氷の杭が守の言霊に刺さる。そのたびに火花が散る。守の言霊は打、斬と違って盾という形を持っている。しかも巨大な盾だ。しかしそれは相手にどのぐらいの防御力なのかを知らせることになる。その結果……

バリントツ！

最後の氷の杭で俺の守の言霊は破られた。しかし俺は飛をとっさに使いなんとか地面に着地。氷の杭もなんとかかわすことができた。

「はぁ………はぁ………」

言霊の連発により俺の体力は早くも限界だった。始まってすぐ。こんなに早く絶望を味わうことになるなんて思ってもみなかった。

「お前ってさー、なんで言霊でとどめささないの？」

天使の素朴な質問。

「お前に……はあ……言霊は……通用しねえだろうが……はあ……」

「ああ！？ちげえよ。俺に使う意味はないかもしれないけど他のやつにもだよ。錬金術師しかり、死霊使いしかり。あいつらには言霊が効くだろうが。なのにお前は相手を殴って気絶させてる」

確かに俺は錬金術師、死霊使いには思いつきり殴って気絶させて終了してる。言霊がやつらには効いていたのに。どこからでも攻撃できる言霊を遠くから連発すれば勝てた。なのにそうしなかった理由。

「お前には関係ないだろ……」

「俺、知ってんぜ。その言霊で人を気絶させることができないことを」

「……」

「できることは人を殺すことのみ。お前まさか人を殺したくないとかいう理由で……」

「なんでお前がそれを知っている……」

「俺は天使だから」

「それじゃあ理由になってない！」

「なってるさ。お前錬金術師と死霊使いの名前を比べてみるよ」

何を言ってるんだ？

「錬金術・師、死霊・使い。最後の師と使いの違いがある」

「それぐらい分かる！」

「まあ、落ち着いて聞けよ。色縦師というやつとも戦ったな。その他にもこの世界には召喚術師、魔術師、読唇術師などなどいる。だが最後に師のつくやつらは知っているが使いがつくものは知らない」

それが今なんの関係があるというんだ！こんなふざけた会話に……  
まさか。

「お前は言霊・使いだ。この世界には最後に使いがつくやつらなんて存在しない。ちなみに死霊使いは死界を通ってこちらへきた異界の住人。その世界はお前が一度救った世界だよ」

「この世界ってなんだよ。ここは人間が住む人間界だろう。そもそも能力者なんていない」

その言葉に天使は口の端をつりあげる。

「モーラ・ルーレトの話聞いていたんだろう。これは人間排除型空間隔絶結界。景色は人間界のものだが、それはコピーしただけという話。この結界を壊せば錬金術師などがいる世界になる」

「つまり景色は人間界だが場所的にはもう錬金術師などの世界だということか」

「そうだ。その世界の名前はデュ・アークラセル。みんなはアークラセルと呼んでいる」

アークラセル……。

「そしてお前の一度救った世界はランド・デイ・マラーンバハド。通称ランドバハド」

「俺が聞きたいのはなんでアークラセル側のお前が俺らの世界についてかなり詳しく知っているんだということだ！」

「わかってるつての。俺らの能力名を言ってみ？」

「天……使……」

「そうだ。俺らの天使という文字を思い浮かべてみる」

俺は漢字を思い浮かばせる。ていうかランドバハドもそうだったけどアークラセルにも漢字は普及してるのな。そっちに驚いたぜ。

「天使<sup>てんし</sup>。天の使いと書いて天使」

「天の使い……まさか！」

「天の使いと書くなら俺はランドバハドの住人。だが天の使いとかいて……」

「天……使<sup>し</sup>と読む……そういうことか……」

「そう！俺らは天使であり天師でもある！両方の世界に干渉する能力者だ！」

そう、こいつはランドバハドに詳しくかつたんじゃない。ランドバハドの住人でもあったのだ。両方の世界に干渉する能力者……

「モラル！こいつの言ってることは本当なのか!？」

「本当よ……」

「じゃあ、なんで言ってくれなかった！」

「だって天十に思い出させたくなかった。また悲しい顔をするから……」

「……」

そうかこいつを口止めしてたのは俺自身ということか。こいつは俺のことを思ってくれていたんだな。じゃあ、……

「じゃあ、俺の能力についても知ってるのか？」

「うん……」

そうか……



無情にもふりそそぐ天使の言葉。俺は悪魔。そして言霊は拷問のた  
めの能力。人を痛めつけて苦しませて体で遊んで勝る<sup>なぶ</sup>。気絶なんて  
させてくれない。そういう能力。

## 第25話 THE TRUTH (後書き)

また更新に時間がかかってしまいました・・・。

タイトルは真実です。

大分話が動いたかなと思う話でした。

なんかスケールが大きくなってきたのでもう少し小さくしようと思  
力します。

でわ

## 第26話 REPLICIA

この前も話した通り俺は非日常にあこがれていた。そんな時期があったのだ。そこにうまいぐあいに非日常が転がってきたもんだからテンションMAX。そのヒロインに

「どんな能力が欲しい？」

と聞かれた時。アニメやら漫画の世界が大好きだった俺は

「確実に敵を倒せて、最強のやつがいい!!」

と答えた。彼女は

「最強？最強ってどのぐらい？」

そりゃあ分からないだろうな。最強とは何がどうあればいいのか。分からない。

「とにかく一番強いやつ！」

「でも・・・あれは・・・」

「いいから！はやく！」

俺は強さを、非日常を求めた。その結果がどうであれ俺は最強になった。

そして

悪魔になった。

○

「いい顔だなあ！いいよ！絶望！そして思い出さなくないようなものを無理に引き出された感情！それは怒り？憎しみ？恨み？違うだろお！自分への絶望だろおうが！！！！！！！！！！」

「アンジエ、女の子なのですからもっとスマートに決着をつけなさい」

「嫌だね！俺はこういうのが楽しいんだ！」

悪魔。その言葉が俺の頭に響く。何度も何度も。そのせいで天使が何を言ってるのかもわからない。

「天十！すっかりして！」

モラルの声が聞こえる。俺は何をしていたんだろうか。ああ、そうだ天使を倒さなきゃ。悪魔の敵である天使を倒さなければ。

「正確には悪魔じゃあねえよなあ。地獄の使い。悪魔は地獄の使いと呼ばれている。地獄なんかに使われるようじゃ俺らに勝てねえ。天を使う俺ら天使にはな」

「それも間違っている」

「！！！！」

「天十！！！！」

「俺は悪魔じゃない。できそこないの地獄の番人だ。」

俺は能力はもらったが正式な悪魔じゃない。悪魔は生まれたときから悪魔だからな。そこだけは否定しなければならぬ。それは俺の中でのルールだった。

「できそこないだろうが悪魔にかわりはねえ！今すぐ殺す！」  
レプリカ

やつの両腕が龍に変わる。その首がのびて俺のもとへと急ぐ。

「死ね！レプリカ！」

「知ってるか？言霊は思いが強いほど威力も上がるんだ」

俺は誰に語るわけでもなく話す

「打だと殴るといふ思いが強いほど威力が上がる。斬も同様。斬る思いが強いほど威力が上がる」

ただ説明文を読むように

「確かに今までも俺は強く思ってきた。殴るときには殴る！ってな」

推理小説で犯人を追いつめる探偵のように淡々と

「でもそれでも足りない」

答えが分かっている問題を解くように

「実際に行動に移してないんだよ、俺は。斬るなら本当に剣で斬らないといけないんだ」

俺は錬金術で剣を生み出す。

「なっ！？お前、成言飛ばしができるのか！？」

「できますよ。アンジェ、あなたちゃんと観察してなかったでしょう」

「うるせえ！モカ！だがそのちっこい剣じゃ俺の龍は斬れないぜ」

俺は龍の攻撃を『飛』でかわし、横にまわる。そして剣で龍を斬りつけるのと同時に

「『斬』」

言霊を発動した。

「なんで……だよ……」

龍は真つ二つに斬られていた。誰でもない俺の剣で。

「どうして……そんな簡単に……」

思いの強さが威力に繋がる。斬ろうという思いは今までも強かった。でも実際に剣で斬るときの斬ろうという思いは最大限になる。斬ろうと思うんじゃなく、剣で斬ろうとする。その差は違いすぎる。

「言霊の応用、『戯言』ですか……」

「モカア！きいてねえぞ！こんなの！」

「私も驚いています。まさか彼がここまで進化しているとは」

「どうした？天使」

俺は仕返しとばかりに冷たく言い放つ。というか実際さつきからア  
ンジエとかいうやつテンションに腹が立っていた。ふざけんなあ  
の野郎。

「そんなもんか？拍子抜けだぜ。天の使いてんじさんよお」

「天十！なんかしらないけどかつこいいよ！」

ありがとう、モラルよ。後はあいつの顔面を一発殴らないとな。人  
のトラウマを引き出しやがって。

「ふっ……ふふふふふふ」

「？」

「一回のまぐれで………」

あれ？もしかして……

「調子のんじゃねえええええぞおおおおおおお……！！」

キレてらっしやる――――  
！！！！

「生まれろ！氷の杭！！！」

アンジエのまわりに氷でできた杭が現れる。いくつもだ。やべえな  
……。剣で実際斬るのは威力が強いけど複数のやつには追いつけな

いな。俺に限界がある。

「くっそ！全部にまとめて『斬』！！！」

氷の杭全てに斬をあてる。いつきに氷が碎けて消えていく。

「言霊の応用、『多言』<sup>たげん</sup>ですか……」

複数の相手に一気に言霊を発動させる。容量オーバーになるから威力は少ないが。

「まだだまだだあ！！！！！！！」

今度は目の前に火山が現れた。

「げっ！そんなのありかよ！」

火山はその瞬間、爆発した。溶岩やマグマがすごい量おしよせてくる。

「モラル！こっちにこい！」

「うん！！！」

「『守』！」

俺の目の前に巨大な盾が現れる。分厚くいままでにないぐらい頼りがいのある盾だった。

「また『戯言』ですか。守りたいと思う強さが最大になった……。モーラ・ルーレトを守りたいという思いが」

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおお！……」

じゅわぁ

という音がしたり、

ゴンガンゴン

という溶岩がぶつかる音がしたりと忙しかったがなんとかふせぎぎ  
った。

「ありがとう、天十」

「お礼なんかいらねえぜ」

「くっそおおおおおおおおお！……ふざけやがってえ  
えええええ！！！」

「天使、お前に足りないものを教えてやる」

「お前に足りないもの……それは……ありすぎていえねえ  
ぜ！」

「バカにしゃがったなああああああ！！！」

ふう、すつきり。でもあいつのキレかたが半端じゃない。やりすぎ  
た？

「モカ！もう我慢できねえ！やるぞー！」

「いいですよ。もつめんどくさいですし」

何をやるんだ？ハツタリか？いや、まだそんな感じには見えないから一体何が……

「おいお前」

「？なんだ？」

「俺やモカ、モーレ・ルーレト。その3人に何か足りないものはないか？」

「足りないもの？」

なんだ……何を言っている……？

「いや、簡単にすると俺ら、天使に足りないものだ」

「羽とか光の輪とかか？」

そんなメルヘンチックなことじゃないんだろうな……。じゃあ何が足りないんだ！

「そう正解！羽と光の輪だ！」

シリアスをかえせ。

「俺はまだ完全な天使じゃない。そのためには天使化エンジェリングが必要だ。」

「エンジェリング？」

「見せてやるよ。今からな」

俺はモラルを見る。なんにもわかってないみたいだ。どういうことだ？モラルにも羽が生えてない。話が本当なら天使化を使えるはずなのに……。何も分かってない顔をしている。

「エンジェリング  
天使化」

その場が光で包まれる。

第26話REPLICA（後書き）

タイトルはレプリカです。

全然更新できずにすみません。

最近はやらなきやいけないことが多くありなかなか更新できませんでした。

これからは頑張ってペースを戻したいと思います。

でわ

## 第27話 WEAKNESS

エンジェリング  
天使化

完全な天使へと姿を変える儀式のようなもの。

天使の強さはどの世界にも影響を与える。

災害、人の乱れ、人口増加、生物の成長停止など様々である。

そのため天使は力をおさえるようにしている。

それを解くのが天使化。

○

「エンジェリング  
天使化・・・？」

「私もあんなの知らない・・・」

するとモカの口がゆっくりと開いた。嘲笑うように。無感情のよう  
に。罵倒するように。

「モーラ・ルーレットはその部分の記憶を抹消されていますからね」

「!？」

「そんな……なんで……？」

モカは決まり文句のように淡々と話した。

「それほどあなたの天使化した力は厄介だということです。敵に利用されたら大変ですし、記憶を消してあるんでしょう。この説明をしたところであなたは天使化のやり方を思い出すわけではないですよ」

「くっ……」

エンジニアリング……。世界へ影響を与えないように作られた制限リミット。それが今解除される。……。やばいことは十分伝わった。

「でもお前ら天使が世界に気をつかう必要があるのか？お前らどうせ世界なんてどうでもいいと思ってるだろう」

自分で言っておかしいなと思うようなことだが天使ならそれぐらいやりそうだ。

「我が主、『神せかい』が作ったものですよ。それをなぜそのしもべである私たちが壊さなければならぬのですか？」

うーん。確かにその通りだな。あれ？こいつ神のことなんて呼んだ？

「この世界が作り直されるまで大事に保管しなければ……」

「ん？何か言ったか？」

「いえ、なんでも」





「こつちだよ……！」  
「！……！」

やつは俺の後ろに回り込んでいた。俺はまったく気付かなかった。後ろに回られたこともそうだが回り込まれたあと、後ろにいたことにも気付かなかったのだ。

「ちい！錬金術！生成『ソードリアル剣』！」

「ほう、成言飛ばしではない剣か……なかなかなものだな」

俺はとつさに剣を振った。しかしそれは天使にあたることなく空を斬っただけだった。

「剣を扱いなれてないみたいだな。そんなんじゃ生き残れねえぜ！」  
またさらに後ろに回り込まれていた。そしてアンジエの手は剣に変化。俺の成言つきの剣よりはるかに豪華ではるかに大きく、はるかに堅く、はるかに鋭利だった。

「死ねっていつてんだろうが」  
「くっ！」

アンジエが剣を振る。それは俺に当たらなかった。とつさに守でガードしたのだ。盾と剣。大きさ的にも厚さ的にも盾が有利……  
……だった。

「きこえなかったのか？」  
「なっ！？剣が盾を斬り裂こうとしている……？」

剣が徐々に、バターに刃を入れるように斬られていく。俺はとりあえず飛で飛ぶことにした。

「飛んでも無駄だあ！！」

アンジエは俺の飛を上回るスピードで移動する。俺の移動する予定だった場所に先に行かれた。このままだと自らアンジエに飛びこむことになる。

「『路線変更』！」

「飛の戯言ですか……。もう使いこなしているようですね」

俺はぎりぎり路線変更し、地面に降り立った。

「はあ……。はあ……。はあ……。はあ……」

「どうしたあ！もう疲れたんですか！？はっは！なっさけねえな！」

「うる……。せえ……」

体力の限界。戯言、多言は体に負担を負わせる。それは普通の言葉の何倍もの力。本来戯言も多言も気持ちで威力が変わるが、だからといって体力の減りが変わらないわけではないのだ。

「それよりいいのか？」

「ああ！？何がだよ」

「俺の直線上にいるぜ、お前」

「だからなんだ。いまさらお前の言霊はあたらないし、戯言も多言もその場からは出せないだろ」

そう、戯言も多言も相手を斬ろうと思う気持ちが高くないと使えない。だからそのために実際に斬る必要があるのだ。

「まさか、俺が人間っぽいという理由で手加減してるんじゃないよなあ!？」

それは違う。俺にはもう殺さないように手加減することはできない。でも殺さないようにする気持ちもどこかにある。だがとりあえず相手を弱らせてからじゃないと……。

「まあいいや、ほら俺はここから動かねえから攻撃してみるよ!できるんならな」

俺は剣を構える。確かにこの位置からは飛でも使わない限り届かないだろう。飛は相手に攻略されてるし。だったら答えは一つ。

「戯言……『斬破・うねり雲』!!!!!!」

遠距離攻撃しかないだろう。

うねり雲は衝撃波を飛ばす技。うねるようにながら進むためそのような名前になった。というか昔の世界のやつに勝手に付けられたんだが……。

「なっ!遠距離攻撃だと!？」

アンジエは驚く。とっさに構えようとするがしかし生身対衝撃波。衝撃波が有利すぎるぐらいだ。

ガリガリガリガリ

腕を刻む嫌な音が聞こえる。



!!

氷の杭は全て氷のかけらへと変わっていった。

「な……なんでも……」

千鳥足は酔っ払いのおぼつかない足取りのようになどどこへいくかわからない斬撃を大量に繰り出す技。これは衝撃波ではなく実際に全て斬っていると考えた方が正しい。

「ざつと本気をだせばこんなもんだな」

これは強がりだった。体力がなくなりすぎて息をするのも難しい。苦しいし、体中が痛い。立っているのがやっとだった。

「まだまだ……まだやる！」

「くそっ！降参してくれなかったか……」

もう降参するかと思ったがやはり無理だった。

「戯言！『斬破・うねり雲』！」

「それと同じ威力の衝撃波をぶつければいいんだろっ」

すると天使は手を剣に変え、攻撃してきた。衝撃波を飛ばしやがったのだ。

「お前もできるのかよ！」

バシユウウウウウウー！

普通に相殺。正面向かい合つての攻撃は俺に不利だ。もうあといくつ戯言を使えるか分からない。

「簡単じゃねえか！この腕の傷！こいつをつけた分、お前にもくらわせてやるよ！」

ピンチをチャンスに。そんなことできるやつらが主人公なのだ。俺は残念ながら主人公じゃない。だから……ピンチはピンチのまま。

「お前に見えるか？この斬撃」

シユババババババババババ！

「ぐふっ！がはぁ！！！！！」

天使は俺の目の前に移動しすさまじい斬撃を繰り出した。超人でもない俺は大人しくそれをくらうことしかできなかった……。

「天十おおおおおおおおおおおおお！！！」

モラルの声が聞こえる。すまないな。俺はまだ弱かった。

第27話WEAKNESS(後書き)

タイトルは弱さ。

どうもこんにちわ。花澤文化です。

もう夏ですね(^^)(^^)

大分生きるのが辛いです(笑)

でわ

## 第28話 CORNERED SHEEP

俺はまだ弱かった。強いと思っていた？いや、違う。強さなんて考えてもいなかった。相手が強かろうが弱かろうが、俺の日常を壊す奴は片っ端から殴っていった。その強さを今回考えることになった。考えざるをえなかった。

「天十おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
お！！」

モラルが駆け寄ってくる。俺は不思議と意識を保っていた。自分でも驚きだ。剣で斬られたが深いダメージにはなっていないらしい。体力の消耗が合わさって起きることができないし、しゃべることもできないが……。

「あつけないな。今まで散々苦労したが……剣で斬っただけでダウンとは……。本当にあつけない。まだ死んでないみたいだが後は簡単な作業だけだ」

「天十は殺させない！」

「お前に何ができる。次元移動なんて使えないだろう。天使化なんてできないだろうし。次元移動は使えて1回だろう。しかも飛ばせるのは1人のみ」

「くっ……」

モラル……何をしている？はやく逃げろ。こいつらはお前を狙ってるんだぞ。急いで逃げろ。

「そいつを飛ばしたらお前は逃げれなくなる。お前が飛んだらそいつは逃げれなくなる。どうするんだ？」

「それなら私はこいつを飛ばす！」

「待て！」

「！！！」

「モラル、お前が逃げる」

「天十！」

俺は最後の力とっていい力で立った。いや、足で体を支えてるだけだが。

「なあんだあ！まだ立てたのかあ！！！」

「お前の斬撃なんてきかねえなあ！」

くそっ！前が見えねえ。極度の疲れで立っているのがやっとだ。ちくしょう！立ったところでもなんにもできやしねえ……。

「生意気いってんじゃねえぞ・・・ガキが」

「お前の方がガキに見えるけどな」

「なめてんじゃねえぞ」

「お前の方がなめてるように思うけどな」

アンジエは高速で移動した。こんどは後ろにまわるかもしれない前から蹴るうとしてきた。

「くうっ！」

バキッ！

腹を思いっきり蹴られる。

「うほあ……………」

すごい勢いでふきとばされる。俺は口から血を吐きながら止まる。

「がはっ……………うほほがぁ……………」

「なんだぁ、簡単にやられやがって。つまらねえ」

意識が朦朧とする。何が起きたのか一瞬理解できなくなった。

「おま…え……………の能力は……………作り出す能力……………だろ？」

「ほう、いい目をしてるじゃねえか」

こいつの能力を考えてもいた。こいつは氷、火山、炎、さらに腕を剣にかえたりもした。それでの共通点なんてひとつしかないじゃないか。

「どれもお前が作り出したもの……………だろ……………？」

「確かにその通りだな。俺は創造の天使」

やはりな……………俺の予測は当たっていたわけだ。

「だがそれがどうした？それが分かるとお前は俺に勝てるのか？」

「くっ……………勝てはしないだろうな……………。だが……………」

俺は剣を生み出す。最後の言霊を使うために……………。

「戯言……『斬破・御子柴飾』！」

御子柴飾は風を起こして攻撃する技。それでここは浜辺。砂をふきとばし、相手から目を奪う。

「とりあえず時間をかせげる。急いで逃げろ、モラル」

「何言ってるの！天十をおいていけないよ！」

「俺はいい！狙われてるのはお前なんだぞ！」

「でも……」

「おいおい！何いってんだあ、てめえら！誰もにがさねえぜ！」

「！？もう気づいて！はやくしろ、モラル！」

せつかくかせいだ時間も無駄になっちまった。

「いや！」

「もうこれ以上時間はやらねえぞあ！」

「ちい！」

モラルに衝撃波を放ってきた。俺はモラルにむかって飛び込みなんとかが当たることはなかった。

「天十……今の私にはね、あなたが必要なの」

「は？何言ってるやがる。それどころじゃねえだろうが」

「いえ、必要よ。私はあんたを守らなきゃいけないの。あなたのない世界なんか意味はないんだから」

「それってどういう意味だ？」



でいた。

「くらえ！」

「うわ！」

俺は砂をつかんで投げていた。ここは海辺。砂なら大量にある。

「そして五感のうちの一つである視覚を失ったお前は能力を使えない」

「ちつくしょおおおおおお！畏にはめやがったなああああああ  
あ！」

はまったのはお前だろ。こいつは最初に五感を一つでも使ったら能力は使えないと言っていた。それを利用したのだ。目に砂が入ればしばらく使えないだろう。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおお！！！」

俺は拳をつくる。そしてそれで俺はアンジェを殴ろうと……

「あれ？」

殴ろうとしたところで気付いた。俺の腕の肘から先がない。とられ  
たわけでもなく、斬られたわけでもない。そもそも存在がないのだ。

「なんだ……これは……これは……」

「手を出させてもらいました」

「あんたは……………」

アンジエともう一人いた天使。名前はたしかモカ。

「その肘は時間がたてば戻ります。しかしその時間すら与えられないかもしれません」

「どうということだ……………」

「私が殺してしまうかもしれませんが」

ドツドツドツ

心拍数が上がる。こいつは相手にしちゃだめだと体が語る。どうする。こいつは一目見てわかるほど強い。アンジエよりはるかに……………。

「モカあああああああ！手をだすんじゃない！こいつは俺の相手だ！」

「でも、あなた今負けそうになってたでしょう」

「負けねえ！負けねえよ！」

「でももう手をだしてしまいました」

「ちっ！」

くそ……………もうアンジエの視覚も回復してやがる……………。

「モラル、逃げる。もうお前を守れそうにない」

「嫌だ。私は……………あなたを逃がす。次元移動」

テレポート

○

「あ？」

気づいたらあの海にいた。

「おい！井野宮、はやくこいよー」

志野野辺が俺に手を振っている。間違いない、元の世界に戻ってる。

「志野野辺、モラル知らないか？」

「何言ってるんだよ。モラルはもう帰っただろ」

帰った？

「具合悪くして帰っただろうが。大丈夫か？」

「あ、ああ……」

なんだあいつも帰ってたのか。次元移動2人にできるんじゃないか。

「俺は少し休ませてもらうよ」

「ああ、そうか？じゃあ、あっそんでやるー！！！！」

元気ありすぎだろ。

「本当にこれでいいんだろうか……」

○

「あいつに次元移動を使うとはな。いい度胸だ」  
「そう？ありがとう」

モラルはまだ逃げていなかった。記憶操作で人間たちの記憶を書き変えた。明日には私の存在など忘れているだろう。

「じゃあ、大人しくついてくるんだな？」

「嫌だ」

「は？」

「私についていけない。ついていけないならここで死ぬ」

「はあ、まったく我がままお嬢様だな・・・」

やっぱりこいつらに私は殺せない。なら存分に利用させてもらう。

「なら・・・」

「なら？」

「手と足をもいで、苦痛を与え、逆らえないようにするしかねえな」

「!?!」

そ・・・んな・・・。

「覚悟しろ。殺しはしない。だが死ぬより怖い苦痛をみることになる」

「いや、いやあああー！」

てんと・・・・・・・・天十！助けてよ・・・・・・・・  
私が逃がしたのにそう思ってしまう。。。

「手と足に別れは言ったか？モカ、やっていいよな」

「構いませんよ。生きて連れてくるように言われただけですから」

「残念だなあ・・・・・・・・あいつを逃がすからだよ。俺が殺す予定だったのに・・・・・・・・」

「天十は殺させない！」

「強がりはやせ、じゃあたつぷりと叫び声を聞かせてくれ」

「くっ・・・・・・・・」

天十・・・・・・・・助けてっ！

「まったくスマートじゃないなあ・・・・・・・・」

「誰だ!？」

「あなたは……!？」

その少年は金髪で不気味な雰囲気を持った……  
……  
……  
……  
……  
……  
……  
……  
……

第28話CORNED SHEEP(後書き)

タイトルは追いつめられた羊。

こんにちわ、花澤です。

夜はやっぱり寒いですね…………。

風邪ひいちゃいそうです…………。

でわ。

第4章〈終〉 第29話TABLE

「女の子相手に何やってんの？」

その少年は語る。

「君たち天使でしょ？」

静かに怒りを燃やして。

「その子に危害をくわえたら……………」

炎のようにきらめく金髪で。

「天使だろうが殺す」

少年は霊を使う。

「あんた……ネクロマンサー死霊使い……。どうしてここに……？」  
「勘違いするなよ。僕はお前を助けるために来たんじゃない。僕達の計画にも君が必要だからね」

死霊使いは笑う。不敵に？いや、違う。子供が浮かべるような無邪気な笑み。

「死霊使いごときが天使に敵うと思ってるのか？」

「勝てるとは思ってないけど、生きることにはできるね」

「自信があるんだな」

「自信じゃないよ。1 + 1 = 2と同じように簡単な答えさ」

「ちびっこが生意気言うじゃねえか」

「ちびっこじゃないよ。どちらかという君の方がガキに見えるね」

プチッ！沸点の低い天使アンジェがキレた。

「てめええええ！よくもバカにしゃがったな！」

「まったく、扱いやすいやつだ」

「ネクロマンサー死霊使い？どうするつもり？」

モラルは不安を感じていた。まだ死霊使いを信じたわけじゃなかったし、それに天使2人から逃げられるとは到底思えない。そんな不安があったのだ。

「どうするってここから逃げるに決まっている。僕らの計画にも必要な君が天使にとられるわけにはいかない」

「でも相手は天使よ！あなたは死霊使いのなかで一番強いわけでも

ないし……」

モラルはちょっと気をつかっていた。たとえ敵だったとしても一番強いわけでもないし……なんて言葉は頼りにならないと言っているのと同じ。失礼にもほどがある。でも言わなきゃいけないかった。言わないと……強さを確認しないとイケなかった。それぐらい天使とは強いのであった。

「僕は死霊使いの中では一番強いよ」

「……は！？何を言ってるの？」

最初見えを張ってるのかと思った。ふざけているのかとも思った。でもそうじゃなかった。それは死霊使い、トーテムの目を見ればわかった。

「僕が手伝っている組織はアークラセル側のやつなんだ」

「アークラセル……」

天十が救った世界とは違う、錬金術師や色縦師など名前の最後に師がつく職業シヨブがいる世界。それがアークラセル。

「でも僕は死霊使い……最後に師じゃなくて使いがついているだろう。これはあの言霊使いと同じ、ランドバハド側の人間だっことを表してる」

ランドバハド。天十が能力をもらった世界であり、救った世界でもある。職業シヨブの名前の最後には使いがつく。

「錬金術師もね、ランドバハド側にもいるんだよ」

「?・・・それはアークラセルから来たんじゃないか?」

「いや、違う。正確には錬金術師みたいなものだ。アークラセル側で錬金術師と呼ばれていてもランドバハド側では錬金術師とは違う名前と呼ばれている」

「あたりまえじゃない。だってアークラセルは最後に師がつくけど、ランドバハドでは使いがつく。なら名前も変わるでしょう」

何を当たり前なことを言っているんだと思った。しかし・・・

「変わるのは名前だけじゃない。能力も微妙に変わるんだ。錬金術師は元となるものから物を生み出す。でもランドバハドの錬金術師は液体からしか物を作り出せない」

「世界ごとに進んでる技術が違ってる事?」

「そういうこと」

「でもそれじゃあ・・・」

それじゃあ、ランドバハド側はアークラセル側に劣っているということ。液体からしか物を作り出せないなんて不便すぎる。しかもさらにそこから水、雨水、石油、とかつて制限される。技術が進んでないのだ。

「確かに錬金術師の能力に関しては劣っているさ。でもそれだったら他の職業シヨブで勝っていることもあるんだよ」

「!!!・・・それが死霊使い・・・」

「そうさ」

アークラセル側では死霊使いのことを霊媒師と呼ぶらしい。そして組織もアークラセル側にあつたため下っ端の方で働いていたという

ことだ。でも……

「でも、実際は霊媒師の頂点より何十倍も僕のほうが強い」  
それが結論。

「でも俺たちは天使だぜえ！」

ここぞとばかりにアンジェが割り込んだ。ガキ呼ばわりされた怒りはまだ消えてないらしい。

「天使はどちらにも干渉していてどちらの職業シヨブにも勝る！」

「だから勝つなんて言っていないだろ」

「……！」

「生きると言ったんだ。勝てるなんて思ってない」

モラルには伝わってきた。本当は勝ちたいと思っているんだ。しかしそれはかなわない。彼が死霊使いであるかぎり絶対に……

「だらだらと長い話で飽きちまった。もう我慢の限界！！死ねよ」

天使のまわりに氷の杭が現れる。無数の数が数えきれないぐらいの杭。井野宮天十を苦しめてきた技のうちの一つ。

「呪力解禁。解き放たれる魂たちよ。我に力を与えたまえ……」

死霊使いはすごいスピードで言葉を紡いでいく。

「顕現せよ！暴力霊『雷神雲らいじんうん』！！！！」



応できていなかった！なのはどうして！！！！」

「アンジエ。よく見てください。その霊……………」

「腕が4本ありますよ」

「なっ！？ただの人間の霊じゃねえのかよ……………」

「その通りだ。暴力霊の上位霊と呼ばれるめずらしい霊のほとんどは悪魔の霊なんだ」

「悪魔の霊？」

思わずモラルがきいてしまった。しかし気になることでもあったのだ。悪魔が誰かの使いにさせられるなど考えにくい。

「だからこの顔のお札。これはダンドバハドの死霊使いなら全員持つてる強力な呪力抑え込みのお札だ」

「それで無理やり命令をきかせてるってことか？」

「人聞きが悪い。悪魔は死んだら永遠に檻に閉じ込められるんだ。危険だからな。しかしそうやって誰かの使いになることで檻に閉じ込められる期間を短くできるんだ。だから悪魔も喜んでやってくれるね」

悪魔は死んだら檻に閉じ込められる……………。天十はどうなるんだろう……………。思わずそう思ってしまう。しかし今はそんな分からないことに頭を使っている場合じゃない。

「これなら天使にも勝てるかもしれない……。ね！トーテム！」  
「昔のように呼び捨てで呼ぶな。いや……。勝てることはないだろうな……。」

モラルは昔、アーケラセル側にしばらく捕まっていたことがあり、そのころまだ小さかったトーテムと遊んだことがあるのだ。何回も……。

「つてええ！？勝てないの？」

「ちい！何を創造しても消される！もつとどでかいものを生み出さねえと……。」

でかい声にかき消されたモラルのツツ「……寂しい。

「アンジェ……下がってください」

「うるせえ！これは俺の……。」

「いいから……お願いします」

モラルとトーテムはモカとかいうやつに気迫に圧されていた……。

「わかったよ……。」

アンジェを簡単に引き下がらせるその気迫に……。

「やべえな……。死界！開け！！！」

目の前に見たことのある死界が開く。

「まだ死界消してなかったの！？」

「消すには時間がかかってな。あと1カ月は必要なんだ」

「というかどうしていきなり逃げるのよ！あの暴力霊なら……」

「簡単に負けるよ。あのモカってやつさ……一瞬やばいぐ  
らいの殺気をだした」

トーマの手は震えていた。そこまでの殺気……。

「いくぞ、モラル・ルーレット！」

「え！？ちよっ！」

トーマは強引にモラルの手を引っ張り死界の中を走る。

「このまままっすぐ走れば人間の世界、地球に戻れる。死界よ！閉  
じれ！」

さっき入ってきた死界の入り口を閉じる。

「あの暴力霊は！？」

「消されたな。文字どおりに……」

「！……」

あの強さを誇る……アンジエを圧してた暴力霊を一瞬で……

「いそぐぞ！死界の場所を特定される前に逃げる！！」

「でも……どうして私をあなたの組織に連れて行かないの？」

「……目を覚まさせてくれた礼  
だ。僕は霊を道具として使うことの愚かさを学んだ……から  
な」





「アツアツだな・・・」

「天十もすみにおけないぜー!」

「むうー! 私もまだ抱き締めてもらってないのに・・・」

「み・・・んな?」

「お前まだ夕飯くってなかっただろ」

「うむ、夕飯は食べないとな。私はなぜモラルが一人で帰ったのだと思っただろう・・・」

「ああ・・・それはだから私が記憶を・・・って一般人にいつでも意味ないか」

「よし、準備できたぞー!」

志野野辺が言う。そこには大きなテーブルにたくさんの料理があった。

「どれもおいしそう・・・てみんなも食べてないの?」

「ああ、なんか知らないがモラルが具合を悪くしたと思っただ。俺らでつくったんだ」

「井野宮君は何もしてないでしょー」

「皿とか配置しただろ!」

「それは作っただんじやないよな」

「ていうか私は腹が減ったぞ! 早くくわせろ。深夜アニメに間に合わなくなる」

「お前はいつつもそれ優先か!?!」

「まーまー、いいじゃねえか。井野宮。ではみんなで・・・」

『いただきまーす』

そこには暖かい日常があった。さっきまでの戦闘が嘘のように。疲れが全てふっとぶぐらいに心地いい日常が……。

第4章〈終〉 第29話TABLE（後書き）

お久しぶりです、花澤文化です。

タイトルは食卓という意味です。普通のテーブルなんですが（笑）

なんとか4章終了。

いつもより少し長めになってしまいました。

番外編的なものも書きたいなと思っています。

でわ

## ブローグ5〜INCAPACITY〜

『シルバーウルフ』。

昔、井野宮天十などが住んでいるところ、北海道札幌市で名を広げていた不良集団。白い学ランにリーダーは頭に白いハチマキ。人数がかなり多く、一人ひとりの戦闘よりも集団戦闘が得意なチーム。その攻撃は荒れ狂う狼のように激しい。

『暗き蝙蝠』

同じく北海道札幌市で名を広げていた不良集団。ほぼ全員が黒い服装をしているが服の種類までは決まっていない。リーダーは袖がダボダボな服を着ているらしい。一人での戦闘が得意で人数は多くない。武器の扱いを得意としており、様々な武器を使う。

昔、この2チームは喧嘩をはじめた。それは喧嘩というには大きすぎて、戦争といえば小さすぎるようなもの。2チームの力は均衡していないなかなか決着もつかなかった。

物は破壊され、人は傷つき、天気も荒れたという恐るべき事件。

『銀色の闇』

2チームの名前からとったその名前。事件の総称である。

○

「あああああああああああああああああああああああ  
あ！！！！！」

俺、井野宮天十は部屋で叫んでいた。おおっと、気が狂ったんじゃないし、頭がおかしくなったわけでもない。そこらへんは理解してほしい。

「ど、どうしたのよ！！！」

ガチャ！っと乱暴にドアが開けられ、モラルが入ってきた。鍵をかけるの忘れてたなあと思うのと同時にモラルに説明をはじめた。

「いやあ……なんかさ………言霊使えなくなっちゃった……」

「……………はあ  
!?!」

そう、言霊が使えなくなってしまったのだ。なぜそれに気づいたか。戦ってもいないのに言霊をなぜ自分の部屋で使おうとしたか……。普通に物をとりにいくのが面倒だったので飛で移動しようと思いました。ほんとすんません……。

「心当たりはないの？」

「心当たり……ねえ……」

強いて言うなら……っていつかやっぱりアレのせいだよね……。

「この前の天使との戦いときさ……限界まで言霊使ったから  
だと思っ」

「ああ……あの時の御子柴飾おししかざりとかいうやつね」

そう、あのときの俺は限界だった。なのに戯言を使つと……まあ……  
……こんな感じになるんだろうな。

「やべえな……ここで敵に襲われたら、俺はお前を守れない……  
」

「何言ってるの？体を盾として使えばいいでしょ？」

鬼！この鬼！ちくしょう……ほんとになんもできないや……。

「治しかたは知ってるの？」

「うーん……まったく知らない」

「そう……なら気長に待ちましょっ」

「いいのかよ。敵がおそつてきたりしたら……」

「大丈夫。天界のやつらはもう一回作戦を立て直すと思うし、ランドバードでは天使と戦って生きた。という噂が広がっていると思うわ。だからどの組織もしばらく手をださないと思う」

「そうか……」

だがやはり不安であった。いつおそわれるかわからないときに鎧をなくしたと同じことだ。確実に殺されるに決まっている。

「でもあんたこの前から思ってたけどパンチ一発で相手を気絶させられるなんて十分すごいわよ」

「腕つぶしだけは自慢なんだ。昔、俺金髪だったから色々なやつにからまれたおかげだよ」

「あんた……意外とすごい人生送ってるわよね……」

「お前が来てる時点ですごい人生だと思うよ」

俺は日常が大好きだ。能力がなくなったのだから喜ぶべきだろうけど……。なにかさみしい。あれは俺にルナがくれたものだから……かな？

「あんた学校はいいの？」

「うお！やべえ！今日から夏休みの講習があるんだ！ってお前もだろ！」

「私は準備できてるわよ。天十を呼びに行こうと思ってここに来たんだから！」

そうだったのか……。と思いつつ俺は準備をする。筆箱……教科書に……。あれ？

「予習すんの忘れてたー！！！！！！」



プロローグ5〜INCAPACITY〜（後書き）

タイトルは無能です。

夏まつさかり！暑いところは大分暑いですよね。  
というわけでプロローグ。

もうプロローグが5つ目なんですね。  
読んでくれている皆さん、本当にありがとうございます！

でわ

## 第5章 第30話 COURSE

「ちっ！ちっ！」

「舌打ちはやめなさいと言ってるでしょう、アンジエ」  
「うっせ！」

「そんなにモーラ・ルーレトを逃がしたことが悔しいんですか？」

「それもあるけどよ！あいつを殺し損ねた！」

「井野宮……天十……てんと……ですか」

ここは天界。宮殿のような場所にアンジエとモ力はいた。

「そっだよ！あの野郎！次会ったら殺してやる！」

「野蛮な言葉を使うのはやめなさい」

モ力は考えていた。次に会うときはいつになるのかと。そしてそれは遠いことではないことも分かっていた。神は動き出す。世界を作りなおすために。

「あら〜ん、アンジエちゃん。ご機嫌ななめね〜」

「げっ！ラーエイ！お前いつからそこに！？」

ラーエイと呼ばれた女性。何を食べたならそんなに大きくなるのかという胸。理想のお姉さんという感じの天使だった。そして何よりエロい。アンジエのことは妹のように可愛がっている。

「いつだっていいじゃない〜。それよりもどうしたの〜？」

「別に」

「獲物をしとめそこなっただです」

「おい！言っなよー！」

「あら〜ん、かわいそうに。それでその傷は？」

「そいつとの戦闘でおった傷だよ！ったく」

「お姉さんがなおしてあげようか？」

「うるせえ、構うな。お前はお前の仕事があるんだろ。こんなところで時間をくうな」

「冷たいわね〜」

ラーエイはシスコンというかアンジエに過保護だった。そのためアンジエのためなら大切な事後とだって放棄するようなやつなのだ。それが嫌でアンジエは冷たくしている。

「まあ、確かにそうなのよね〜。私、大事な仕事があるのよ〜」

「だろう。ちなみにどんな仕事だ？井野宮天十を殺す仕事だったらたとえお前からでもその仕事を奪うぞ」

「こわ〜い。でも安心して。私が任されているのはその井野宮天十とかいうやつの友達よ」

アンジエはわからなかった。なぜ井野宮天十の友達に関する仕事があるのか。

「なんで友達なんだ？あいつらは普通の人間だぞ。人間に干渉するのは禁止されているはずじゃ・・・」

「今回は監視だけよ。それといざとなったらその干渉も許されるのよ」

「特別なケースの場合ですね」

モカが口をはさむ。モカは真面目で一字一句天使の世界干渉法律という法律の内容を暗記している。天使なら全部とはいかないまでも大事なものはおぼえていなきゃいけないのだがアンジエはまったくおぼえていなかったらしい。

「ふうん。まあ、井野宮天十には手を出すなよ。あれは私が殺すから」

「はいはい、分かっていますって、じゃあ、もう地球に行ってくるわね。じゃあね」

○

「はー……。初日から怒られるとかもうやる気なくすよ……」

「ここは地球の日本。場所は学校。」

「予習忘れるなんてバカじゃない」

「うるせえな。海とかいう場合じゃなかったな……」

今日から始まった講習の予習を忘れて先生に怒られた授業が終わり、次の授業までの休み時間。自由席だったのでまわりには真苗、志野野辺、木野白、モラルがいる。

「災難だったな、井野宮。まあ、俺は予習やってたけどさ」

「そうだよ！落ち込まないでねー、私も予習やってたけど」

「気にするなよ。海が楽しかったのは私も同じだからな。予習をやってきたところは違うけど」



俺は罰として宿題のプリントを出されていた。予習もあり、復習もある。あそんでいる時間なんてまったくくない。

「じゃあ、俺のうちっていつのはどうだ？」

「志野野辺の家？確かに最近行ってないな」

「ちょっとまって!!!!」

「?どうした真苗？」

「その私も今日・・・井野宮君と遊びたい・・・」

「そうか、なら志野野辺の家行くからお前もどうだ？志野野辺もい  
いよな・・・」

「いや、そういうことなら俺は遠慮しよう」

「は？お前から誘ったんだろが！」

「いや、用事を思い出してな・・・」

「また!？お前いつつもそれだな！」

といつつつ、今日は志野野辺、別に何かを忘れてたわけじゃなさそう  
うんだけどな。何かに気をつかったような感じがしたんだが気の  
せいかな？すると志野野辺は真苗の方へより・・・

「頑張れよ」

と言って去っていった。なんだあのいい脇役みたいなセリフ。なん  
かイラッとしたわ。

「ま、そういうわけだ。どこに行く？」

「え・・・えつと・・・その・・・私の家はどうかかな？」

「真苗の家？」



「真苗の家……」

「ちっ！……まさか真苗がそんな積極的だとは……」

「ん？なんか言ったか？」

「何でもないわ！せいぜい楽しんでなさい！」

「え！？モラル！？何その悪役がいうようなセリフ！なんかごめんなさい！！」

俺は何を謝ってるんだろうな……。

○

「あら〜ん。ここが地球ね」

ラーエイは地球にいた。もちろん監視のために。

「じゃあ、監視を開始しましょうか。あ、あともう一つあったわね」

ラーエイは適当に人を見つけると……

「愛というものは……時に残酷なのよ」

人にむかって投げキッス。比喻ではなく本当にハートが飛んでいく。そしてそれが人に当たる。

「ああ！？なんだ今の？なんか当たったような気がするんだがな。まあいいか」

「ふふふ。いよ、芽吹あきなさい」

天使ラーエイは笑う。

## 第5章 第30話 COURSE (後書き)

タイトルは講習。

さて土日と更新できませんでしたが、今日はできました！  
結局5章でした・・・。

でわ

### 第31話 STUDY PARTY

「ひとつ気になることがあるんだがいいか？」

「ん？なんだよ？」

講習が終わり、その下校途中。偶然、委員長こと木野白泉きのしろいすみと友永さんともながにあった。これから真苗未央まなえみおの家に行かなければいけないのだ。なので急がなきゃいけないのだが……。

「私と友永さんはキャラがかぶってないか？」

「は？」

何を言ってるのだろう。この委員長は。正直言って今は急いでいるのでそんなたわいもない会話に付き合ってる暇はないのだが。

「かぶってないだろ。木野白は黒髪ストレート、友永さんはちょっと髪の毛にくせがあるし、メガネをかけてる。それに顔だって全然違うじゃないか」

「それじゃあ、読者に伝わらないだろ！！」

「どこの次元の話だよ！読者ってなんだよ！！」

この委員長はとうとう残念なことになってしまったらしい。というかそんなバカ話はいいから俺を早く帰らせてくれ。

「くっ……これじゃあ区別がつかなくなるかもしれん」

「いやいや、つくって」

やべえな……約束の時間まであと1時間。着替えて、用意して……あといでに汗をかいたからシャワーも……間に合うか？

「ちよつといいか？」

すると今まで黙っていた友永さんが挙手をした。なので「はい、友永さん」と先生風に木野白があてる。

「キャラがかぶっているならどちらかがキャラを変えればいいんじゃないか？」

「え？」

いやいやいや、何を言っているんだろうこのアニオタは。これは別にアニオタをバカにしたんじゃないやなくて友永さんをバカにしたただ俺だつてたまにアニメ見るしな。

「いや、キャラを変えるなど不可能に近いぞ。友永さん。無理をしなくてもいい。別にただ暇つぶしのように私が言ったただだから」

「それが簡単になる方法があるんだよ」

「どうやって？」

聞く前なのに寒気が止まらない。嫌な予感がする……。

「私が本気をだせばいいのだ」

「本気……」

「をだす？……」

「その通りだ。私が当初毒舌キャラだというのは覚えていないのか？」

ああ、確かに。でも最近は毒をはかなくなったし、アニメの話をしてる時は基本嬉しそうなのでまったく忘れていたことだった。

「あれはまだ本気じゃない。私だってほぼ初対面の相手に毒をはくなどしないのだよ」

「いや、結構はいてましたけど……」

「そこで！」

あ、無視した。

「私は今日これから毒舌を本気です。みんなにも慣れてきたし、今なら大丈夫だ」

「確かに。それなら私とも区別がつきそうだ」

「じゃあ、これで解決ってことで」

どうやらひと段落ついたみたいなので俺は急いで帰ろうと走り出した時……

「じゃあ、友永さん。井野宮君を罵倒してみてください」

「なんで!?!」

どうして罵倒されるの!?!帰ろうとしたから!?!意味がわからない!

「お安い御用だ」

のっちゃったよ……ま、これで済むんなら別にいつか。

「俺は急いでるんださっさとしてくれ」

傍から見たら俺は急いで罵倒してくれと言ってるのに等しいんだな。恥ずかしいし、はやくここから去りたい。そのためにも罵倒してもらわねば。

「おい、急いでくれっていつて……」  
「うるさい、豚が」

……  
……

○

「はっ！」

気づいたらそこは真苗の家の前だった。あれ？……なんで俺……  
……？というか今より前のことが思い出せない……。

「あれ？服も着替えてある……」

俺はまだ下校途中だったはずんだけどな……  
……。

「あああああああああああああああああああああああ  
あ……！」

思い出した！友永さんからすっげえ言葉浴びせられたんだ！それで  
その衝撃でなんか無意識に動いてこころまできたんだ……。

「よく事故とかに会わなかったな……」

自分でも驚きだった。しかもシャワーまで浴びてある。勉強道具もあるし。本能でやってのけたのか・・・俺、すげえな・・・。

「うお！やべ！約束の時間20分オーバーしてる！」

そのことに気付いた俺は慌ててインターホンをならす。

「はい、って井野宮君！どうぞー上がってー」

「お、おう・・・」

やべえ、やべえやべえやべえやべえやべえ！！！！緊張してきた！落ちつけ、俺は勉強しに来たんだ。なにもやらしいことなんてない。

「おじゃまします」

「いらっしやーい」

俺の言葉に真苗は答えてくれた。1、2回来たことはあるけど中学のころの話だしな。今は高校生。異性のことに悩める年頃。もう、何も考えないでおこう。

「ここ！ここが私の部屋なのー」

「ほう、そういえば部屋に入るのは初めてだな」

「そういえばねー、えへへ」

昔はリビングとかで遊んでいたので部屋に入った事はなかった。まあ、勉強もしなかったし、部屋に行く必要性がないのだ。しかし今日の目的は勉強。

「どーぞっ！ご覧あれー」

「なんだその言い方……」

扉を開いた瞬間に女の子特有のいいにおいがする。俺も昔はなんで女子からあんないいにおいがするのか。シャンプーのにおいだけでは説明できないあのにおいは何か。ということについて考えたことがあるのは秘密だ。というか今でも疑問に思う。

「ほー、いいにおいだな」

「におい!？」

「おわっちーちゃうちゃう、いい部屋だなーって言ったんだ」

思わず思考がだだもれになってしまった。というか焦りすぎて否定が関西弁になったし、これはごまかせないか……。

「褒めてくれるなんてうれしいなー」

誤魔化せた。でもおせじじゃないんだよな。学生らしい広さ。勉強机に真ん中にテーブル。本棚もあり、一応ゲームなんかもある。ベッドももちろん。女の子らしいぬいぐるみがあちこちにあり、色も赤やピンクを基調にした感じ。それにあそこにかけてあるストライプ柄のパンツも……。

「ぶっ!!!!!」

「ええ!?!どうしたの、井野宮君!つてきやつ!」

俺は盛大に吹き出し、真苗は急いでその下着をかくす。

「えっと、見た?……よね?」

ここはどう答えればいいのか。俺はふと思った。ここで見なかつと言つても信じてもらえないだろうし、なんか失礼だよな。見なかつたことにしたいパンツだったんだ・・・と思われるかもしれない。

「少し子供っぽいものだったけど、可愛らしくて俺は好きだな。うん、ありがとうございます」

「うええええええええん！井野宮君のえっちー！！！！」

「ぎゃああああああ！なんで！？どうして！？俺間違えた！？」

すごい勢いでぬいぐるみを投げられ俺はそれから身を守るのに精いっぱいだった。

○

「じゃあ、勉強始めようか」

「ええ、そうですね・・・」

とりあえず落ち着いた。俺はボロボロだったが。意外とぬいぐるみにも堅いものがあり、結構なダメージだったのだ。

「そういえば、親は今日いないのか？」

「うん、二人とも仕事」

「じゃあ、あいつは？」

「海野？ああ、海野は今部活かな？」

「そうか」

海野というのは真苗の弟である。こいつと違ってスポーツがすごいことができる。なので野球部を今中学でやっている。ちなみに頭はすごいバカで人なつっこい犬みたいなやつだ。中学１年生で坊主。背は小さいな。

「よし！じゃあ、始めるか！」

「うん！」

俺らは勉強を始めることにした。

「なあ、ここはどうやってやるんだ？」

「ああ、そこはね。ここに2を代入して、このグラフでそれをあてはめて」

「ふむふむ」

「あとは頂点をもとめて……」

「ああ、なるほどな！」

こいつは頭がいいのだ。特に数学が。俺は数学が大の苦手であり、大嫌いだ。なので真苗に教えてもらうことが多かった。国語や英語は得意なんだけどさ……明らか典型的文系な俺である。

「よし！なんとか解けたよ」

「ほんと？どれどれ？」

そうやって真苗は俺のノートをのぞく。それは俺に接近すること、体を密着しないとできないこと……、真苗のおいもするわけで……。

「えっと、真苗？」

「ん？つてああ！ご、ごめん……」

「いや、謝らなくていいというかお礼をいいたいというか……」

なんだこの空気！たすけてほしい！けどなんかこういい感じにドキドキする。

「わ、私お茶入れてくるね！」

「え？別に俺は大丈夫だけど……」

「遠慮しないで！」

真苗は階段を下りて行ってしまふ。

「ああ、俺は何ドキドキしてんだろうなあ……」

○

「うわー、すごい驚いたー」

私、真苗未央は一階にいた。お茶を入りにきたのでもあるし、あのドキドキ感に堪えられなかったのだ。

「うー、こんなことで動揺してちゃダメなんだけどな……」

とりあえずお茶入れちゃおう。お菓子も持っていこうかな？

○

「おまたせー」

「おう、ありがとな」

俺はそういってお茶をもらつ。ふうー、落ち着いたー。

「じゃあ、勉強しよう?」

「ああ、そうだな」

俺らはまた勉強に手を付け始めた。

.....  
あれ？おかしいな？俺は勉強していたはずなんだが？う  
ーん、なんで.....

「いよつしゃあー！俺の勝ちだ！」

「あー、今のはずるいよー」

「近道を知ってこそ真のマリ○カーターとなれるのだよ」

なんでマリ○カートやってんだろっ.....

「次は負けないからねー」

「近道をしらないお前が俺に勝てるかな？」

「じゃあ、そんな小細工できないコースにするもん」

「え！？ちよっ、それは近道知らないんだけど.....」

「近道なんてずるいもの使わずに勝つのが真のマリ○カーターだよ」

「くそおおおおお！なんかまだ勝負してないのに負けた気がする  
！」

細かい事はきにしないどころか。うん。

第31話STUDY PARTY（後書き）

タイトルはスタディパーティー。勉強会というタイトルにしようと思っただんですがこれはパーティーだなと思い、これにしました。

昨日は更新しようと思った原稿が消えてしまいしばらく落ち込んでいたんですがなんとか復帰して今日更新しました。

でわ

第32話 SEARCH PARTY

清々しい夏休みの朝。俺の気持ちは高ぶっていた。いわゆるスーパーハイテンションだ。次の攻撃ではただの『こっげき』でも大ダメージを与えることができそうな気分。

「いやーちょっとした小鳥のさえずりでも笑えてきちゃうな」

ふふふつと笑ってみる。小鳥のさえずりがこんなにも面白いものだったなんて気付かなかった。夏休みという余裕、浮かれが俺を身近なものに注目させるのだろう。

「さーて、今日の講習も頑張るかー」

今は登校中。登校する際のいつも通りの景色もちよつと違って見える。こんなところにこんなものがあつたのかー、という新鮮な驚き、新たな発見。登校でさえ楽しんでしまう。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・だめだ」

今までの気持ちは全部本当だ。ちよつとニュアンスが違うかもしれないけど。

「眠すぎる・・・・・・・・」

前回のことは覚えてくれているだろうか。これも誰に話しているわけでもなく独り言なんだけど。俺は勉強するために真苗の家へ行った。しかしそこで行われたのは勉強という名のマリ○カートだった。たまたま俺が見つけたので「一回息抜きにやる？」と言ったのが始

まりだった。

「なぜ俺はゲームを発見したのだろうか・・・」

そんな後悔がある。真苗が異様にそのゲームに強かったのだ。なのでマリ○カーター（自称）の俺は負けるわけにはいかなかった。そこで近道を使った。真苗はそんなものは使わずにする主義というか知らなかったのですと訴える。という繰り返しだ。

「あれはやはり俺が悪かったな・・・」

なんて思う。あのあと勉強に気付いた俺は「やべえ！」と叫ぶ。真苗は何度も謝るのでお前のせいじゃないと説得するのに時間がかかり、家についたのは7時。ここまではいいだろう。その後モラルに今日何があったか話せと言われ、夕飯を作り、話しながら食べ気付くと11時。

「クマができちゃった・・・」

そして当然徹夜。朝4時ぐらいに終わり眠ろうとしたら、俺は風呂に入っていないことに気づく。風呂に入り終わってすっきりすると眠くなってくる。そこでめずらしくトイレに起きたと思われるモラルが俺の部屋まできて、目薬をいやがらせにさされる。そのせいで眠れなくなり・・・

「今に至る。結局一睡もしてねえ」

まあ、自業自得っていつやつかな・・・

「いや、よく考えたらモラルのせいじゃねー?」

新事実発覚。それと同時に学校到着。

○

「おはようー井野宮君ー」

「おつおはようつてもうお昼だぞ」

何事もなく講習が終わり今は下校しようとしたところだ。講習は受ける教科によって教室を移動するので真苗とは別々になってしまっていた。俺は苦手な数学、化学。真苗は現文と英語。

「よ！昨日はどうだったか？二人とも」

そこに志野野辺雄大しののへゆうだいがやってきた。

「どうって……走ったな」

「うんー走ったよー」

「お前らは何をやっていたんだ……」

何ってお前……まあ、いいや。ところで……

「志野野辺。用があるんだろ？なんだよ」

「へ？なぜわかった！」

「3つ目の教科俺は数学、お前は漢文だろ。教室が離れすぎてる。なのにお前がこんなにはやく俺らのところに来るってことは……」

用があるんだろ」

「当たり前だ。じゃあ改めて。井野宮今日暇か？」

「あー、暇だけど」

「じゃあ、真苗今日は俺が井野宮借りるな」

「俺の意見は！？」

「いいよー」

「俺は自分で決められないのかよ！！」

といつつ玄関へとむかう。玄関で真苗と別れ、俺らは制服のままお店がたくさんある街のほうへいくことにした。

「何の用だ？」

「いや、いつも通りだ」

「ああ、もうそんな時期か……」

実はというか前にもいったがこいつはこの地域の不良のファンだったんだ。2つの派閥。『シルバーウルフ』、『暗き蝙蝠』。その大ファンなんだ。なので一カ月に一回は俺らでその情報を探るみたいな子供の遊びだよ。危険な目にあったことは一度もない。というかそれらしい情報がかめないのだ。

「さーて、今日も行方不明になったリーダーでも探すか！」

「今回はリーダー探しなのか？」

「ああ、そうだよ。まずはリーダーを探してみたくってね。会ってみたいんだ」

「ふーん」

俺は一応『銀色の闇』という2つの抗争に関係している。というかその抗争を止めようとしたんだがな。その際にリーダーは何回か見かけたんだが、2つのチームのどちらも顔を隠していたため顔まで

は分からない。そんななか探すのは不可能に近いんだが。

「じゃあ、どこからいく？」

「とりあえずは裏路地だな。お決まりだろ」

と言つて裏路地に入る。見た所なにもなさそうな暗い道。意外と広く普通の道とあんまり変わらなかった。まわりはスーパードなのでいかにも不良！という感じの人もいなかった。

「何もないな……うーん……」

「まあ、今日はまだ長いんだ気長にいきましょう」

「そうだが……この裏路地も駄目か……」

はやくも行き詰まった。なんだこれ。時間の無駄だと思うのは俺だけだろうか……。

「次行こうか」

「ああ」

次は普通の道。それらしい人を探すという作戦だ。だが……

「平和そのものだな……」

「あやしいやつなんていないな……」

次！今度はちょっとあやしい裏路地。ここにはさすがに……と思つたが……

「ここ……ゴミステーションだったんだな」

「くっせえ！出るぞ！」

次！あやしい裏路地徹底捜査！！

「ここもいないぞ」

「ここにもいねえよ」

「じゃあここは？」

「ウソだろ！ここにもねえのかよ！！！」

「あああああああああああああああああああああもう！！！！！！！！！！」

「気をしっかり持て。井野宮。大丈夫まだまだ屈しない」

「俺が屈しそうなんだよおおおおおお！！！！！！！！！！」

もう嫌です。こんなの。

○

「今回も手掛かりなしか……………」

「ああ、ま、次頑張ろうぜ」

「そうだな、じゃあな」

「じゃあな」

と言って志野野辺と別れる。今日4時から部活らしいので今はまだ3時。

「俺も帰って予習するかな」

まだ3時だが帰ることにした。

「シルバールフ……ねえ……」

俺は実は今両方の派閥の場所を知っている。もちろんリーダーは行方不明だが。志野野辺には近寄ってほしくない。危険すぎるのだ。今は2つの派閥仲がいいが、昔は荒れていた。荒れていたなんて表現じゃ優しすぎるぐらいだ。

「はあー、俺には関係ないけどさ」

俺は最近脇役ということを忘れていている気がする。モラルを守ろうとは思った。見た目中学生の子がきついめにあうなんて見過ごせない。それにあいつのおかげで俺はいくらか楽になった。しかし主役になるつもりなんてさらさらないんだ。陰でこっそり守りたい。なのに天使……

「天使……あれはなんなのだろうか」

俺は完璧に負けた。何もできなかった。自分で逃げることも。モラルを助けることも。

「考えても無駄か……」

俺は歩いていく。モラルのところに行くために。いや、予習をするためにだけだよ。

第32話 SEARCH PARTY（後書き）

搜索パーティーという題名ですね。

前回到引き続き遊びというテーマです。

最近眠いので主人公も眠くさせました（笑）

主人公じゃなくて本人は脇役と言っていますかね。

でわ

### 第33話 WOLF

「予習終了ー」

俺はあれから帰って家で予習していた。これでも意外と真面目なんだぜ。

「ふうー……？そついやあ、モラルはどうしたんだろうな」

最近はモラルと会ってないような気がする。いや、学校でじゃなくて放課後の話だけど。でもそのことより先に俺はしなければいけないことがあった。

『ピリリリ、ピリリリ、ガチャ』

『はい、もしもし。井野宮ですが』

「母さん、俺だよ」

『オレオレ詐欺ですか？』

「携帯に電話してんだから俺の名前ディスプレイに出てきてんだろ」  
「！」

『冗談だよ、冗談。で、何の用？』

「いや、ちよつと仕送りが足りないかなあって」

そう俺は最近コンビニ弁当ですませてしまっているため、お金が異様にかかる。寮長の晩御飯に間に合わないのだ。

『は？でもそつち晩御飯作ってくれるんでしょ？』

「いや、最近は……さ。食べれてないんだ」

『はあー、まったくしょうがない子だね。分かった。送っとくよ。』

でも無駄遣いはしないように』

「はい、ありがとうございます」

『じゃあ』

「おう」

『ブツッ、ツー、ツー、ツー』

「あーあ、なんか疲れたな」

少しはバイトでもしようかなと思ったがうちの学校ではアルバイトは禁止されていることに気づく。

「ま、いいか。とりあえずモラルモラル」

といつつ玄関を出て隣の部屋に行く。そして一応インターホンを鳴らす。

293

「はい、って天十か……………」

「悪いかよ……………」

「で、何の用？」

「いや、最近会ってないなと思って……………」

「え!？」

なぜそこで頬を赤らめる。俺は何か言っただろうか。何も言っていないよな。

「そ、そうなんだ……………ふーん……………私は元気だから心配しないで」

「別に心配はしてないんだけど……………まあ、それならいいや」

「うん……………ありがとう」

ボタンッ

「おおー！あぶねえ……」

怒らせる事をいったかな？あんなに強くドアを閉めることはないと思うんだけど。顔も赤かったし。いいか。考えてもわかるようないとじゃない。

「じゃあ、戻るか……」

俺は家に帰って寝ることにした。

○

実は今日、講習が休みだったりする。なので俺は朝から街にいるわけだ。店がいつぱいあるからどこに行こうかなんて考えるが、本屋で立ち読みしたり、新刊チェックで終わってしまう。

「一人だしな……」

俺は朝から暇だった。明日の講習の予習は終わらせてしまったし、宿題もやる気にならない。どうしたもんかここに来たわけだ。

「だからといって何もすることねえな……」

するとはるか遠く。視力で確認できるかできないかのところに……

「シ、シルバーウルフ!?!?」

白い学ランを着た男が見えた。こちらへんは『暗き蝙蝠』の縄張りだったはずなんだが……。しかも集団戦法が得意のはずなのに一人で……。違和感がある……。

「うーん……。リーダー代理かなんかに命令されたのかな?」

実は俺はリーダー代理と面識がある。もちろん両方のチームのもあまり関わらないようにしていたんだ。俺は非日常が大嫌いだから。

「どうせ暇だし」

俺はそんな何気ない気持ちでついていくことにした。いや、あのね……別に……。これは必要ある尾行だつ!!!!

○

男は裏路地に入って行った。『暗き蝙蝠』がいる奥へと進んでいく。その2チームは協定を結んでおり、今は仲がいいと表現してもいいぐらいだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

男は『暗き蝙蝠』主要陣地についた。

「よう、お前シルバーウルフか？どうした？」

『暗き蝙蝠』は女性メンバーが多く、今男に話しかけたのも女性だった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「おいおい、話さないと分からないぞ？」

次の瞬間、男は隠していたナイフをとりだし、その女へとつつこみ、そして・・・・刺した。

「がはっ・・・・・・・・な・・・・んで・・・・？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「マミー！」

それに気づいたメンバーが駆け寄ってくる。

「てめえ！よくも！ゆるさねえ！」

鉄パイプを持ち、突進する女。しかし男はそれを少しの動き。最小限の動きだけでかわす。

「・・・・・・・・」

男はナイフを振り上げ。その女も切りつけた。

「きゃあっ・・・・・・・・！」

ドサツ

「・・・・・・・・・・・・・・・・<sup>あい</sup>・・・・・・・・」

「リーダー代理！シルバーウルフが攻め込んできました！」

「何！？」

「人数は一人です！」

「一人・・・・・・・・だと・・・・・・・・」

「あたしらに攻撃の許可を！」

「だ、駄目だ！そいつは明らかに単独行動。そしてどこかおかしい。ここでそいつに攻撃したら・・・・・・・・リーダーがせっかく作った協定が崩れるかもしれない！」

「でも・・・・・・・・」

「こんな時・・・・・・・・リーダーだったら・・・・・・・・」

「待て！」

そこにいたのは非日常を嫌う少年だった。

○

どういうことだろうか。協定を結んでいた『シルバーウルフ』が・・・『暗き蝙蝠』をきりつけた。これは驚くほかににもすることがなかった。

「お、おい！待て！」

俺は拳を握り・・・そして男の後頭部を殴りつけた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

男は無言で倒れる。

「い、井野宮さん・・・？」

「お、おう。久しぶりだなリーダー代理。というかさすがにさんづけはやめようか・・・」

「みんな！井野宮さんが来てくれた！」

「きいちゃいねえ・・・」

「え！？井野宮さんが！」

俺は今現在こういう扱いなのだった。

「それで聞きたいことがあるんだけど・・・」

「なんですか？」

「なんでシルバーウルフがこんなところに？」

「あたしたちにも分かりません」

「え？」

「じゃあ、なんだってこいつは・・・」

どういうことだ・・・こいつは何か許せないことがあって動いたんじゃないのか？じゃあ、理由もなしにナイフできりつけた・・・？

「マミとアケミを病院へ連れて行きな」

「はい！」

「俺は『シルバーウルフ』に聞いてくる」

「分かりました。ありがとうございます」

○

「リーダー代理はいる？」

「井野宮さん！」

ここは『シルバーウルフ』の主要陣地。ここも路地裏のさらに奥と  
いった感じだった。

「代理、シルバーウルフの1人が暗き蝙蝠を襲った。これはお前の  
命令か？」

「！？そんなことが・・・タツヤがいないと思ったら・・・俺  
の命令じゃないっす」

シルバーウルフの代理は暗き蝙蝠と違って男だ。その分感情で動き  
がちなんだよなあ…。

「じゃあ、単独行動か・・・。なんかそいつは暗き蝙蝠に恨みで  
も？」

「いえ、最近はずが良く恨みも何もありませんでした」

謎が深まるばかりだ……。

「まったくあいつ突然誰かに操られているようにフラフラっとなくなりやがって……そのうえ、井野宮さんにも迷惑を……」

「いや、俺はいいんだ」

……誰かに操られている？じゃあ、その意思じゃなくて別にまた黒幕がいるということか……？

「分かった。ありがとう」

そういつつ、俺は携帯で電話をかける。連絡取れるように『暗き蝙蝠』の代理と電話番号を交換しといたんだ。

「もしもし、やっぱり代理の命令じゃなかった」

『そうですか……じゃあ単独行動だったんですか？』

「その可能性もあるけど、誰かに操られている可能性も」

『それはそいつが黒幕に弱みを握られてるとかそういうやつですか？』

「ああ……」

確かにその可能性もあった。でも俺は知っている。そういつたことなしで人を操れる方法を。それは『非日常』であり、『異能』である。

「でも……そんな能力使う奴に俺は心当たりがない……」

やはり単独行動なのだろうか……。おそつたやつ……確かタツ

ヤだっけ？そいつに聞くのが早いよな。

「じゃあな」

『はい』

俺は携帯をきり、家へと向けて歩む。

「じゃあな、代理。またくる」

「はい……その……」

「？」

「リーダーは見つかりましたか？」

「いや……まだだ。ごめん……」

「いえ！いいんです！では……」

シルバーウルフも暗き蝙蝠も……どちらもリーダーのことが大好きなんだ。ほんとに心から。なのに……この肝心な時に。

「何やってんだよ……」

顔も知らないリーダーにそう呟く。

○

「はぁーあ、失敗かぁー。私の愛を受けといて失敗するなんて無礼

ねえー」

「しししっ、でも愛を受けたからこそ失敗したんじゃないの？」

「怒るわよ」

「……ぐす……ごめんなさい……ひっく……」

「まったく相変わらず扱いづらい子ねえー」

天使ラーエイはもう一人の天使、アルミトルスと一緒にいた。場所は病院。それはシルバーウルフのタツヤが殴られた後、一回、目をさまし、そしてまた倒れ運ばれた病院。

「失敗した子はいらないわあー」

「いやったあああああああ！！殺すの！？ねえねえ殺すの！？」

「うるさい子ねえー」

「うう……ぐすっ……ごめんなさい」

「まったく。じゃあ行くわよ。偽物の愛なんていららないのよ……」

○

俺はタツヤから情報を聞き出すことができなかった。一生できないんだ……。

タツヤは死んだ……。

どういうことか分からないが……腹の部分をでかい刃物で貫か  
れたらしい。

俺にはどうすることもできなかった……。

### 第33話 WOLF（後書き）

タイトルは狼です。

さて5章。長くなりそうな予感がするのは気のせいでしょうか？  
気のせいですね。

読んでくれた方々本当にありがとうございます。  
なんか最後のあいさつっぽいですがまだ続きます。

でわ

### 第34話 SHORT STORY

次の日の昼。俺は今、シルバーウルフの拠点に来ていた。もちろん、リーダー代理と話すために。

「大丈夫か」

「ええ、すみません。仲間が死んだことにうろたえてしまって」

それは当然のことだと思う。当然。俺はタツヤに会ったこともないのでなかなか悲しみというのが湧いてこなかった。これも当然。・・・なのだろうか。

「それにしたっておかしい話だな」

「ええ、夜の病院にこっそりと忍び込むなんて・・・。これは暗き蝙蝠の仕業でしょうか？」

なぜリーダー代理がそのようなことを言うのか。これも当然のことであり、しょうがないことだと俺は思った。タツヤには親がもういなかった。なので祖父祖母が病院にきたんだ。もちろん俺らは謝った。

「いえ、タツヤが好きなことをできたのならそれで幸せです」

そのようなことを言うてくれた。もちろん暗き蝙蝠を襲ったというのは秘密にしてある。その後、病院の患者さんたちからたくさんの情報をもらった。いや、噂を勝手にきいたということか。

夜、女の影が病室から出て行ったと。

それはまぎれもない真実なのか、まぎれもない偽りなのかは俺には判断ができない。何しろ俺は見えていないのだ。しかし一番疑われるのが暗き蝙蝠のメンバー。タツヤにメンバーを襲われているし当然の結果だと思った。しかしそれは偽りだと思う。

「それは違うよ。暗き蝙蝠がそんなことするわけ……」

「どこにそんな証拠があるんですか！」

「……」

突然の大声に驚くことになった。これも当然。まったく当然が多すぎてまったく新鮮なりアクションができないな。なんて軽く考えたり。事の重さを分かってないわけじゃない。ただ人が死ぬことに実感できないんだ……。と言ったら俺は普通の高校生だっただろう。普通の高校生として当然。

「確かに証拠はないけどさ。でも暗き蝙蝠が簡単に行動に移るかな？」

「考えづらいですが……。それがい一体なにが……」

俺は異常な高校生だ。死には少し慣れすぎていた。異常な高校生として当然。当然のような感情だった。なにせ俺は異常、非日常、不可思議。どれにも慣れていいるのだから。当然……。ね。

○

俺は暗き蝙蝠の拠点を訪れた。もちろんリーダー代理と話しに。

「あたしらは知りませんね……。昨日はあたしらも違う病院にいたんで」

「違う病院？」

「ああ、昨日メンバーが刺されたんでその様子うかがいに」

「そうか」

そういえばそうだったなと実感する。これで証拠はとれる。病院に行つて確認をとればいいのだ。だがこれで余計に分からなくなつた。完璧に。それこそ簡単に。

「あーあ……」

俺は途方に暮れていた。何も手掛かりがつかめない。まるで雲をつかもつと空に手をのばすように。まったく意味のない行為。まったく手ごたえがない行為。

「あの……井野宮さん？」

「ん？」

俺に話しかけてきたのは梨菜だった。暗き蝙蝠の一員であり、俺が暗き蝙蝠の中で最も中のいい女の子だ。しかし顔立ちは幼く。背は低く、髪もショート。どこか幼さが残る少女でおとなしかった。

「どうしたんですか？溜息なんかついて？」

「いや、なんでもないよ」

「溜息つくと……幸せが逃げてしまいますよ」

俺はそういうのは信じないんだがな。梨菜が言うとは信憑性がでてく

る。いや、癒される。

「悪い、悪い」

「誰に謝っているの・・・？幸せに対して？」

「幸せに謝るとはなんとも幸薄そつな男だな」

俺にぴったりだった。そしてこんなゆるい会話は毎回なので慣れてはきてる。なぜかどんなときでさえ梨菜は俺と雑談しようとしてくる。そんな梨菜には俺も心を開いている。

「ところで井野宮さん」

「まさかの話題変更だが聞いてやるう」

「乳がんにあってあるじゃないですか」

「女子の口からそんな言葉が日常会話で出てくるとは思わなかった」

梨菜は純粹なためどんな言葉がどういう人に言ってはダメなのかわからないのだ。これでも本人は恥ずかしがりやでそして真面目な雑談だと思っている。女子として当然なのは知らないが。

「あれって男の人でもなるんですかね？」

「乳がんがか？うーん、なるんじゃないの？詳しくないからわからないけど」

昔どこかで見たとような気がする。ていうか俺は乳がんにかかってないのになぜそんな言葉を調べたのだろうか。自分で自分がわからない。

「お医者さんになんて言うんでしょうね？」

「なんて言うんでしょうね？って・・・乳がんなんですけどって言えばいいんじゃないか？」

「でもまだ乳がんでわかる前の段階でしょ？」  
「……………ああ、そうか」

一応梨菜は俺の1、2歳下なのだが。なぜだろう、学力的に差をつ  
けられてるように思うのは。

「じゃあ、なんかしこりがあるんですけどとかかな？」

「でも男の人が乳がんになるなんて話あまり聞かないですよね？だ  
から男の人は言いづらいんじゃないかと思って」

「あー、そうかな？かかったことはないからわからないけど、そう  
なのかもしれないな」

「だとしたら言いやすい言葉っていうのを考えてあげたらいいんじ  
やないかなって思ったんですけど」

「何かいい案があるのか？」

「はい、でも私の勝手なイメージですけど……………」

「それでもいいよ」

「『すみませんっす、オイラ乳にしこりがあるんすけど』」

「お前のイメージってそんななの！？一人称がオイラってどうい  
うことだよー！」

謎だった。

「『あー、乳がんですね』」

「それは医者か！？適当すぎだろう！何をして乳がんだと分かつた  
んだよー！」

患者の謎なら医者も謎だった。

「『はやく治さないとあと寿命1年ですよ、逢原さん』」

「名乗ってないのになんで名前知ってんの！？寿命も！なに！死神

と契約でもしてるの！？死神の目でも持つてるの！？」

「『それはぎりぎりですな、井野宮さん』」

「医者の方調のまんまかよ！」

役に入りきっている。確かこいつ中学で演劇部だったな……。それで何かと演じたがってたのか。

「『ではやくあつしのしこりとってくださいっす』」

「一人称が変わってるー！ー！ー！ー！！！」

安定しないキャラだ。そしてこれはコントか？俺はなんでツッコんでるんだ……。

「おい、梨菜。俺にも何か役をくれ。どうせだったら一緒にやるさ」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

もはや乳がん関係なかった。というかこいついい案があるとか言っ



てもらった時点でがんだもん。俺はがんそのものだったもん。

「『とりあえず治療に必要なものは・・・生肉、ドス○ンポスの頭、火竜の爪・・・』」

「おい！お前それアウトだろ！狩ってこいつてか！」

「『とりあえず支給品として、のど飴』」

「扱いがひどい！鼻とどの通りをよくしてどうすんだよ！」

「『嗅覚で相手を探る・・・』」

「俺って人間じゃないの!？」

「『いいから早く狩ってきてくださいよ。まったくこれだからアウ

ストラロピテクスは・・・』」

「哺乳類霊長目ヒト科!？」

「あれ？それって人もじゃなかったっけ？」

「急に素に戻ったな・・・。動物界・脊索動物門・脊椎動物亜門・

哺乳綱・サル目・真猿亜目・狭鼻下目・ヒト上科・ヒト科・ヒト属・ヒト種だ」

「『うん・・・まあいいですな』」

「諦めた！というか医者に戻ったよ！」

自由なやつだ。というかこのネタどこまでひっぱるんだよ・・・。

「『』というか治療すんの？しないの？しないんだったら出てって』」

「つめてえ！医者が患者につめてえよ！」

絶対にいけない対応だった。

「『治療します、してください』」

「『じゃあ、とりあえず・・・密林に入ったらこんがり肉食べて・・・』」

「なんのアドバイス!？俺今から密林いくの!？」

「『装備はボウガンで仲間が敵に斬りかかった瞬間に通常弾発射。相手の動作を許さなくする』」

「普通にうざいやつだよ！たまにいるぜ、そういうの！」

しかもそういつ時に限って拡散弾やら強い弾を使いやがる……。なぜモンスターに使わない。

「『クーラード○ンクの効果きれた！やべえ！やべって！誰かくれ』」

「なんかあるあるネタになってない？」

「『はあ？お前モド○玉は！？ふざけんな！ちゃんと持って来いって言っただろ。まったくほらやるよ。早く受け取れ。あれ？ちよつと、どこに行くの？はやく俺の近くでボタン押せよ。じゃないと俺身動きとれないんだけど、なあちよつと！』 r a i g e r は力尽きた」

「最悪だー！！でもたまにある！っていうか名前ライガーっていうんだ……」

なんだこの話題。やってるやつじゃねえとわかんねえぞ……。

「『さあて剥ぎ取るか……。っておい！大剣で吹き飛ばすなよ！まったく……。っておい！またかよ！もういい加減にしろよ……。はあ……。ってまた！？』 バンツ！」

「またまた最悪だー！大剣で結局剥ぎ取れないまま清算場面かよ！」

なんだか悲しくなってきた。

「『さーて狩りに行くこうぜ！ってちよいまってて。お菓子とつてくる……。さーてやるか！あれ？何これ？でかい樽と小さい樽？小さい方はなんだかシューって音が……。』 r a i g



「『んで？どこの治療から始めようか？』」  
「忘れてた！俺今悲惨な状態だったのか！」  
「『うーん、徐々にゲームやりたくなつたから他のところって』」  
「こんだけ待たせといて！？」  
「『CLANNODでも見てれば？』」  
「泣くわ！そんな軽い気持ちで見れるか！」

また方向がマニアックだった。確かにあれは泣けるいいアニメだ。

「うん、やっぱり井野宮さんと遊ぶのは楽しいや」  
「そうか？」

でもやはり嬉しかった。楽しいといわれることは嬉しい部類に入るだろう。しかし今回はまったく進まなかったような気がする。雑談小説にいつからなつたんだよ……。って何の話をしてるんだ、俺は？

第34話 SHORT STORY (後書き)

今回はショートストーリー。

意味はコントです。

まったく話の進まない回でしたがどうでしたでしょうか？  
書いてるうちに面白くなってきたのは秘密です(笑)

でわ

第35話 AGAIN AGAIN

俺はその後帰宅して、次の日を待つことにした。

『ピリリリリ』

「ん？電話だ」

液晶画面を見る。するとそれは真苗だった。

「真苗か？どうした？」

『最近会ってないと思って……。夜遅いけど話してくれる？』

「ああ、いいぜ。話そう」

最近雑談ばかりだなあ……。と思いつつ話を聞く。

『け〇おん！って面白いよね』

「お前もそうというのは無視か！！」

俺のまわりはこんなんばつかなのかと頭を抱えた。しかしそういえばそうだったなと思いいたる。

『2期になっても面白さ、ゆるさは健在だよね』

「ああ……。そうだな」

この話題は果たして通じてるだろうか……。

『特に最新話！もう感動して涙涙だよ……。』

「そうだったなあ！」

こいつは配慮というものを知らないのか。梨菜もそうだったが。しかし感想は同感である。

『卒業式ってどうなるんだろうね！私、泣かないで見れる自信がないよ』

「それは……確かにな……」

こっちの疲れが伝わらないのだろうか。

『私もギター始めようかな？』

「それはやめとけ！」

『そこは真面目な警告！？』

こいつのことだから一期の1年生時学園祭の滞状態になりかねん。ていうかこいつも名前未央だったな。

『君〇届けもいいよねえ……。純粹でなんかこっちまで応援しなくなっちゃうもの』

「お前はアニメの話をするために電話してきたのか？」

あれ？シリアスパートは？何それおいしいの？状態とはこのことだ。

『あ、こんな時間だね。ごめん少し長くしゃべりすぎちゃった』

「いや、いいよ。最近話してなかったし、俺も嬉しいよ」

『……』

えらくためたな。相手のことなんで分からないけれど。

「じゃあな」

『うん、またね』

そして俺は通話終了ボタンを押した。

「結局本当にアニメの感想しか言っていかなかった……」

今日もほとんど外ですごしたため、かなり疲れている。だから早く寝たいのだ。真苗とは癒されるので話していても大丈夫だが志野野辺は無理だな。

『ピリリリリ』

「えー、また電話かよー」

文句は言ったもの出ないわけにはいかない。液晶画面には委員長である木野白の名前が出ていたからだ。無視したら次会った時どうなるか分からない。

「もしもし」

『お、井野宮君か？時間あるかな？』

「ああ、うん。で、何の話だ？」

『ああ……実は……』

これはもしかしてシリアスパートとかいうやつか！このためには絶対そうたる！完璧！もうこれで雑談はなしだ！もう俺が危惧しているようなことはおこらない！

『波○球なら私でもできると思うんだ』

「何の話だよ！脈絡がなさすぎるだろう！」



「はい！もしもし！」

さっきのがあるため少し声を荒げて電話にでる。

『井野宮さん？なんか怒ってませんか？』

相手は梨菜からだった。

「いや、すまん。どうした？」

『実は暗き蝙蝠とシルバーウルフのメンバーが何人か行方不明らしいの』

「行方不明？どういうことだ？」

『お互いに8人ずついなくなってるらしいです。リーダー代理は携帯にかけてりしているんですがまったく繋がらないらしくって・・・』

『・・・』

「そうか、わかった。じゃあ、今すぐ行く」

『いや、それだけじゃないんです！』

めずらしく声を荒げる梨菜。さっきの俺よりもでかい声だった。電話にでたときからかなり暗い感じだったから何かあったんだろうと思ったが、ビンゴか・・・？

『リーダー代理と仲間たちでシルバーウルフに戦闘をしかけるそうです！』

『！！』

『シルバーウルフの方も暗き蝙蝠に攻撃を仕掛けるらしくて・・・』

『なんで！なんでそんなことになってんだよ！』

頭をよぎる銀色の戦闘。闇のような暗さ。思い出す。とてつもなく恐ろしい戦争を。二度とおこしてはいけない戦争を。

『このままじゃ銀色の闇が再びおこってしまいます！！！』

「ちっ！くそっ！どうする」

リーダーがいない今、被害はそこまでではないだろうが死人が出る可能性がないわけじゃない。しかも俺は能力を失っている。止められるかわからない……。

「何があつて、そこまで話が飛躍するんだ！」

『たぶん。シルバーウルフの死人、暗き蝙蝠の重傷。さらに行方不明者。それらがリーダー代理に重くのしかかってたんじゃないかと思えます。それでお互いのせいにして……』

「とりあえず、お前は危険じゃないところまで下がって……」

『嫌です！私も暗き蝙蝠の一員！みんなを止めるために頑張ります！』

「そう……か……。分かった。だが無理はするな！」

『はい！では後で！』

さっきよりも緊迫した状態で通話終了ボタンを押す。俺は焦っていた。今回は俺一人で頑張らなければいけない。それに能力がないからだ。

「間に合ってくれよ！」

そして玄関から出ていく途中にモラルと会った。

「あれ？あんたこんな時間にどこにいくの？」  
「ちよつと野暮用だ！」

モラルは今回無関係だ。巻き込むわけにはいかない。

「ふうん。ま、助けてほしいときは電話ちようだい」  
「モラル……」

なんでもお見通しらしいな。

「分かった」  
「無茶はやめてね」  
「分かった」  
「必ず戻ってきて」  
「分かった」  
「もちろん、笑顔でね」  
「分かった！」

俺は再び走り出す！もう迷わない！能力がないからなんだ！俺は俺だ！俺がしたいようにするに決まってるんだろ！

「待ってるよ……梨菜……みんな！」

俺は気付けなかった。リーダー代理やみんながそんなに追い込まれていたなんて。何もわかってなかったんだ。分からないのが当然だが……それでもどうにかしなきゃいけないかったのに！

「あーら？そんなに慌ててどこにいくのーん？」  
「！？」

すぐ近くに人がいた。しかも二人。数歩のところに行ったのに気配は感じなかった。この時点でただものでないことが分かる。

「そんな怖い目しちゃだめよーん」

「そうだぞ！もつと喜んで悲しんで楽しんで哀れんで見るよ！」

「誰だ、てめえら……」

「うーん、聞いたあなたから自己紹介しなさいな。私たちはあなたのこと知ってるんだけどねー」

「言い逃れはできないぞ！もつと楽しめよ！」

「ちっ……井野宮だ」

なんだこいつら。見たところ両方女みたいだが。

「ラーエイ・カナタリス」

「アルミトルス・アドバンテージ」

『天使』

「!!!?……天使……」

皆さんお待ちかね！シリアスパートらしいぞ

第35話 AGAIN AGAIN（後書き）

タイトルは またまた。

またまた登場の天使。

それにまたまたおこるかもしれない銀色の闇。

うん、シリアスパートです。

第5章〈終〉 第36話 HURRY

「天使……」

「そつよーん、天使。どう？分かるかしらん？」

「でもまだ僕達、喜び悲しみ驚くことに天使化してないよー」

エンジェリング

「ああ……じゃあ、したほうがわかってもらえるかしら？」

話が勝手に進んでいく中で俺はどうしようもなく焦っていた。前回、天使アンジェ、モカの2人と戦った時。あのときは完璧に負けた。今回もそうなってしまうのだろうか。

「あらー？静かね？何か悲しいことでもあったの？」

「喜び嬉しがつてるんだよ。僕達のように美しい人に出会えて」

「嬉しいこと言ってくれるわね。井野宮くん」

「俺はまだ何も言っていないぞ」

それにしても話が進みすぎだった。ラーエイと名乗った方はまあ、なんつーかすごいエロい。体つきとか。なんか全部含めて。

「つれないこと言わないの」

「そつだよ、きつと驚き嬉し照れ隠しだよ」

さつきから異様な言葉遣いでさらに自分のことを僕という天使アルミトルス。こつちは完璧子供だった。アンジェほどじゃないが、俺と同じかちよつと上ぐらいな感じ。2人とも顔は整っているので綺麗なのだがいかんせん性格がな。

「なんか失礼なこと考えてない？」

「別に」

「やっぱり喜び悲しみ照れ隠しなんだね」  
「で、俺は急いでるんだが。何の用だ」

会話を進めることにした。どうでもいいことをしゃべっている暇はない。今、梨菜が頑張ってくれているんだ。みんなを止めないと。

「ちょっとばつかし、ね」

「うん、驚き悲しみ嘆いてもらおうと思ってさ」  
「だから何の用……」

その瞬間には俺の腹に鉄パイプが当たっていた。気配はなし。鉄パイプが気配を消しているようなありえない光景だった。

「がはっ……」

俺は後ろに飛ばされ、そして転がる。口の中、血の味がする。きつと吐血したんだな。

「なーんだ案外あっさりしてるじゃない」

「ごほっ……がはっ……ぐっ……」

「アルミちゃん。ここは私一人でいいわ」

「えー、僕も喜び嬉しみたいー」

「アルミちゃん」

「……はい、じゃあ僕はもう先に行ってるね」

そう言った瞬間すぐに何メートルも先に移動していた。

「あっさりしてる男も嫌いじゃないんだけどー。もっとしつこいのも好きよ」

「ぐ……そ……。はあはあ……。何をした……?」

場所は裏路地みたいな場所なので（近道しようとしてここを通った）鉄パイプならそこらへんにある。鉄パイプ自体は不思議ではないのだ。不思議なのは……。

「鉄パイプ……自らなんで俺のほうに飛んできた……？」

「うーん、アンジエと戦ってるなら分かるでしょ？私の能力よ」

するとラーエイは踊るように回転しだした。

「愛……愛！私の力は愛なのよー！愛の力で私の虜にしたのー。私を愛してくれるものたちは私の言うことをなんでも聞いてくれるの」

いわゆる操る能力らしい。愛を与えたものは愛のためにいうことを聞いてくれるのかなんとか。

「てめえは……」

「そう！私はiの天使。愛の天使よ」

「くっ……」

なんとかして立ち上がろうとする。しかし手に力が入らない。さっきの一撃はかなりきいたようだ。

「立つても無駄よ。ここらへん一帯に私の愛を注入してるの。投げキッスだね。だからここらへんの

もの全てが私のいうことを聞いてくれるの。立つても無駄」

「ぐっ……」

「無駄って言うてるでしょ」

ボゴオ

「ぐあああああああああああああああああ！！！！！！」

腕がやられる。腕におもいつきり鉄パイプをぶつけられたのだ。今の音からして確実に折れたな……。くそつ……。しかも右手かよ……。

「まだ……。だ……。だ……」

残った手で立とうとする。しかし……。

「往生際が悪いわね」

ボゴオ

「ぎつぎあああああああああああああ！！！！！！」

今度は左手。これで完璧に立てなくなった。腹のダメージも残っているし足だけでは立てない。能力があれば……。

「あれー？何もしてこないのね？アンジエの報告によると言霊使いだから手とか関係ないと思うんだけど……」

「くそ……」

一応小声で守とか言ってるんだが……。効果がないということはまだ能力が戻ってないんだろう。

「まあ、いいわ。君はここで寝てなさい。殺しちゃったらアンジエちゃんに怒られちゃうもの。ま、あなたの足どめということよ」「

「待て!・・・どこに行く気だ」

「別にー私の勝手にしょ?じゃあねー、また会いましょう、井野宮くん」

その瞬間には姿は消えていた。

「ぐっ・・・くそ・・・」

俺はまたも完璧にやられたのだった。

「こんなところで倒れてる場合じゃないってのに・・・。ちくし  
よう・・・」

俺は自分が情けなかった。所詮この程度しかできない。ただの人間。

「助けてくれ・・・俺を引き出してくれよ・・・」

俺は助けを求めていた。どこから助けてもらうのか。誰に助けてもらうのかまったくわからなかったが、俺は嘆いていた。

「助けてくれ・・・助けてくれ・・・立ち上がらせて  
くれよ・・・」

名前を呼ぶ。俺を立ち上がらせてくれるようなやつを。情けなくても・・・。

「モラル・・・」

「何やってんの、あんた?気になって様子を見にきたらこんなところで遊んでいるとはね」

俺の近くにまだ幼い声が響いた。それは救いの声ではなかったと思う。

「モラル………」

「はあ、まったく世話がかかるな……」

「テレポート  
次元移動」

すると俺の傷はみるみる治っていった。最終的にはまったくの無傷な状態だった。

「モラル……ありがとう。でもこんな能力お前にあつたか？」

「あんたの体を次元移動させたの。あんな状態になる前に戻したのよ」

「そう……か」

「無理しないで。どうせ止めても行くんでしょう」

「ああ」

「しかもあんた天使にやられたでしょ。それでも行くの？」

「ああ」

「私はもう次元移動使えないよ」

「ああ、お前は俺の帰りを待っていてくれ」

「まったく……あんな情けないやつが何をいつてるんだか……」

そついつつモラルはもとの道に戻って行った。

「そついや……あいつらモラルがいる方と逆側に行ったな……モラルが目的じゃないのか？」

俺はとりあえず走ることにした。みんなのもとに……。たどり着けるように。

第5章〈終〉 第36話 HURRY (後書き)

タイトルは急ぎです。

シリアスパートに入ったところなのですが、ここで区切らせていただきます。

次回からはタイトルに日本語がちゃんと入ります。

でわ

銀色の闇first 第37話DESIRE

俺はとりあえず、志野野辺に電話した。あいつこの時間帯にたまーにコンビニ行くから家から出ないように連絡だ。ちなみに今は夜10時過ぎ。

「お、志野野辺か？」

『お、井野宮か？どうした？』

「今日はコンビニに行くか？」

『なんだ急に？今日は行く予定はないぞ』

「そうか・・・じゃあ、今日はもう家にいるようにな」

『いるっちゃあいるが・・・。何かあったのか？』

「いいや、なんでもない」

『そうか・・・そうだ俺らバスケット部は新入生を迎える時、ピーオーパンをやるんだ。俺はティンオーベル役なんだがどう思う？』

「どうでもいいわ！、じゃあな」

俺は急いで通話を終える。あいつの話はまた今度ゆっくり聞こう。たいしたことじゃなかったが。

「ちっ・・・まだぶつかってないだろうな・・・」

俺がむかっているのは暗き蝙蝠の拠点だった。

○

決して起こしてはいけない喧嘩というには派手すぎて、戦争というにはあまりにも正統的な戦い。

殺人、破壊、浸食。

繰り返し行われる恐るべき闇。

銀色の戦い。

それらを恨み、妬み、恐ろしさをこめて人々は

銀色の闇と呼ぶ。

○

「リーダー代理！……って梨菜！？」

暗き蝙蝠の拠点。もうそこには誰もいなかった。いや、いるにはいる。倒れた暗き蝙蝠のメンバーが数人。重傷ということではなかったが、意識がない。俺は梨菜を抱えて無事を確認することにした。

「梨菜……大丈夫か！」

「う、ううん……井野宮さん……？」

「そつだ。何があった？まさかもうシルバーウルフの連中が……」

「いえ、……違います」

意識がはつきりしてきたのか梨菜は立ち上がる。

「ここに倒れている人はみんな戦いに反対の人達なんです。リーダー代理に話をして、無理で・・・」

「それで武力行使された・・・と」

「はい。やはり数が違いすぎます・・・。勝てませんでした・・・」

「いや、いい気にするな」

「でも・・・またあの戦争がおこっちゃいます・・・またとめれなかった・・・」

梨菜は責任を感じてか泣きだしてしまった。俺はなんて声をかければいいのか・・・。こういう面でも俺は自分の役立たずさにあきれていた。泣いている少女に声をかけることもできない。

「梨菜はここにいろ」

「え・・・井野宮さんは？」

「止めてくる」

「じゃ、じゃあ私も・・・」

「いいから。ここにいてくれ。それにまだ意識が完璧ではないんだろ。それなら逆に足手まといだ」

「井野宮さん・・・」

「止めてくる・・・お前の思いも背負って・・・止めてくるよ」

「はい・・・分かりました」

俺は走り出す。俺だけじゃない。この戦争を止めることはみんなのためでもあるんだ。負けるわけにはいかない！俺はどこまでも走る。息が切れようとも。息が絶えようとも。

○

この商店街は信じられないくらい広がった。商店街と言っても店がたくさん並んでいるだけであり、古風な感じはまったくしない。むしろ最先端という感じがした。ここにくればどんなものでも買え、そろえることができる。でかいデパートは当たり前。本屋に文房具屋。ホームセンターに100円ショップ。たくさんのお店がそろっていた。

しかもこの大きさは町一個分。商店街というよりデパート街。お店が多い分、ここには路地裏が増える。店の大きさもそろえられてないので所々でかい路地裏があるのだ。

そこを拠点としているのがシルバーウルフに暗き蝙蝠。お互いの拠点は正反対のところにあるため、今、バスもないここでは徒歩で移動するしかないが、ぶつかるのにすごい時間がかかる。

なのでそこがぶつかる前に止める仕事が井野宮天十に課せられている。

ここはシルバーウルフ。

「なんとなくでも暗き蝙蝠を根絶やしにするぞ……」  
「分かっています、リーダー代理！」

返事をしたのはリーダー代理になる前からリーダー代理に付き添っていたメンバー。

「俺は……俺はリーダーからこの大切な仲間を預かっているんだ……。それを崩されるわけにはいかない……。崩される前に崩す！それが今回の目標だぞ！」

「はい！……とと……。リーダー代理！やはり井野宮さんが来ているらしいです！」

「井野宮さん……。よし！邪魔されないように止める。無理なようなら……」

「殺せ」

「分かりました。伝えておきます」

うって変わってここは暗き蝙蝠。衝突までかなりの時間がかかるため走りながら移動している。暗き蝙蝠は一人ひとりでの戦闘が得意なため、仲間がはぐれていても平気なのだ。

「姐さん！」

「いつの時代の不良だよ……。普通にリーダー代理と呼んでくれ」

「いえ、それじゃあむこうと丸かぶりです！なので姐さん！井野宮さんが来たらしいです」

「予測済みさ。手はうつてある。すまないね・・・井野宮さん。これもチームのためだとわかってくれ」

「でも本当にシルバーウルフが悪いんでしょうか？」

「何を言っているんだ。最初に攻撃してきたのはむこうだ。仲間が一人刺されているしな。それにむこうの仲間が死んだのをこっちのせいになっている！寝込みをおそうなど！卑怯な真似はしない！」

「はい！その通りですね！」

「今に見てる・・・」

○

「人通りは少ないな・・・」

俺、井野宮天十は商店街を走っていた。チームがぶつかる場所は予想済み。一回銀色の闇に立ち会っているんだ。それぐらいはわかる。

「一般人が巻き込まれる恐れはないか・・・」

すると前から人がきた。数は3人。

「一般人か・・・ってシルバーウルフの連中じゃねえか！」

目立つ白の学ラン。

「井野宮さん……」

「ちようどいい、リーダー代理のところまで連れてってくれ」

「それはできません……」

「なっ!どうして……」

「リーダー代理からの命令です。井野宮さんの足どめ、それができないようなら殺せ……と」

「!!--」

「すみません、井野宮さん。カツヤ!」

「シン!」

「アヤセ!」

「「行くぞ!!--」」

するとまずカツヤと呼ばれた人物がすごいスピードで俺に近づき、腹を殴ろうとしてくる。それを俺はぎりぎりかわす。しかしその間にシンが俺の背中めがけてとび蹴り。

「ぐっ……!」

それをモロにくらった俺はその場に倒れる。しかしアヤセと呼ばれた人物がすかさず、俺の顔面めがけて蹴りを繰り返す。

「あつぶねえな!」

俺は背中をのけぞる形でそれをかわし、その後地面を転がって距離をとる。

「くっそ……確か……シルバーウルフの得意なものは集団戦法か……」

冷静に分析をしていたけれど心はもう冷静ではなかった。シルバーウルフのリーダー代理は好戦的だが優しいやつだったのだ。そいつが俺を殺せという命令を出している。これは心にこたえた。

「はぁ・・・はぁ・・・」

俺はすぐに立ち上がる。しかしここで能力がないことと同時に俺は喧嘩が弱いことにも気付いた。もうどうしたらええねん・・・。能力に頼ってばかりだからこうなるんだよな・・・。でも俺の一撃。一撃の拳をくらわすことができたなら勝てる！腕だけは鍛えてるんでね。

「そつちが本気ならもう手加減はなしだ。本気で行く」

俺は思いっきり走る！まず最初に相手にしたのはアヤセだった。アヤセは何発ものパンチを繰り出してくるがそれを距離をとることで回避。相手の攻撃がやんだ瞬間に俺はまた全力でダッシュ！相手の懐へもぐりこむ。

「うおおおおおおおおおおおおお！！！！」

拳を構え殴ろうとするが、そこでシンがまたまたとび蹴り。しかしその何度もくらうはずがない。俺は最小限の動きでそれをよける。しかしよけた場所にまっていたのはカツヤ。上段回し蹴りをしてくるがとつさにしゃがみ、相手の足を払う。

「なっ！！！！」

驚いたカツヤの隙だらけな腹を思いっきり殴る。

「今度こそおおおおおおおおおおお！！！！！！！」  
「ぐふっ……………」

カツヤをダウンさせた。

「カツヤ！ちつくしょう！」

シンが俺にむかって突進。体をはった体当たりだった。

「ぐっ……………」

それは予想外のこと。まさか体当たりしてくるとは思わなかった。なのでそれをくらい少し圧される。

「はあああああああああ！！！！！！！」

その際に俺の後頭部を狙って全力で殴ろうとアヤセがしてきた。

「ちっ……………！」

俺は体をおされていて、封じられていたので身動きがとれず、アヤセの攻撃をモロにくらうことになった。しかし痛みが鋭い。おかしい……………ただ殴っただけじゃここまでにはならないはず。

「なる……………ほど……………な……………」

アヤセが手につけていたのはメリケンサック。いつの時代の不良だよ……………とついながら俺は地面に倒れた。視界が赤い。これは頭から出血してんな……………。

「井野宮さん……悪く思わないでください」

「これもシルバーウルフのため……」

カツヤを抱え、立ち去ろうとする3人。

「はっ！」

俺は鼻で笑った。

「!!!」

「なんで……なんでまだ立てる!?!」

俺は立ち上がった。たしかにフラフラするが先ほどの天使ほどじゃあない。これならまだいける!

「何勝手に終わらそうとしてんだよ……まだやられてねえぞ……」

「嘘だ!俺は全力で殴ったんだぞ!なんでまだ立てるんだ!」

「俺には立つしかねえんだよ!これは俺だけの思いじゃない。俺だけで行動してるんじゃないんだ!お前らは本当にこの戦争に賛成なのか!?!」

「!!!」

たじろぐ2人。俺の気迫におされたのかそれともただ頭から血を流して立っている気持ち悪い人と見られているのか分からないがどちらでもいい!

「だって……悪いのは暗き蝙蝠……」

「暗き蝙蝠が何かしたのか……」

「あいつらは俺らの仲間を殺した!?!」

「お前はその現場を見たのか？」

「……………」

「見てねえんだろ！所詮その程度なんだよ！まだ疑いのレベルだ！確信じゃない！その疑いのために戦争をおこすのかよ！関係ない人々を巻き込むのかよ！」

「リーダー代理からの命令だ・・・逆らえない」

「リーダー代理はいつも正しいのか！？リーダー代理は今混乱しているだけだ！お前らの知ってるリーダー代理はこんな無益な戦争をおこすようなやつなのか！」

「違う…………でも」

「でもじゃねえ！おかしいと思ったんなら意見を言えよ！たとえ武力行使されても耐えろよ！暗き蝙蝠にはそんなメンバーが数人いるんだ！あんたらが今のあんたらがあの数人に勝てるはずがない！」

「うるっせええええ！俺はリーダー代理に従うのみ！」

説得は無駄だな…………。そう思い構える。

「そうか。これが最後の警告だったんだがな。じゃあ、俺がお前らの想いを。言霊を砕く！」

俺らは再び構える。勝てる保証などない。でもこいつらはるかっただ。俺の気に障った。それだけがそれで十分だった。俺はこいつらの言霊を砕くべく戦いを挑んだ。

銀色の闇 f i r s t 第37話 DESIRE (後書き)

タイトルは想いです。

思いじゃないんですよ！

というわけで実質第6章といつことですよ。

書いていませんが6章ですよ。

でわ

銀色の闇 second 第38話 FRENZY

俺は銀色の闇を止めるべく商店街を走っていた。

人通りも少なく安心したのもつかの間、カツヤ、シン、アヤセという3人のシルバーウルフが俺の前に！

なんとかカツヤを気絶させたが、残りはまだ2人もいる。

「俺がお前らの想いを。言霊を砕く！！！」

このふざけた戦いを終わらすため再び戦いに挑んだ。

○

「いくぜえ！アヤセ！！！」

シンが動いた。俺の足を払う攻撃らしくしゃがみ、蹴りをくりだす。

「さっき俺がやった技だぜ！自分の技をくらうかよ！」

俺は思いっきりジャンプすることによってそれをかわした。しかし、そこでアヤセが背後に迫ってきていることに気づく。アヤセの手には木刀。こいつら意外と古風だな。

「くられ!!!」

ジャンプしていたため避けることができない。しかし俺は頭を横に動かし、無理やり避ける。もちろんそのかわり俺の肩に攻撃を受けることになった

「ぐっ……」

俺は木刀で殴られた衝撃で少しよろけた。その隙を見逃さなかった  
シンが木刀を構える。その構えは明らかに……

「居合かよ!!!」

シンがやったのは居合斬り。腹を狙ったの攻撃だった。しかしそれは居合では腹を狙うしかないということなのだ。こいつらはそこまですぐに慣れてるわけじゃない。なので居合での上段斬りはできないだろうと予測した。そして予測は当たった。

「うおおおおおおお!!!」  
「なっ!」

俺は木刀をつかむ。剣筋が見えたからこそできた技。そのまま木刀を自分に引き寄せ、そしてそれについてきた体を……

「お前らは間違っている!そしてずるいんだよ」  
「がはっ……」

シンをダウンさせた。

「さーて、次はお前だぜ」

「くそ……なめるな!!!」

やけになったのかそのまま木刀を振り下ろすアヤセ。しかしそんなもの苦戦するわけもない。ただの暴力だ。かわせないわけがない。しかし俺はあえて……

「う……そだろ……。片手白刃取り……」かたてしらほどり

「気づけ。自分たちの過ちに。そして詫びろ。俺にじゃない。勇敢なものたちに」

「くそおおおおおおおおおおおおおお!!!」

「お前らが主従関係を語るんじゃない」

ドゴッ

○

「あはーん、いい感じねーん」

ここは商店街内のビルの屋上。天使ラーエイはいた。アルミトルスは一緒ではない。

「アルミちゃんは今頑張っているから。いい感じに感情がおかしくなってきたわねー。私の愛の出番も終わっちゃったし暇だわー」



「なにはともあれ急がないとな」

俺はあのあとアヤセを倒し、また商店街内を走っている。距離はまだ遠いが人ごみがないので走りやすい。意外とスムーズに進めた。

「さっきの天使も見つかんねえし……。どうなってんだよ」

ところで今回の件にあの天使たちは関わっているのだろうか。俺には分からない。でも……

「天使のせいにはしないとやってけねえよな……」

俺の気分は最低まで落ち込んでいた。

「井野宮……天十か？」

「!?!」

不意に声をかけられる。まだ誰かわからないのにひどく嫌な予感がある。いや、まさかね。シルバーウルフときたから次は……。みたいなありきたりな展開にはならによね。ね！

「暗き蝙蝠からきた。お相手いたす」

「なんだ……?」

いろいろと古風なやつだった。人数は一人。女。黒い装束を身にまとい、黒髪のロングだった。落ちついて雰囲気がある。

「お前も俺の邪魔をするのか？」

「うむ。それはしょうがないことだ。まずお前は強いときく。私はどれほどまで戦えるのか興味があった」



銀色の闇 *second* 第38話 FRENZY (後書き)

タイトルは狂気

なんか短めになってしまいましたでしたがきりがいいところで次回にしました。

たまに更新が遅れることがあります。しかしそんなときはあの人が書いてるしなあと思ってくれれば幸いです。

でわ

「お前らが主従関係を語るんじゃないやねえ」

俺、井野宮天十はどうにかシルバーウルフの3人に勝つことができた。怪我は残っているが走れないほどじゃない。俺は銀色の闇を止めるべくひたすら走る。

そのころ、天使ラーエイ、アルミトルスも動き出していた。

「嬉し楽しみ面白いや!!!あははははは!!!」

ラーエイの出番が終了したというのは何なのか。そしてこれからおこるであろうアルミトルスの企み。

そして井野宮天十は新たな敵と出会った。

「暗き蝙蝠からきた。お相手いたす」

その少女は鉄球・鎖月さげつを持ち、井野宮に戦いを挑んだ。大きさはたいたことないただの鉄球。しかし重さはけた違いだった。

「では………参る!!!」  
「ひっ………!!」

井野宮の死闘は再び幕を開いた。



かわせるだろう。そして振り回すのに疲れたときに攻撃のチャンス！

「何を勘違いしている。これはそういう技じゃない」

「え？」

「鎖月・流れの舞い・風館咲！！！！！！」

すると相手のまわりにすごい風が集まってきた。いや、集まったんじゃない。あれは鉄球が風を巻き起こしてるんだ！まずい！足をすくわれたら終わりだ。

「くっ……」

「耐えても無駄だ。我が鎖月の風館咲には意味がない。足をすくわれて鉄球の餌食となれ」

どうする……このままじゃ俺は鉄球にやられちまう……。あー、能力さえ使えたらこんなの簡単に終わらすことができるんだけど……。

その瞬間。風邪がやんだ。

「！！……何……！」

「え？な、何？」

そして相手の近くには一本剣が落ちていた。

「我が技の弱点を把握してるだ……」

うすうすは気付いていたけれどやはりあの技は台風と同じ。台風の目のように真ん中にするどい攻撃をくわえればよかつたんだ。でも誰が……？俺はもう錬金術すらできないからな。そもそも言霊で



天使化してなくても可能なのである。

「ラーエイ……井野宮天十をお願い……」

『えー！また私なのー？』

「僕は今、手が離せないんだ……」

『わかったわよー』

「ふうー、さてとこれで邪魔ものもいなくなるわけだ……うし  
しっ」

○

「もう少しか！」

俺は息をきらして走っていた。もう少し。もう少しでリーダー代理  
の場所へ……。

「あらーん、そんなにいそいでどこに行くのかしらん？」

「!!!!……天使ラーエイ……」

「名前を覚えてくれたのね！嬉しいー」

「待ってたぜ、お前がくるのを！さっきの借りはここで返す！」

「うーん……あんたはアンジェちゃんのお気に入りだから殺す  
ことはできないのよねー」

「アンジェ……」

あの創造の天使か……。あの野郎にも一撃ぶちこまないとな。



○

「銀色の闇……起こすわけにはいかない……」  
「確かに。だがこのままではまずいな」

ここは商店街の一番小さい裏路地。暗くほとんど何も見えない。だがそこに人影が2つ。

「じゃあ、私は公園に気配を感じるのでそちらへ行ってみる」

「ああ、俺はもう少しすすんだ先にでかい気配が2つある。そこに行く」

「お互い」

「頑張るか」

その人影はどこか遠くに消えていった。

銀色の闇 third 第39話BEST DASH(後書き)

お久しぶりです。

しばらく更新が止まってました。申し訳ございません。

さて、今回のタイトルは全力疾走。

今回は主人公が走ってばかりなので……。

今回も短めになってしまいましたが時間があるときに長いのを書こうと思います。

でわ

銀色の闇 fourth 第40話 WOLFBOSS

「鎖月・流れの舞い・風館咲!!!!!!」

台風モドキを起こす驚きの技。それを繰り出したのは暗き蝙蝠の一員。しかしその台風モドキを止めたのは井野宮天十ではなく、空から降ってきた一本の剣だった。

「我が技の弱点を把握してるだど……それにこの剣は……」  
正直隙だらけだったので一撃で気絶させた。剣を見て驚いた理由も分からないままの強制退場。

「ラーエイ……井野宮天十をお願い……」

「あらーん、そんなにいそいでどこに行くのかしらん？」

「!?!」

井野宮天十の前に姿を現したのは天使ラーエイ。

「身に降る火の粉は払わないとね。行くわよ！」

「こい!?!」

電柱を虜にしての攻撃で井野宮天十は走らざるをえなかった。電柱のせいで手も足もでない。この状況を打破するべく、そしてラーエイを倒すべく再び戦いに挑んだ。

○

「残念ねー、私すごく暇になっちゃった」

「うるせー！待ってる今殴りにいってやる！！」

といいつつも電柱に追われ何もできない。俺のすぐ後ろではドガンという電柱が生きてるみたいに俺を狙っている。正直めっちや怖いっす……。

「それとお前！空飛ぶのはずるいぞー！」

「あなたも飛べばいいじゃない。能力で確か超高速移動みたいなのがあったっけ？」

「！！！」

そうか相手は俺にまだ能力があると思ってるのか！じゃあ、ここで能力がないことえおバラすのは良い手とはいえないな……。

「ま、まあ！飛べるんだけどね！地面の方がなんか立ちやすくってね  
！」

「空中じゃ立てるわけじゃないじゃない。それに私は空が好きなの。あ  
なたが合わせて」

ちっ！このわがまま天使が！どうするどうするどうする。悩めば悩

むほど答えが出てこない。錬金術も使えない俺じゃあ何もできないのか……。

「はやくしないと電柱に踏みつぶされるわよー」  
「くっ……」

実はもう俺の体力は限界。息がかなり上がってきて足元もふらついてる。やつが空中にいるせいで……殴れもしないし……ん？

「空中……？」

そういえばこいつ一度も地面についたところを見ていない。ずっと空中。今回だって電柱より高い位置に……。

「これは予想だからできるかわかんねえがやるしかねえ！」  
「なーに？ やつてごらんなさい？」

俺は最後の力を振り絞り絞りビルの中に入る。ここは商店街のため背が高いお店だつてそこらへんにある。

「うおおおおおおおおおおお！！！！」

電柱に追われながら階段を上る。後ろではちゃんと電柱がついてきている。お店普通に壊してるけど大丈夫だろうか……。確かここのお店の名前はイズミデパート。ここらへんのものにはなんでもかんでもイズミという単語がつく。なんでだろうか。

「よっし！ 屋上ー！」

屋上についた。これが俺の最大の策。

「な・・・あなた・・・まさか・・・」

「そう。お前は愛を与えるといった。愛とは与えた方が与えられた方に命令できるのか？そう思ったんだ。そしてお前が空中にいるということに気付いた！」

「へえ・・・やるじゃない・・・」

「お前は高さでどちらが命令を下せるかを決めていたんだ！だから操る物よりも上に居た！しかし今は電柱の方が高い！これでお前の愛の命令はできないわけだ」

「<sup>レ</sup>明察」

「しかもそこから動かないところをみると操るものよりも少し上に居続けなきゃいけないみたいだな」

「すごいわね、あなた」

もう電柱は追ってこない。それどころか動くとうもしない。ただの物になってしまったようだ。

「どう・・・だ・・・」

「でも体力的には限界みたいね」

く・・・そ・・・息を整える時間はないみたいだな・・・。ちっ・・・体が動かねえ。

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

「うーん、ここでとどめになりそうね」

ガラガラゴトツゴト

「な・・・それはなんだよ・・・」

「何？驚くことかしら？今まであなたに見せてきた愛と同じ。i。





る。  
シルバーウルフ総長志野野辺雄大兼大和大神。天使との戦闘が始ま

銀色の闇 fourth 第40話 WOLFBOSS (後書き)

最近更新できなくてすいません。

銀色の闇。ようやく進みだしました。自分でも安心です。

タイトルは……意識したほうがいいですね……。

シルバーウルフの総長という意味です。

でわ

銀色の闇 fifth 第41話BATBOSS

「あなた……まさか……」

「そう、お前は高さでどちらが命令を下せるかを決めていたんだ！」

天使ラーエイの能力の謎を知った井野宮。ラーエイは愛の天使ではなく位の天使。自分のいる高さが操る物よりメートル高ければ命令できるという能力。

「やるじゃない……」

しかし、ラーエイはその能力を使い、全ての金属などを集め、物の塊をつくりだした。

「終わりね、井野宮君！」

「くっそおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！」

その瞬間その塊は崩れ、井野宮は無傷だった。天使ラーエイにぶつかり無理やりメートルの範囲から脱出させたのだ。

「何すんのよー……あら？あなたは……」

「志野野辺雄大。シルバーウルフの総長……大和大神でもある」

「志野野辺君でしょ、知ってるわ。毎日見てたもの」

「変わった告白だな。最近感じる視線はお前だったのか」

「害がないようなら無視。あるようなら消せという命令だったの」  
「誰からのだ？」

「答えない。黙秘権。でも志野野辺君。あなたは害があるようね」

「俺は志野野辺じゃない。今は大和大神だ。志野野辺は井野宮天十に家からでるなど言われているからな」

「そう、悪かったわ。今は志野野辺君じゃないのね。大和大神君」

天使はほほ笑む。ここは井野宮天十がいる場所から500メートル離れた場所。ビルがおおい高層地区と呼ばれる商店街の一部だ。

「そついえば途中から人がいないようだけど……あなた何かした？」

「無関係の人は巻き込みたくないからな。でも俺は何もしてない。もうちよつど商店街が閉まる時間なんだ。」

井野宮天十が家から出てから約2時間。まわりはかなりの暗闇に包まれている。

「で、私に何か用かしら？」

「用？まあ、そつだな。とりあえずお前は俺の仲間を殺したからな」  
「ばれてたんだ。タツヤ君だっけ？ごめんなさいね、暗き蝙蝠と争わせるにはこれしかなかったの」

「そうか……やはり……」

そういつて志野野辺こと大和大神は刀を取り出す。木刀だ。大和大神は白い学ラン。下はダボダボで上は前を開き、胸、腹には包帯を巻いている。古風というか一昔前の不良のようだ。頭には白いはちまき。そして髪の毛は逆立っている。

「まるで狼ね」

「そうだろ……俺はお前を……倒す！」

すごいスピードで木刀を前に突き出す。それをラーエイは体をひねり最小限の動きで舞うようにかわす。ラーエイはもうすでに少し浮いている。

「我が愛に応えなさい！」

鉄パイプ三本が大和大神にむかって投げられる。パイプは生きているように不規則に動く。

「ふっ！」

まず大和大神は一本目のパイプの端を木刀で叩き、自分からそらす。そのパイプは回転をはじめブーメランのように曲がり二本目をはじめく。三本目はその場から横に飛ぶことで回避。すぐさま立って木刀を構える。

「まるで隙がないわね」

「一応リーダーだからな。強くなければだめだろう。それにお前の腕力もすごいな」

「腕力？……ああ、ありがとう」

大和大神は気付いてなかった。こいつが人間じゃないということに天使だということに。普通の人間なら気付かないであろう。その上、天使化だつてしていない。姿は人間そのもの。

「（なるほどね．．．．．まだ天使を知らないんだ。井野宮君のこととも知らないみたいね．．．）」

「どうした？」

「いえ、なにも」

大和大神は動きだした。木刀の刀身を体に隠し、居合斬りのように斬る。さすがの天使もかわせなかったのか、マンホールを盾にしていた。しかし大和大神の一撃はそのマンホールを吹き飛ばした。とつさにマンホールの端を叩いたのだ。それによりマンホールは吹き飛んでいった。

「へえ、あなたも腕力強いのね」

「お前も少し浮いているけど．．．．．なんの手品だい？」

「手品．．．．．ね。私の手品にはタネがないのよ」

今度はラーエイから動き出した。周りには自転車が2台。それを順番に飛ばしてくる。大和大神は素早い横ステップでかわす。次はまたパイプだ。パイプ三本は一斉に右、左、真正面の三方向から襲ってくる。それを上にジャンプすることでパイプ同士をぶつけさせてかわす。

「戻れ、自転車」

「！！」

上から自転車がぶつてきた。上に飛んでいるためかわせない。しょ



○

「あれー？ラーエイが戦っているのかー？悲し恨み羨ましいぞ」

ここは公園。天使アルミトルスは自分の仕事をある程度終え、休んでいるとラーエイの能力を感じた。

「僕も戦いたいなー……………って言ってるそばからか……………  
……………でできな……………」

「……………ばれてたか……………」

公園の木陰から人がでてきた。全身を黒い服で覆い、服はピッチリしたスーツなのに袖と足の裾だけダボダボ。袖に至っては地面につきそうなくらい長い。髪も漆黒で長い。袖と裾以外はどこかの映画にでてくる最新のスーツをきた怪盗のようだ。

「君はだれ？僕はアルミトルス」

「私は……………」

「撫子蝙蝠なごしひつじょう。暗き蝙蝠くらきひつじょうのリーダーだ」

死闘が本格的にはじまる。

銀色の闇 f i f t h 第41話BATBOSS(後書き)

また最近更新できなくてすいません・・・。

今回のタイトルは暗き蝙蝠のリーダーという意味で。

急に寒くなってきましたね・・・

すごく風邪気味です。

でわ

銀色の闇 Sixth 第42話 WAR

「自転車よ！戻れ！」

「！！！」

天使ラーエイの操る自転車で一撃をくらった、シルバーウルフのリーダー大和大神こと志野野辺雄大。包帯からにじむ血。そのダメージはでかかった。

「操るだかなんだかしらないがこのぐらいで立ち止まらない……」

「あなた……井野宮君と似てるわね……」

そのころ時を同じくして違う場所。

「君はだれ？僕はアルミトルス」

天使アルミトルスに忍び寄るのは黒い影。そこに現れたのは……

「撫子蝙蝠。暗き蝙蝠のリーダーだ」

○





「ああー！どこだよー！！！」

「何をしている」

俺にむけて放たれたのは黒い鉄球。しかもその数3。

「おわっ！」

ガン！ガン！ガン！

次々と地面をえぐり着地する、鉄球。俺はそれをギリギリですべてかわした。かわしたというより相手に当てる意思がなかったといえる。

「そこは通してもらおう。もう少しでシルバーウルフに会える」

「暗き蝙蝠リーダー代理……」

俺は移動中の暗き蝙蝠と出会った。俺は小さな道をとおりつつ移動したためちょうどシルバーウルフと暗き蝙蝠の中間地点にきていた。しかしここでもたもたしてたらシルバーウルフとぶつかる……。

「お前たちは手をださずにそこで待ってる。すぐに終わらす」

「姐さん！でも……」

「いいから、そこにいろ」

「いいのか？後ろのやつらは」

「思いあがるなよ、井野宮天十。お前は私一人で十分だ！」

その瞬間暗き蝙蝠の袖から両手で10本の鎖つき剣を出した。それはすべての確なコントロールによって俺へと狙いをつける。

「くっ！」

一本目を体を少し横に動かすだけでかわし、足元を狙った二本目はジャンプでかわす。そしてすぐに電柱のうしろにかくれ、3本目、4本目を電柱を盾にすることでかわす。5本目をリーダー代理にむかって走ること回避。うしろの地面に刺さる。6本目は前に飛びこんでやりすこす。その後すぐ立ち上がり前転。7本目をかわす。

「ちいつ！あと3本！」

そこらへんにあつたでかい石をつかみ、8本目の鎖にあてる。狙いのそれた8本目は見当違いのところ刺さる。9本目は石をつかむ際に持っていた鉄パイプではじく。

「ぐっ！・・・うおおおおおおおおお！！！」

ガキンツ！

9本目も回避。10本目はバカ正直に正面からつつこんできた。それをパイプで弾こうとしたが鎖が動かされ、急に方向かわる。

「なっ！」

横に飛びこんだが少し斬られた。休んでる暇はない。俺は全力疾走で一気にリーダー代理のところへ行き・・・

「うおおおおおおおおおおお！！！！！」

拳をつくり殴ろうとするが、目の前に鉄球を持ってこられる。

「くそっ！」

俺はしぶしぶ手をひき、後ろへ距離をとる。

「どうした？殴ってみる。私の数多の武器をしりぞけられることができればなあ！」

暗き蝙蝠は武器の扱いに長けている。その話はやはり本当だったのだ。

○

「暗き蝙蝠のリーダー？なんでそんなやつがここに？」

場所は商店街内の公園。天使アルミトルスの前に現れた暗き蝙蝠のリーダー。

「なんでここに？だと。そんなのお前が一番わかっているんじゃないのか？シルバーウルフに暗き蝙蝠が悪いと思いきませたのはお前らだろ」

アルミトルスは思う。お前らということとはラーエイはもうすでに戦っていたのか・・・と。いきなり天使化の波長が伝わったため何事かと思ったのだ。

「お前らがシルバーウルフのメンバーを殺し、その姿をわざわざ看護師などに見せる。暗き蝙蝠がきるような服装をしてな。まあ、単純な仕掛けだがリーダー不在で不安定なリーダー代理やメンバーには効いたらしい。」

長い袖を動かし、話す。しかしその目は怒りで満ち溢れていた。

「なるほど、僕と戦いたいということだね。面白いことをいうんだね。でも……ちょうどいい。気分転換しようと思ってたんだ」

「では……参る」

「きなよ。嬉し喜び楽しい遊びの始まりだ!」

袖からだしたのは黒い剣。それは井野宮天十を狙う竜巻（暗き蝙蝠のメンバーがつくりだした竜巻）を消した剣だった。台風の目を狙うかのようなコントロール。それは撫子蝙蝠だったのだ。

「いけ、我が剣よ」

一本の剣がアルミトルスを襲う。しかしその場にアルミトルスはいなかった。瞬間移動に見えたがそれは井野宮天十の『飛』と同じように超高速移動。しかしこれはおまけである。アルミトルスの能力は……

「ひゃっはあああああああああ!!!!!!」

武術。アルミトルスのかかどが暗き蝙蝠の肩にあたる。

「ぐっ!」

ボキリという嫌な音がきこえたが骨が折れたわけではなさそうだった。

「意外とかたいね・・・人間の肩って。そしてちゃんと自己紹介しようか。僕は感情の天使アルミトルス」

「私は・・・暗き蝙蝠リーダー撫子蝙蝠。またの名を木野白泉だ」

「ああ・・・木野白泉ね・・・。よろしく委員長さん」

3人それぞれの戦いが行われた。

銀色の闇 Sixth 第42話WAR（後書き）

タイトルは戦争です。これは戦争を止めるための戦争ですがね。

完璧に秋！冬へとむかつてる感じがします！

寒い寒い……。

あつたかいものがたべたいなあ……。

でわ



「ひゃっはああああああああああああああああああ！！！」

アルミトルスは武術の天才。武術の天使。そして司る能力は感情。

「僕は感情の天使、アルミトルス」

「私は暗き蝙蝠のリーダー、撫子蝙蝠なでしこつむり。またの名を木野白泉だ」

○

「くっそ！あんなのありかよ！こっちは丸腰だぞ！」

井野宮天十は暗き蝙蝠のリーダーにむかって文句をいう。それが届くことはありえないことだが。

「何もしないならここで私はお前を殺したりはしない。大人しくさがってくれ」

「そんなもんでさがれるかよ！俺は俺だけの理由で戦ってるんじゃないんだ！梨菜や暴力を反対した人の理由も背負ってんだよ！」

「そんなもので・・・そのような小さいものを背負ったところで私たちにはかなわな・・・」







俺は剣についている鎖を思いつきり蹴ることによってギリギリで後ろに下がる。しかし完璧にはかわしきれない。両肩を少し斬られた。

「ぐっ！」

「燕返し」

投げた剣を高速で戻して斬り返してくる。

「がっあああああああああああああああああああ！！！！」

俺は足を斬られた。立っていられなくて崩れ落ちる。

「もう終わりだ。今度こそ今度こそ……な」

剣は容赦なく俺にむかって放たれる。

銀色の闇 *seventh* 第43話 CONFRONTATION (後書き)

タイトルは対決です。

時間がなくてまた短くなってしまいました。

最近更新も途絶えてましたすいません・・・。

不定期なのでいつ更新するかわかりませんが、よろしくお願いします。



パン！

また銃声のような音。それは暗き蝙蝠リーダー代理から発せられているものではなかった。それは本当の銃。そこからうたれた弾は剣を弾き、井野宮を守った。

「なっ……」

思わず剣を手からはなす、リーダー代理。そして考える。

（実弾じゃない……。これは空気砲？いや、この感じは弾があったな……。練習用の強化コルク弾か……。この弾を使っているのはうちの暗き蝙蝠のみ……。ってことは……）

「反逆者どもか……」

弾がきた方向を見るに……。ビルの上？俺、井野宮天十はあたりを見まわし、見つけた。ビルの上に。

「梨菜！……！！」

「井野宮さん！ここは私たちにまかして下さい！」

「たち……？」

すると俺の目の前に3人の女の子がいた。どの子も暗き蝙蝠の拠点でやられていたやつらだった。

「包帯をまかせていただきます。暗き蝙蝠特製の強固包帯です。うごきにくくなりますが少しの間なら走れますよ」

3人のうちの一人が俺に言った。

「おい！ちよつと待てよ！お前らあんなにケガしてただる。ここは俺が……」

「だいじょうぶです、私たちは」

俺に包帯を巻きながら言う。明らかに大丈夫じゃない。それぐらいは俺でもわかる。でもこいつらは笑顔で言う。

「あなたの想いは聞きました。あとは私たちに託してください。そしてシルバーウルフの方をよろしくお願いします」

パン！

梨菜が発砲する。おそらく梨菜が使っているのはライフル。しかも高性能なやつだ。それじゃなきゃこの距離から正確に当てることなどできない。梨菜も暗き蝙蝠の一員。武器の扱いに長けている。

「ちつ！邪魔だ！！」

リーダー代理が剣を飛ばす。その瞬間俺に包帯を巻き終え、巻いてくれた子がナイフを取り出し剣を受ける。しかし受けきれない。相手の力が強すぎる。そこをうまくナイフを滑らすことによって受け流すことに成功していた。

「はやく！はやく行ってください！」

「くつ……分かった。全員必ず生きるよ」

○

「あらーん、もう終わりかしら？」

天使ラーエイは笑みをうかべていた。勝利確信の笑み。相手の大和  
大神は鉄パイプの山からでてこない。

「つまんないわねえ……………残念ねえ……………」

ふふふと笑う。しかし……………

ガラッ

「！」

鉄パイプの山が少し動いた。

「そんな……………まさか……………」

ガラガラガラガラガラ！

「よお！久しぶりだな」

大和大神はほとんど無傷だった。

「なぜ！なんで生きているの！？」

「さあ？俺にもわからないな。正直死んだと思ったんだが」

「！！」

ラーエイは考えを巡らせる。

（まさか私の能力が効かなくなってる？それで鉄パイプのコントロールができなくてわずかな隙間ができる。そこに逃げ込んだということなの・・・）

しかし

（なぜ？私の能力が効かない理由は？！）

そう考えつつもしかし確実に一つの可能性を思いつく。

（この子・・・私たち天使のことを信じていない！？）

天使の弱点とは一般人。何も知らない一般人である。天使とはそもそもこの人間界には存在しない。信じなければいけないものと同じなのである。普通の人間ならラーエイの能力、『地位』や天使の羽、輪を見れば天使とまでは思わなくても『異常』だと分かるはずだろう。しかし・・・

（この大和大神。いや、志野野辺雄大は・・・鈍すぎる！）

そう志野野辺雄大は鈍かった。そして現実主義者だった。今回はそれに助けられたのだ。天使なんて信じてない。そもそもいないと思

っているため、天使としての能力を封じられてきているのだ。

「そんな・・・バカな・・・」

「?どうした?」

「あなた!私なんなのか分かっているの!??」

「おかしなことをきくな・・・」

「天使よ!天使!」

「天使?ああ・・・天使な。天使の格好だったのか、それ」

「へ?」

「悪いな。俺にはティンカー〇ルにしか見えなかった」

「!?!」

「光の輪があるから違うのかなーとか思ってたけど・・・うん、すごいクオリティだな」

「そんな・・・」

志野野辺は井野宮との電話の伏線は回収したぞというような笑みを  
見せ・・・

「なんだかわからんが・・・構えろ。俺はまだ戦うぞ」

○

「ふうむ、ラーエイも派手にやっってるみたいだねー。僕達はまだ続けるの？」

その場にいたのは天使アルミトルスと……

「続けるに決まってるだろう……」

ボロボロの暗き蝙蝠リーダー、撫子蝙蝠こと木野白泉だった。

「でも……つまないんだけど。僕の本当の能力は武術じゃないんだよ。それすら使う機会がなさそうなんだけれど……」

「ふむ。そうかそれがお前の本気じゃないんだな」

「?……だったら何？まさか君はまだ全力をだしていないなんて言うんじゃないだろうね」

「そんなことはない。私は手を抜くようなマネはしないからな」

「じゃあ……」

「ただ。ただ私は腹が立っている。お前、本気を出せ。手を抜かれるのが一番嫌いだから私はそれをしないんだ」

「ふうん、一理あるかもね。自分がされて嫌なことは他人にしない……じゃあさ」

そう言つて足に力を込めるアルミトルス。

「僕を本気にさせてみなよ」

上段蹴り。中段蹴り。それらを全てくらう木野白。しかし袖から出した鉄球を振り回し、相手の足を弾く。そして一瞬の隙を見逃さず、鎖つきの剣を投げつける。それらを拳で全て殴るアルミトルス。その間にも木野白は電柱を使い空にいた。とんでいたのだ。

「は！」

「くっ」

思わず剣の攻撃を受けた。手が裂かれる。

「本気だせそうか？」

「………君、生意気」

全ての戦いは最高潮をむかえる。

銀色の闇 *eight* 第44話 *SERIOUSNESS* (後書き)

タイトルは本気。

約1カ月ぶりの更新。遅れて申し訳ないです。

実はもう1つ王道を考えていますのでそちらもよろしくお願いします。

理系少女と文系少年も現在更新中です！

でわ

銀色の闇ninth 第45話ONE

「反逆者どもか・・・」

井野宮天十の窮地を救ったのは暗き蝙蝠に逆らい倒れていたはずの梨菜たちだった。梨菜たちは持ち前の武器扱い能力を使い井野宮の代わりに暗き蝙蝠のリーダー代理を倒す仕事を受け持つ。

「はやく！はやく行ってください！」

「分かった。必ず生きるよ」

そのころシルバーウルフのリーダーこと志野野辺雄大は鈍さを生かして戦っていた。

（私たち・・・天使のことを信じていない！？）

そう、天使とは信じられたものにしか存在するように見えない幻想のようなもの。志野野辺はまったく信じていなかったのだ。そのせいで天使の力は弱まり続ける。

「構えろ。俺はまだ戦うぞ」

また一方。暗き蝙蝠のリーダー木野白泉は苦戦していた。

「僕の本当の能力は武術じゃないんだよ。それすら使う機会がなさ

そうだけど」

このようなふざけた発言に木野白は怒る。

「お前、本気を出せ」

そしてその怒りから天使に一撃をくらわすことができたのだ。

それぞれの戦いは終わりにむけ、走る。

○

「ここら・・・へんか・・・」

俺、井野宮天十は未だに全力疾走していた。いつまでこれ続けるんだよ。肺は痛み、息をするのも苦しい。そんな俺はシルバーウルフを探している最中だった。商店街のルートによるとここらへんなのだが・・・。

「あっ！」

「・・・・・・井野宮・・・天十」

シルバーウルフリーダー代理とそのメンバーたち。どいつもこいつもものすごい殺気だった。

「お前らを止めに来た」

「分かっている。残念だが俺はお前に止められるためにきたんじゃないぞ」

「……」

「いくぞ。手加減はしない」

「こい」

リーダー代理はメリケンサックをはめ、おもいつきり殴ってくる。それをギリギリでかわした俺は後ろへ逃げながら距離をとる。相手は完璧近接系。拳の距離を見極められれば。

「ちょこまかと……!」

「遅いぞ」

「そうかなら……」

そう言っつてポケットから石をとりだすリーダー代理。なんだ？石を投げるのか？

「はあああああああああ!!!!」

「!?!」

リーダー代理はその石を殴って飛ばした。その威力はただ投げたときよりも格段に強い。

「く……そつ!」

銃弾のように変化した石はもはや兵器。後ろに走って逃げる。外れた石は軽くコンクリートに埋まる。貫きはしないもののめりこんだ。

「お前本当に人間かよ!」

「それは俺がお前にききたいな。去年の不思議な技。あれはなんだ

「？」  
「！！！」

能力、言霊のことか。最近は空気だが俺の能力は言霊。言葉に意味をのせる技。一般人にしてみれば不思議以外のなにごとでもない。俺は距離をとり、石を全てかわず。

「疑問を疑問で返すなよっ！」

俺は道に落ちてた鉄パイプを投げつける。さっきの天使が使ってたパイプだ。しかしそれも拳でふせられる。

「ぐっ・・・」

しかしノーダメージとまではいかなかったようだ。やはり生身の間。そこをうまくつけば勝てるかもしれない。いい作戦なんてまったく思いつかないんだけどね。

○

パン！

銃声が響く。

「死にぞこないの雑魚どもがッッ！」

暗き蝙蝠リーダー代理は苦戦していた。というより苦戦を強いられ

ていた。

(こいつらっ……！チームワークが半端じゃない！)

近接が得意な2人が攻撃に出る。それをかわしたと思ってても梨菜の一撃をくらいそうになる。それを武器で防いだ時、わずかな隙を逃さず2人がナイフでたたみかけてくるといった具合だ。

(梨菜の位置はだいたいわかる。けれど攻撃する暇がない。こちらから何もできない！)

「リーダー代理！今、手を貸します！」

リーダー代理派の人間が手伝おうとしてくるしかしリーダー代理は・

「くるんじゃねえええええ！」

「……！」

「これは私の戦いだ！手をだすな！」

「はっ、申し訳ございません」

本来暗き蝙蝠は個人戦を得意とするしかしこの3人は集団戦。これが暗き蝙蝠が誇る唯一の集団連中。そして暗き蝙蝠幹部。

「これがチーム『超音波』ということか……」

何かをしても何もしなくてもその音だけでやられている。聞くだけで。聴くだけで。

「面白い。私を倒してみせよ」

「倒す？」

すると超音波のうちの1人。ツインテールのナイフ持ちが言葉を発した。

「私たちはあなたを殺すつもりで挑んでるんです」

そしてもう一人、ショートヘアーのナイフ持ちが

「だからあなたも全力で挑んでください。私たちを殺す心意気で」

梨菜が言う。

「死んでください。みんなのために」

「はっ！幹部風情が代理に敵うと思うなあっ！」

代理が先に動く。武器を駆使した攻撃。まずはチェーン付きの剣を投げてくる。それをツインテールがかわし、そしてその隙に梨菜が銃を撃つ。それは袖からでたでかい鉄球で防がれ・・・その袖からは10本の剣がでていた。

「串刺しだ」

しかしナイフ持ちの2人はそれをうけながし、梨菜も銃弾で防ぐ。しかし梨菜は銃弾でふさぐだけを考えていたわけではなかった。

(この数の剣を出したのはあなたの失敗です。あなたは少し頭を冷やすことをおすすめてみましょう)

そして一本の剣に狙いをさだめる。

(一本の剣を操れなかったらそれは残り9本にも影響する。それを狙って……)

放つ!

銃弾は一本の剣を弾き、その弾かれた剣が他の剣も弾いていく。

「そ、んな……」

代理は落胆する。その瞬間を逃す2人ではなかった。ナイフ持ちは一気に代理を倒して、首元にナイフをつきつける。

「代理!」

「動くな」

「くっ……」

「動いたら代理の首はねちやうよん」

「お前らに人殺しなどできるものか!」

「もうよせ、お前ら」

その言葉を言ったのは代理だった。

「これは私の負けで頭が負けたらお前らの負けでもある」

「しかし……」

「ありがとう」

「!?!」

「私はこんなにも幸せだったのか。まわりには私の身を案じてくれる人がいる。それだけでなんと幸福なものか……」

「『超音波』よ。あとは頼んだ」

「は!暗き蝙蝠『超音波』。あの少年を全力で手伝います!」

1つ目の戦闘が終了した。

銀色の闇n i n t h 第45話ONE(後書き)

どうも、お久しぶりです。

この小説を更新するのはまた1か月ぶりになってしまいました。

次はもっと間を開けずに頑張りたいです。

でわ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2828/>

---

元主人公、今は脇役願望。

2011年1月17日08時30分発行